OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代モンゴル語における反義語の研究
Author(s)	金, 書包
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/74
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

博 士 論 文（2008年度）

現代モンゴル語における反義語の研究

大阪大学大学院言語社会研究科

言語社会専攻

金　書　包

大阪大学大学院言語社会研究科

博　士　論　文

題目　現代モンゴル語における
反義語の研究

提出年月　2009年3月

氏名　金書包

現代モンゴル語における反義語の研究

目次

はじめに

第一章　序論

一　研究課題の選択

二　研究課題の範囲

三　研究課題の方法

第二章　モンゴル語における反義語研究の現状

一　反義語研究の概況

二　反義語研究に対する誤解

第三章　モンゴル語における反義語の特徴

一　意味的特徴

二　構造的特徴

三　民族的特徴

第四章　モンゴル語における反義語の分類

一　オトハラソによる分類

二　品詞による分類

三　過渡的な意味による分類

第五章　モンゴル語における反義語研究の
意義深さについて

一　特別な反義語

二　反義語と同義語

三　反義語と反義関係

四　反義語と否定関係

第六章　モンゴル語における反義語の役割

一　使用の役割

二　形成の役割

三　教育の役割

四　辞典編纂の役割
おわりに
一　論文の独創性
二　論文の発展性
参考文献

現代モンゴル語における反義語の研究

―― 日本語要旨 ――

反義語は世界の全ての言語に存在している普遍的要素である。反義語は意味論の重要な位置を占めており、古今東西の学者に研究されてきた。モンゴル言語学における意味論の研究は未発達で、モンゴル語意味論の中でも反義語研究は特に不十分である。これまで、モンゴル語における反義語の研究は詳しくなされておらず、まだ氷山の一角しか見えていないと言える。これは意味論の複雑性、多様性、抽象性などの客観的な原因とモンゴル語研究者達がモンゴル語における反義語に対して研究を見落としてきたことと関係があると考えられる。しかし、客観的原因より主観的原因のほうが大きいと思われる。そこで私は、先行研究の成果を活用しつつ、モンゴル語の反義語を総合的に、体系的に研究することを目指している。本研究課題は、論文編と辞典編の二つの部分から構成されている。

研究論文は、「はじめに」、「第一章」、「第二章」、「第三章」、「第四章」、「第五章」、「第六章」、「おわりに」という８つの部分から構成される。「はじめに」では、この研究論文の構成と内容を簡単に紹介する。「第一章」では、この研究課題を選択した理由について述べ、さらに課題範囲、研究方法に言及する。具体的に言えば、この研究課題の選択について主観的理由と客観的理由に分けて説明する。研究課題の範囲はモンゴル語における単語反義語と連語反義語という二つの種類にわけて説明する。研究方法について本論は、統計的方法、構造分析的方法、図式化方法、意義素分析方法という四つの方法を使用する。その中で、統計的方法、構造分析的方法、図式化方法という三つの方法を用いて、モンゴル語における反義語を分析するのは初めてのことである。「第二章」では、モンゴル語における反義語の研究現状について述べる。つまり、モンゴル語における反義語のこれまでの研究概況と誤っている問題について分析する。「第三章」では、モンゴル語における反義語の特徴、すなわち、意味的特徴、構造的特徴、民族的特徴を分析する。意味的特徴はモンゴル語における反義語の基本的特徴であり、その中で対等性はモンゴル語における反義語の最も重要な特徴であると同時に反義語であるかどうかを検証する基準である。モンゴル語における反義語は、意味の点で対立関係を基に、形態の形式の同一と付加的意味の同一も考慮する必要がある。形態の形式及び付加的意味の同一がなければ、意味の点のみで対立関係になっても反義語になることができない。モンゴル語の反義語は意味の対立関係、形態の形式が同一及び付加的意味が同一でなければならない。つまり、モンゴル語の反義語はその三つの要求の集合体である。そのため、モンゴル語の反義語とは、対等性の条件に一致す

る語である。構造的特徴には、単語反義語の構造的特徴と連語反義語の構造的特徴という二つのジャンルにわけて説明する。単語反義語の構造的特徴について語幹異同反義語と語幹同一反義語という二種類にわけて、語幹異同反義語も＜反義語＋接尾辞＞と＜非反義語＋　接尾辞＞という二種類にわけて説明する。語幹同一反義語もさらに、受身形の反義語と二語幹反義語という二種類にわけて説明する。＜反義語＋接尾辞＞という形式の反義語も＜反義語＋同一接尾辞＞と＜反義語＋異同接尾辞＞という二種類にわけられる。＜非反義語＋接尾辞＞という形式の反義語も＜非反義語＋同一接尾辞＞と＜非反義語＋異同接尾辞＞という二種類にわけられる。これまで、モンゴル語における反義語の研究対象は単語のみに限られてきた。これは、モンゴル語の反義語研究の対象となる語の一部分を研究したにすぎない。換言すれば、もう一つの重要な研究対象である連語反義語を見落としてきた。単語のみを対象として反義語を研究すると、モンゴル語における反義語の特徴と性質を全面的に明らかにすることができない。更に、モンゴル語における反義語の構造のモデルについて全面的に明らかにすることができない。したがって、モンゴル語の反義語研究は単語反義語と連語反義語を共通に研究しなければならない。モンゴル語の連語反義語の構造的特徴について詳細に説明するために、連語反義語の構造形式、連語反義語の意味関係、連語反義語の対立関係などの三つの角度から分析する。その中で、連語反義語の対立関係の種類は多く、しかも構造は複雑であり、全部対立関係の反義語、対等対立関係の反義語、後語対立関係の反義語、前語対立関係の反義語、整体対立関係の反義語 I、整体対立関係の反義語 II という六種類にわけられる。この六つのジャンルの対立関係の詳しい分析がモンゴル語における連語反義語研究のポイントである。民族的特徴は主にモンゴル語の反義語と他の言語の反義語について比較して説明する。民族的特徴は言語のみの研究ではなく、社会、歴史、民俗などに関する複雑な研究である。言語は民族の特徴であるので反義語も当然民族の特徴を持っている。これは、国家、または地域の生活、文化、習慣、環境の差異によって形成された。こうしたことは反義語の民族特徴の基礎である。「第四章」では、モンゴル語における反義語の分類、すなわち、オトハラソ（udqalasu）による分類、品詞による分類、移動的な意味による分類を行う。具体的に言えば、オトハラソによる分類は一つのオトハラソにおける反義語と複数のオトハラソにおける反義語という二種類にわけて、さらに一つのオトハラソにおける反義語も一つのオトハラソに一つの反義語と一つのオトハラソに複数の反義語という二種類にわけて説明する。複数のオトハラソにおける反義語にも、一つの語の複数のオトハラソにおける反義語と反義語の複数のオトハラソ

における反義語という二種類にわけて分析する。品詞による分類は名詞類の反義語、動詞類の反義語及び不変化詞類の反義語という三つの種類にわけて説明する。さらに、名詞類の反義語にも名詞の反義語、形容詞の反義語、代名詞の反義語、時間空間の反義語とわけて説明する。不変化詞類の反義語は副詞の反義語、助詞の反義語、待遇詞の反義語とわけて説明する。モンゴル語の品詞は大きく名詞類、動詞類、不変化詞類という三種類にわけて研究されている。その中で、主に名詞類と動詞類における反義語について研究され、不変化詞類における反義語は研究されなかった。これは、モンゴル語の反義語研究のもう一つの欠点である。数について、モンゴル語の名詞類と動詞類における反義語は極めて多数であり、不変化詞類における反義語は非常に少数である。反義語における研究対象として、不変化詞類における反義語を研究しなければならない。品詞に関するモンゴル語の反義語について特に説明することは、これまで、モンゴル語の反義語について説明した著作と論文には、モンゴル語の形容詞反義語の数が一番多いと説明されている。しかし、これは誤解である。モンゴル語の反義語では、動詞反義語の数は一番多いのである。移動的意味による分類には、相補反義語と両極反義語という二種類にわけて分析する。相補反義語とは、中間に移動的意味がない反義語である。相補反義語の特徴は事物を二つの状態にしか分けておらず、その間に三番目の概念を表す語が存在しないのである。両極反義語とは、中間に移動的意味ある反義語である。両極反義語は、さらに一つの移動的意味ある両極反義語と多数の移動的意味ある両極反義語という二種類にわけられる。中間の移動的な意味がその反義語の両極の連続性である。「第五章」では、モンゴル語の反義語研究に存在している意義深い問題について分析する。モンゴル語における反義語研究には様々な意義深いことが存在している。これは、モンゴル語の反義語研究において特殊なことであり、同時に見落とすことのできない研究課題である。しかし、こうした課題については、これまで研究されていないのである。具体的に言えば、特別な反義語、同義を示す反義語、反義語と反義関係、反義語と否定関係についての研究である。「第六章」では、モンゴル語の反義語の役割について述べる。モンゴル語学者達は、モンゴル語の反義語の役割について重要な研究対象として分析して、説明してきたが、主に使用の役割について限られてきた。本論では、モンゴル語の反義語の役割について四つの点から分析する。つまり、使用の役割、形成の役割、教育の役割、辞典編纂の役割ということである。そうすると、モンゴル語における反義語の役割について全面的に説明することができるだろう。「おわりに」では、以上述べた内容をまとめると同時に本論の独創性と発展性について述べる。研究論文にとって、

独創性と発展性はキーポイントである。実際、これは、この研究課題にいったい何を書き、どれくらいまで分析したかという質問に対する答えである。

本論の科学的及び学術的価値を高めるため、モンゴル語における反義語を収集し、辞典として編纂した。辞典は参考書として、学術研究のためだけではなく、日常生活の中で、広く使用される。これまで、モンゴル語に関する様々な辞典が出版されており、しかも種類も豊富であり、成果を得てきた。学生向けのモンゴル語反義語小辞書が出版されてきたが、学術研究向けのモンゴル語反義語辞典は出版されていない。したがって、学術向けのモンゴル語反義語辞典を編纂する必要がある。本書は、上部と下部という二つの部分から構成されており、上部は単語における反義語であるが、下部は連語における反義語である。その中で、単語における反義語は５４０組であり、連語における反義語は１２０組であり、合わせて６６０組の反義語である。また、本書の反義語の注釈は、『モンゴル語辞典』の注釈に基づき注釈を付した。これが、辞典編のことである。

この研究課題の中では、論文編は理論的なものであり、辞典編は実践的なものである。理論と実践の両面から研究を行うことで、モンゴル語における反義語研究がより詳しくより深いものになると大いに期待できる。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はじめに

反義語は世界の全ての言語に存在している普遍的要素である。反義語は意味論の重要な位置を占めており、古今東西の学者に研究されてきた。モンゴル言語学における意味論の研究は未発達で、モンゴル語意味論の中でも反義語研究は特に不十分である。これまで、モンゴル語における反義語の研究は詳しくなされておらず、まだ氷山の一角しか見えていないと言える。これは意味論の複雑性、多様性、抽象性などの客観的な原因とモンゴル語研究者達がモンゴル語における反義語に対して研究を見落としてきたことと関係があると考えられる。しかし、客観的原因より主観的原因のほうが大きいと思われる。「反義語は、意味論の本でしばしば無視され、辞書のなかに席を通常与えられていないのは、驚くべきことである」[1)]。そこで私は、先行研究の成果を活用しつつ、モンゴル語の反義語を総合的に、体系的に研究することを目指している。本研究課題は、論文編と辞典編の二つの部分から構成されている。

研究論文の内容は、「はじめに」、「第一章」、「第二章」、「第三章」、「第四章」、「第五章」、「第六章」、「おわりに」という8つの部分から構成される。「はじめに」では、この研究論文の構成と内容を簡単に紹介する。「第一章」では、課題を選択した理由を述べ、さらに課題の範囲、研究方法に言及する。「第二章」では、モンゴル語における反義語の研究現状について述べる。「第三章」では、モンゴル語の反義語の特徴、すなわち、意味的特徴、構造的特徴、民族的特徴を分析する。「第四章」では、モンゴル語における反義語の分類、すなわち、オトハラソ（**udqalasu**）による分類、品詞による分類、移動的な意味による分類を行う。「第五章」では、モンゴル語の反義語研究に存在している意義深い問題について分析する。「第六章」では、モンゴル語の反義語の役割について述べる。「おわりに」では、以上述べた内容をまとめると同時に本論の独創性と発展性についてまとめて述べる。

本論の科学的及び学術的価値を高めるため、モンゴル語における反義語を収集し、辞典として編纂する。これまで、モンゴル語に関する様々な辞典が出版されており、成果を得てきた。学生向けのモンゴル語反義語小辞書が出版されてきたが、学術研究向けのモンゴル語反義語辞典は出版されていない。したがって、学術向けのモンゴル語反義語辞典を編纂する必要がある。これが、辞典編のことである。

この研究課題の中では、論文編は理論的なものであり、辞典編は実践的なものである。理論と実践の両面から研究を行うことで、モンゴル語における反義語研究がより詳しくより深いものになると大きいに期待できる。

用語の採用について

モンゴル語における反義語及び意味論の用語は学者によって言い方は異なる。そして、広く使用されている用語で統一しようと考えている。「用語の標準化と呼称は用語研究の最も基本的ことであり、さらに最も重要なことである」[2]。

モンゴル語における反義語という用語が様々である。

esergü udqa-tai üge 、 udqa esergü üge、 esergü nere、 esergü udqa büküi üge、esergü üges 、esergü udqatu üge など様々である。その中で、esergü udqatu üge という用語で、モンゴル語の反義語という呼称を統一しようと考えている。

esergü udqa-tai üge
udqa esergü üge
esergü nere
esergü udqa büküi üge } esergü udqatu üge
esergü üges
esergü udqatu üge

モンゴル語における意味論の最も小さい意味単位である用語の言い方が以下の並べたように色々である。

udqalaburi 、 udqa element 、 udqa-yin miqabud 、 udqančir などである。その中で、udqa element という用語で、モンゴル語の意義素という名称を統一しようと考えている。

udqalaburi
udqa element } udqa element
udqa-yin miqabud
udqančir

モンゴル語の言葉において個々の意味である用語が内モンゴルではオトハラソ（udqalasu）という用語を使用し[3]、モンゴル国ではオトハラブリ（udqalaburi）という用語を使用している[4]。本論は、オトハラソという用語を選択し使えた。

udqalasu
} udqalasu
udqalaburi

モンゴル語の意味論の意義素分析方法という用語がモンゴル語では、udqalaburi-bar jadalqu arγa、udqa element-ün jadalulta-yin arγa、miqabudčilan jadalqu arγa 、gesigünjigülkü arγa など様々である。その中で、udqa element-ber jadalqu arγa という用語で、モンゴル語の意義素分析方法という呼称を統一しようと考えている。

udqalaburi-bar jadalqu arγa
udqa element-ün jadalulta-yin arγa
miqabučilan jadalqu arγa
gesigünjigülkü arγa
→ udqa element-ün jadalulta-yin arγa

[注]

1）フランク R. パーマー　1978　p. 104

2）Bao qing shan　1991　p132

3）Badmadorji　1997

4）Sečen　Delgerma　1996

本論では、中国・内モンゴルのホルチン語方言を基に、考察を進めることにする。

第一章　序論

当部分では、モンゴル語における反義語研究という研究課題の選択理由、研究範囲及び研究方法について述べる。

1.1.　研究課題の選択

モンゴル語の意味論の重要な研究対象として、反義語は主に大学の教科書及び研究論文で研究されてきた。しかし、モンゴル語の反義語研究は少数の反義語を列挙し、それらの反義語について分析し、さらに重複していることが多数であり、詳しく研究されていない。つまり、モンゴル語における反義語研究のレベルは低いということである。このことはモンゴル語学者達も認めている。「モンゴル語における反義語の研究は比較的少ない。モンゴル語学者達が反義語について簡単に研究したにすぎない」[1]。これは、モンゴル語における反義語研究のまとめと言ってもいい。それでは、モンゴル語の反義語研究がなぜ遅れているか。具体的な理由は以下のような四つ点があると思う。まず、モンゴル語について様々な辞典（例えば、類義語辞典、モンゴル語辞典、学生向けのモンゴル語辞典、モンゴル語頻度辞典、モンゴル語諺辞典、モンゴル語不変化詞辞典、モンゴル語用語辞典、モンゴル

語標準語辞典、モンゴル語意味分類辞典…）が数多く出版されてきたが、学術向けの反義語辞典が出版されていない。２００２年ウラーンバートルで出版され、１６８個の反義語を注釈し、学生向けの『モンゴル語反義語小辞典』[2]という成果はモンゴル語の反義語研究にとって喜ばしいことであるが、内モンゴルではこれまでモンゴル語における反義語辞典はまだ出版されていないのである。これは、モンゴル語における反義語研究が遅れている証拠の一つである。モンゴル語の反義語は実践的なものとして、その辞典を編纂しなければ理論的な研究を深めにくいだろう。辞典をもとに研究すれば反義語の理論的な研究を深めるのに役立つであろう。次に、モンゴル語の反義語についての研究論文は非常に少数だということである。１９６４年発表されたリンチンの『モンゴル語の反義語について』[3]という論文からこれまでモンゴル語の反義語について２０編ほどの研究論文が発表されている。その中に私の発表した８編の論文が含まれている。これは、モンゴル語における反義語研究は成果が少なくて、発展が遅いということを反映している。モンゴル語における反義語は、研究することが少ないということではなく、実際、研究すべきことは数多くある。その次に、研究されても重複している内容が多いのである。モンゴル語の反義語について分析した論文や著作の中で重複している内容も少なくないのである。つまり、研究の独創性が乏しいことで、新しい研究成果が不足しているということである。例えば、モンゴル国における学者達の編集したモンゴル語の意味論の代表的な著作である『**orčin čaγ-un mongγul kelen-ü udqa sudulul-un ündüsü**』[4]と内モンゴルの学者達の編集したモンゴル語意味論の代表的な著作である『**mongγul kelen-ü udqa sudulul**』[5]という二冊の本では、反義語の意味関係という部分の内容がまったく同じである。また、研究論文については『**mongγul kelen-ü esergü udqa-tai üge-yin tuqai**』と『**mongγul kelen-ü esergü udqa-tai üge-yin tuqai öčüken ajiγlal**』という二つの論文を見てみよう。この二論文には合わせて１４７の例（前者は８１の例、後者は６６の例）が並べられ、その中で、同じ例が１１２個ある。つまり例の全体の７６％が重複していることである。実際、モンゴル語における反義語研究には研究されていないことや詳しく研究されていないことが非常に多いのである。最後に、モンゴル語における反義語研究に誤っている問題が多く存在している。このことについては、後ほど詳しく説明する。これは、客観的な理由である。主観的理由について、私は、モンゴル語における反義語研究に興味をそそられて、この課題についての資料と研究成果を集め、さらに学者達と交流し、意見を交換し合い、見聞を広めた。また、私はモンゴル語の反義語についての学術論文も１０編ほど発表し、反義語についての

理解を深めた。これは、私にとって、非常に勉強になり、同時にモンゴル語の反義語研究の基礎となった。総じて、モンゴル語の反義語を体系的に研究することはモンゴル語の意味論を深めることに役立つであろう。実際、モンゴル語のみの反義語研究が遅れているということではない。「これまで、国内外において言語における反義語の特徴が詳しく研究されていない」[6]。以上がこの研究課題を選択した理由である。

1.2. 研究課題の範囲

これまで、モンゴル語における反義語の研究対象は単語のみに限られてきた。例えば、sayin（良い）≑ maɣu（悪い）、yeke（大きい）≑ baɣa（小さい）、nökür（友）≑ dayisun（敵）、qayira（愛）≑ qorusul（憎み）、abqu（もらう）≑ ögkü（あげる）、irekü（来る）≑ očiqu（行く）などである。これは、モンゴル語の反義語研究の対象となる語の一部分を研究したにすぎない。つまり、もう一つの重要な研究対象である連語反義語を見落としている。これは、モンゴル語の反義語研究において非常に残念なことである。モンゴル語における反義語の研究対象は単語反義語だけではなく、連語反義語も存在する。例えば、erkim degedü（上品）≑ egel douradu（下品）、ünenči siduryu（誠実な）≑ jisur jaliqai（ずるい）、aburɣu yeke（膨大）≑ öčüken baɣa（微小）、qabsurču demjikü（助ける）≑ qourlaju könügekü（妨げる）、šal ondoo（まったく異なる）≑ egege adali（まったく同じ）、siɣud qaričaɣatu（正比例）≑ urbaɣu qaričaɣatu（反比例）など多数である。モンゴル語の反義語の数量について、当然のことながら、単語反義語は連語反義語よりはるかに多い。具体的に言えば、単語反義語は５４０組であり、連語反義語は１２０組である。しかし、連語反義語もモンゴル語における反義語の研究対象として、無視すべきではない研究課題である。

1.3. 研究課題の方法

どのような研究方法を使用するか、またどうのように使用するかということは、研究上において非常に重要である。本論には、研究方法として、統計的方法、構造分析的方法、図式化方法、意義素分析方法という四つの方法を使用する。統計的方法とは、色々なジャンルの反義語の数量を統計しながら分析する方法である。これは、説得力がある研究方法として、様々な分野で広く使用されている。これまで、モンゴル語の反義語は統計的方法を用いて研究されていない。構造分析方法とは、モンゴル語の反義語を構造の角度から研

究する方法である。モンゴル語は膠着語であり、語幹、接尾辞から構成されている。構成分析方法を通してモンゴル語における反義語の構造のモデルを明らかにすることができる。図式化方法とは、分析したことを図式化するということである。周知のように、意味論は非常に抽象的ことであるので、図式化方法を使用することによって言語で描写するよりもっとわかりやすくなるのである。この方法は、モンゴル語の意味論研究にますます注目を集めている方法である。意義素分析方法とは語の内部的構造を明らかにする有効な方法である。意義素は意味論の研究対象とする最も小さな単位である。意義素が発見されたことは意味論の大きな進歩である。意義素分析方法はモンゴル語の意味論に積極的使用されている方法である。この四つの研究方法は、モンゴル語の反義語を詳細に研究することに大きく貢献すると思われる。

[注]

1) Somiyabaɣatur nar　1987　P.132

2) Bandi　2002

3) Rinčin　1964

4) Badmadorji　1997　pp.128—129

5) Delgerma　2002　pp.178—180

6) 王振昆　1982　p.75

第二章　モンゴル語における反義語研究の現状

反義語はモンゴル語における意味論の重要な研究対象として、モンゴル語の意味論や語彙論の著作などで分析され、研究されてきた。そのほか、モンゴル語における反義語についての研究論文がいくつか発表されてきた。モンゴル語の反義語を研究する時、まず、これまでのモンゴル語における反義語研究の現状を理解する必要がある。実際、これまでのモンゴル語における反義語研究のレベルを理解するということが、モンゴル語における反義語を体系的に研究するための前提である。わかりやすくするため、モンゴル語における反義語研究の現状について研究概況と誤っている問題という二つの部分に分けて説明しよう。

2.1. 反義語研究の概況

モンゴル語における反義語は、様々な内容が分析されたが、研究の深さはというとあまり進まなかった。これは、モンゴル語における反義語研究を重視しなかったことと関係があると思われる。そのほか、研究の方法や角度にも関係があると思われる。これまでモンゴル語における反義語の研究概況についてまとめれば以下のようになる。

2.1.1 モンゴル語における反義語の概念について三つの面で説明していた。つまり、「意味の対立関係がある語は反義語である」、「意義素が対立している語は反義語である」、「対立概念を表す語は反義語である」などである。

2.1.2　モンゴル語における反義語の研究対象については、単語のみの反義語は研究されてきたが、連語反義語が研究されていないのである。

2.1.3　モンゴル語における反義語の特徴については、同じ品詞の語のみは反義語になるが異なる品詞の語は反義語になることができないと強調してきた。また、全ての語に対応する反義語があると限らないと説明している。

2.1.4　モンゴル語における反義語の分類について、概念による分類、移動的な意味による分類などの視点から簡単に研究してきた。

2.1.5 モンゴル語における反義語の数について、形容詞反義語、動詞反義語、名詞反義語の数が多いと説明している。その中で、モンゴル語において形容詞反義語の数がが最も多いと強調している。

2.1.6　モンゴル語における反義語の役割について、現象と物事の矛盾をはっきり表現でき、意味をわかりやすく示すことができると説明している。

以上は、モンゴル語における反義語の研究概況のまとめである。

2.2. 反義語研究に対する誤解

モンゴル語における反義語研究は以前より次第に進んでいると同時に、色々な点で誤っていることが少なくないのである。これらの問題は直さなければならないと思われる。

2.2.1 モンゴル語における反義語の概念について、三種類の視点で説明されている。つまり、「意味が対立している語が反義語である」、「対立概念を示している語が反義語である」、「意義素が対立している語は反義語である」などである。しかし、その三つの説明にはそれぞれ不足点があると思われる。一番目の概念である「意味が対立している語が反義語である」という説明は反義語の意味的特徴を強調したが、文法形式の特徴について無視した

ということである。例えば、ariɣun čeber（きれい） と bujar（汚い）という二つの語は意味の点で対立しているのに反義語になることができない。なぜならば、連語と単語の対立関係からである。二番目の概念である「対立している概念を示している語が反義語である」という説明は、モンゴル語における不変化詞類の反義語を含められなかった。モンゴル語における全ての語が概念を示すとは限らない。例えば、モンゴル語の助詞(sula üge)、副詞（dayiburi üge)、待遇詞（qandulɣa üge）などは概念を示せないのに反義語になることができる。中国語の学者も概念の角度から反義語を説明したことはある。「反義語は対立している概念の両面を表している」[1]。三番目の概念である「意義素が対立している語は反義語である」という説明は間違がっているのは確実のことである。なぜならば、意義素が対立して語が全て反義語になるとは限らないからである。例えば、abu（父） ≑ eji（母）という二語の反義語になることができなく、家族関係を表す関係名詞（qaričaɣa nere）である。この二語を意義素分析すれば以下のようである。

abu [öber-ün beye-yi][törügsen][eregtei]
eji [öber-ün beye-yi][törügsen] [emegtei]

分析によると、abu と eji という二語が対立する意義素の[eregtei]と[emegtei]によって区別されている。しかし、この二語が反義語になることができないのは明確である。「意義素は対立している語は全て反義語になるとは限らないのである」[2]。

以上は、モンゴル語における反義語の概念についての説明の分析である。

2.2.2 モンゴル語における反義語の品詞による分類について、これまで、形容詞反義語の数が最も多いと説明されてきたが[2]、実際、モンゴル語における反義語の中で、形容詞反義語は最も多くはなくて、動詞反義語が最も多いのである。このことについて反義語の分類という部分で詳しく説明する。

2.2.3 モンゴル語における反義語研究の中で、特に例の誤っていることが少なくないのである。これは、モンゴル語における反義語の対等性については詳しく理解しなかったからである。対等性について後で詳しく説明する。例の間違いはモンゴル語の反義語研究において深刻な問題である。この誤っている点を正さなければならない。それは、研究者や一般の人に誤解を与える恐れがあり、さらにモンゴル語の反義語研究が順調に行われることに不利だからである。引き続き、モンゴル語における反義語の誤っている例について例の分類及び具体的な分析という二種類にわけて説明する。まず、誤っている例の分類について説明する。

2.2.3.1 誤った例の分類

モンゴル語における反義語研究の誤った例の分類は文法の点で誤った例と意味の点で誤った例の二つのジャンルにわけられる。では、それぞれ分析する。

2.2.3.1.1 文法の点で誤った例

文法の点で誤っている例はさらに品詞の混同している例、格がついた例、文法形式が混同している例など小さく事項にわけられる。

2.2.3.1.1 .1 品詞が異なった例

jalaγu（若い）— ötelügsen（年寄りになる）、qaskiraqu（大声で呼ぶ）— duγui（黙る）、bayingγu（常に） — jarim（一部分）

2.2.3.1.1.2 格がついた例

kümün-ü（他人の） — öber-ün（自分の）、egüride-yin（永遠の） — jaγurada-yin（一時的な）

2.2.3.1.1.3 文法形式が異なった例

理論的に詳しく説明するため、さらに二つのジャンルにわけて説明しよう。

2.2.3.1.1.3.1 原級と比較級の混同した例

qarangγui（黒い）— gegeken（明るい）

2.2.3.1.1.3.2 語尾の異なる例

jirγal（幸せな） — jobulang（苦しみ）、 uridu（前）— qoyina（後）、ekilelte（はじめ） — tegüsül（おわり）、 γadana （外） — dotura（中）

2.2.3.1.2 意味の点で誤った例

意味の点で誤っている例は肯定関係と否定関係の例、原語とその否定の例、対立関係が誤った例、対立関係ではない例という点で反映されている。

2.2.3.1.2.1 tai と ügei がついた例：

küčü-tei（力がある） – küčü ügei（力がない）、sedkil-tei（気持ちがある）— sedkil ügei（気持ちはない） idebki-tei（積極的） — idebki ügei（積極的でない）

aγur-tai（怒りがある）— aγur ügei（怒りがない）、

2.2.3.1.2.2 原語とその否定関係の例：

adali（同じ）— adali ügei（同じでない）、 bolqu（よろしい）— bolqu ügei（いけない）、irekü（来る） — irekü ügei（来ない）、qauli yosun-u（正義）—qauli yosun-u bisi（正義でない）

2.2.3.1.2.3 対立関係が誤った例

ayurlaqu（怒る） — iniyekü（笑う）、 alququ（歩く） — joysuqu（立つ） 、erte（早い） — qojim（今後）、emegen（おばあさん） — keüken（娘）、 oyilayaqu （わかる）— martaqu （忘れる）、 ulayan （赤い）— qara（黒い）、 iniyekü（笑う）— qaniyaqu（ 咳が出る ）、 čeber（きれい）— maɤuqai（醜い）、 ebül（冬）— qabur（春）、martaqu（忘れる）— sanaqu（知る） 、büdügün（太い）— baya（小さい）、

2.2.3.1.2.4 対立関係ではない例

nara（太陽） —jibar（風）、nidü（目） — čiki（耳）、oryil（頂上）— bel（ふもと） 、 nara（太陽）— sara（月）、daruya（リーダー） — čerig（兵）、tör̈ü（国）— šašin（宗教）

2.2.3.2 誤った例の分析

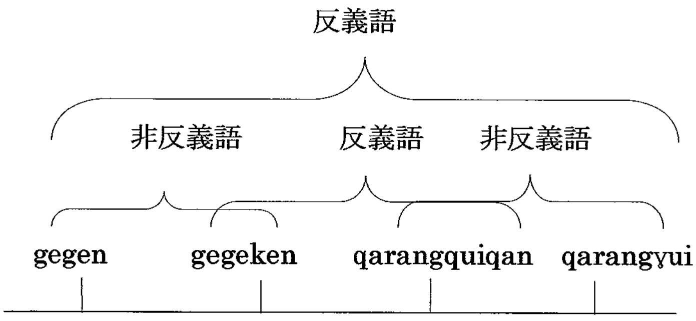
続いて、上記の例の存在している問題点について具体的に分析してみよう。

2.2.3.2.1 例 2.2.3.1.1.1 の誤った理由は、異なる品詞の語の対立からである。反義語は必ず同じ品詞の語から構成されている。異なる品詞の語が異なる概念を表すため、反義語になることができないのである。このことについて学者達は意見が合意している。これは正しい見解である。例えば、jalayu という語は名詞あるいは形容詞であり、ötelügsen という語は動詞だから反義語なることができない。代わりに jalayu（若者）—kögsin（年寄り）、jalayujiqu（若くなる）— ötelkü（年寄りになる）はそれぞれ名詞（たまに形容詞）、動詞から反義語である。qaskiraqu という語は動詞であり、 duyui という語は形容詞から反義語になることができない。かわりに qaskiraqu—sibegenekü という言葉は反義語になることができる。bayingyu という言葉は副詞であり、 jarim という言葉は代名詞から反義語になることができない。しかし bayingyu—qaya、 bökü—jarim は反義語になることができる。

2.2.3.2.2 例 2.2.3.1.1.2 の誤った理由は、例の誤った理由は、モンゴル語における反義語は語とその格がついた語で表現ではない。モンゴル語の格は語ではなく、語の間の関係を示す文法範疇である。そして、格がついた語は反義語になることができない。

2.2.3.2.3 例 2.2.3.1.1.3.1 の誤った理由は、形容詞の原級と比較級の対立からである。具体的に言えば、gegeken という語は gegen という形容詞の比較級であり、qarangyui は比較級でなく、原級である。qarangyui という語の比較級は qarangyuyiqan ということであ

る。それで、正解は qarangγui ≑ gegen あるいは gegeken ≑ qarangγuyiqan である。同一級の間で反義語になることはできるが、異同級の間で反義語になることはできない。図式化すれば以下の通りである。



2.2.3.2.4 例 2.2.3.1.1.3.2 の誤っている理由は、語尾は同一ではないからである。つまり文法形式は異同である。これは、反義語の対等性と矛盾する。対等性について後で詳しく説明する。正解は uridu ≑ qoyitu あるいは qoyina ≑ emüne であり、ekilelte ≑ tegüsülte あるいは ekilel ≑ tegüsül であり、 γadana ≑ dotuna あるいは γadar ≑ dotur であり、jirγal ≑ jobal あるいは jirγalang ≑ jobalang である。

2.2.3.2.5 例 2.2.3.1.2.1 の誤っている理由は、単語あるいは連語の後に肯定助詞の tai と否定助詞の ügei という語が入ったからである。モンゴル語は名詞の後ろに助詞である tai と ügei が付いて肯定と否定の意味を表す。そういう語は矛盾する関係を表すが反義語ではない。

2.2.3.2.6 例 2.2.3.1.2.2 の誤っている理由は、まず、類型は異なる語からである。つまり、単語と複合語の対立である。「一つの単語から構成されている語は相互に反義語になり、二つの単語から構成されている語は相互に反義語になる」[3]。次に、原語とその否定関係の語は、反義語にはなることができないのである。否定関係と反義語は、異なる概念である。原語とその否定関係の語が反義語であるとすれば、モンゴル語のほとんどの語には、対応する反義語が存在するということになる。実際、モンゴル語では、対応する反義語がない語はモンゴル語に数多くある。反義語の有名な学者である謝文慶は、反義語になることができない六つの条件を提出し、その中で、三番目の条件は「原語とその否定関係は反義語になることができないのである」ということである[4]。このことについて後で説明する。

2.2.3.2.7　例 2.2.3.1.2.3 の誤った理由は、モンゴル語における反義語になる基礎である対立関係ではないからである。正解は以下のようになる。

誤解の例	正解の例
aγurlaqu — iniyekü	aγurlaqu ≑ bayarlaqu, iniyekü ≑ uqilaqu
alququ— joγsuqu	alququ ≑ güyükü, yabuqu ≑ joγsuqu
emegen — keüken	emegen ≑ ebügen, küü ≑ keüken
oyilaγaqu — martaqu	oyilaqu ≑ quuturaqu, martaqu ≑ sanaqu
ulaγan— qara	qara ≑ čaγan
erte — qojim	erte ≑ orui , odu ≑ qojim
iniyekü —qaniyaqu	iniyekü ≑ uqilaqu
čeber — maγuqai	čeber ≑ bujar , sayiqan ≑ maγuqai

2.2.3.2.8　例 2.2.3.1.2.4 の誤っている理由は、意味の点で対立関係ではないし、しかも対応する反義語が存在していないからである。orγil－ bel , nara — jibar , nidü — čiki , nara — sara , daruγa — čerig , törü－šašin などの語は相互に対立関係ではないであり、その上相互に対応する反義語がないということである。ある語に対応する反義語があるが、ある語に対応する反義語がないのである。「反義語であるかないかということは、その言語の特徴によって決められる」[5]。

例文はその概念の説明を証明する重要な証拠である。例が誤れば、その概念について誤解する恐れがあるので、特に注意しなければならない。これは、例の重要さである。正確の例がその概念を理解するうえで重要な役立を果たすのは言うまでもない。概念を正確に説明しても、例が誤れば、理解しにくくなり、逆に例を正確に説明しても、概念の説明が誤れば理解しにくくなる。概念も例も誤れば、結論は当然信用できないであろう。だからこそ、学者達は概念をわかりやすく、しかも正確に説明するため注意していると同時に、例の正確さにきわめて注意を払っている。これは概念と例の関係である。

[注]

1）王德春　1997　p.107

2）Tulγaγuri　1993　p.27

3）傅朝阳　1980　p. 46

4）謝文慶　1986　p. 37

5）Tedke　1987　p.277

第三章　モンゴル語における反義語の特徴

特徴の研究は、モンゴル語の反義語研究において重要な研究対象であると同時に理論的な研究である。そのため、その特徴について詳しく研究しなければ、モンゴル語の反義語研究を深めることができない。換言すれば、モンゴル語の反義語研究が詳細に研究されなかった理由の一つはその特徴について研究が不足しているからである。モンゴル語における反義語の特徴について意味的特徴、構造的特徴、民族的特徴という三種類に分けて分析する。モンゴル語における反義語研究の特徴について、研究者達は意味的特徴を重視して分析したが、構造的特徴と民族的特徴についてはほとんど研究していなかった。意味的特徴は意味論の角度から研究されたのに対して、構造的特徴は形態論と意味論の角度から研究され、民族的特徴は言語学、民俗学、社会学、人類学など色々な研究課題と関係がある総合的研究である。当然のことながら、反義語の民族的特徴が非常に複雑な研究であるのは言うまでもない。

総じて、特徴の研究が詳細であればあるほどモンゴル語の反義語研究はより一層に進めることができる。したがって、本論では、私はモンゴル語の反義語の特徴についてできるだけ詳しく分析しようと思う。

3.1. 意味的特徴

モンゴル語における反義語の意味的特徴は反義語の基本的な特徴である。モンゴル語の反義語の意味的特徴は理論の視点からの研究が非常に不足している。反義語の研究を深めるため、まず意味的特徴を明らかにする必要がある。モンゴル語における反義語の意味的特徴は様々である。

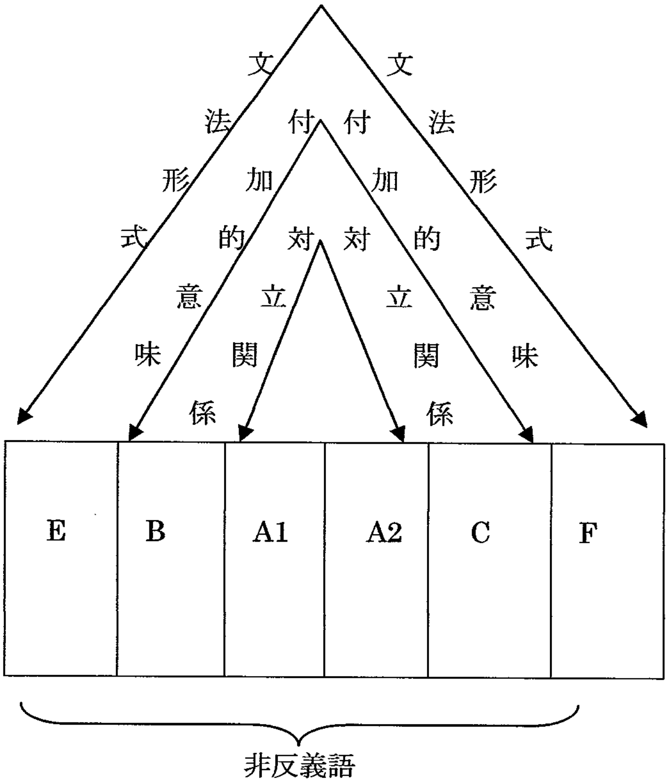
3.1.1.　反義語の対等性について

モンゴル語の反義語について、まず研究しなければならない特徴は対等性である。対等性の概念とその重要さを説明する前に、先に例を分析しよう。1）čaɣan（白い）— qaralaqu（黒くなる）、2）irekü（来る）— očina（行く）、3）degere（上）— douratu(下)、4）yadaɣu qoɣusun（貧乏）— bayan（金持ち）、5）nimgen（薄い）— jujaɣaqan（厚

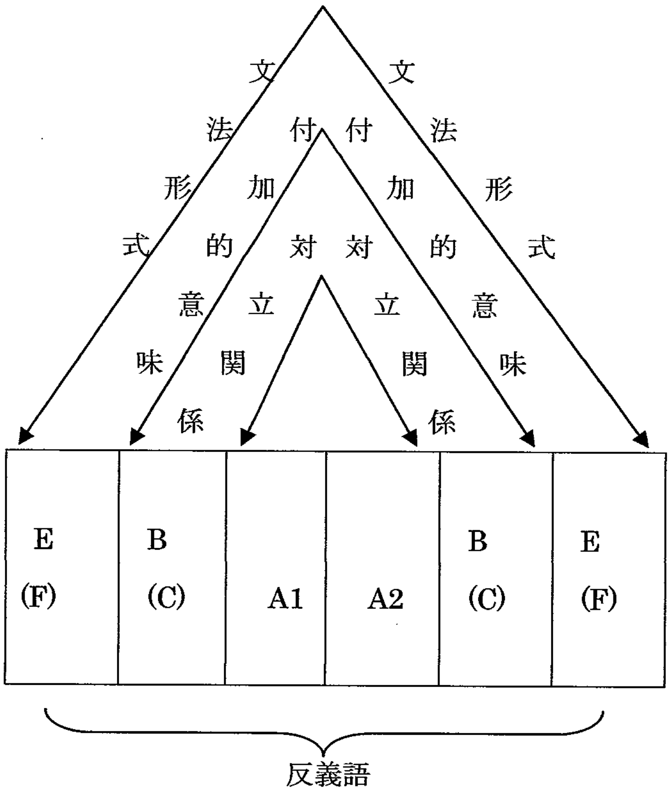
め)、 6) mendüleküⅰ（生まれる） — ükükü（死ぬ）などである。当然のことながら、これらの語は反義語になれないのは明白である。なぜ、反義語になれないか。その理由について分析しよう。例1）は、品詞の異なる（形容詞—動詞）語だからであり、例2）は、形態の形式、つまり接尾辞が異なる（形動詞形—終止形）からであり、例3）は、語尾が異なる（-re— -tu）からであり、例4）は、類型が異なる（連語—単語）からであり、例5）は、品詞は同じ形容詞であるが、級が異なる（原級—比較級）からであり、例6）は、付加的意味が異なる（敬語—普通語）からである。正解は以下のようになる。čaɣan（白い）≑ qara（黒い）、 qaralaqu （黒くなる）≑ čayiraqu（白くなる）、 irekü （行く）≑ očiqu（行く）、 irene（来る）≑ očina（行く）、degere(上)≑ doura(下)、 douratu(下) ≑ degedü(上) 、 yadaɣu qoɣusun(貧乏) ≑ bayan činegelig(金持ち) 、 bayan(金持ち) ≑ yadaɣu(貧乏)、nimgen(薄い) ≑ jujaɣan(厚い)、 nimgeken（薄め）≑ jujaɣaqan(厚め)、mendülekü(生まれる＜敬語＞) ≑ nögčikü(死ぬ＜敬語＞) törükü(生まれる) ≑ ükükü(死ぬ)である。

モンゴル語における反義語の研究は、意味論の範囲のみの研究ではなく、形態論にも密接な関係がある。しかし、これまで、モンゴル語における反義語研究は意味論のみの角度から研究されており、形態論の視点から研究されていなかった。これは、モンゴル語における反義語研究が他の研究分野より遅れてきた一つの要因である。したがって、モンゴル語における反義語は意味論のみの視点からではなく、形態論と付加的意味の視点からも詳しく研究しなければならない。例の分析によると、モンゴル語における反義語は意味の対立だけではなく、文法形式が同一であることと付加的意味が必ず同一であるということである。これは、モンゴル語における反義語の対等性である。文法形式の同一とは接尾辞の同一、類型の同一、品詞の同一、級の同一など様々である。付加的意味の同一とは、敬語—敬語の同一、普通語—普通語の同一、現代語—現代語の同一、古代語—古代語の同一など様々である。モンゴル語における反義語は、意味の点で反義関係を基に、文法形式の同一と付加的意味の同一も考慮する必要がある。文法形式及び付加的意味の同一がなければ、意味の点のみで反義関係になっても反義語になることができない。モンゴル語の反義語は意味の対立関係、文法形式が同一及び付加的意味が同一でなければならない。つまり、モンゴル語の反義語はその三つの要求の集合体である[1)]。したがって、モンゴル語の反義語とは、対等性の条件に一致する語である。対等性はモンゴル語における反義語研究に、非常に重要な基本的条件であり、同時に反義語であるかどうかを検証する基準である。換言

すれば、対等性について正しく理解すれば、モンゴル語の反義語について正しく理解できるということである。したがって、反義語であるかどうかということは主観的にあるいは直感的に判断して決められることではなく、対等性という客観的な検証基準を通して判断して決められるであろう。モンゴル語における反義語の研究に、色々な誤っている考え方が存在している最大の理由と最も直接的な理由は反義語の対等性に言及されなかったからである。反義語の最も重要な特徴について異なる観点を持ち学者もいる。「対立関係と文章の中で対立使用されることは反義語の最も重要な特徴である」[2)]。中国語の学者達は反義語の対等性について様々な点から分析してきた。例えば、「付加的意味の同一、品詞の同一、韵律の同一は反義語の重要な条件である」[3)]。「反義語は文法形式の点で一致する必要がある」[4)]。「書き言葉は相互に反義語になり、話し言葉は相互に反義語になる」[5)]。モンゴル語における反義語の対等性を図で示せば、より明瞭になる。


文法形式意味
付加的対立関係
付加的対立関係
文法形式意味
E
B
A1
A2
C
F
非反義語

⇓


文法形式意味
付加的対立関係
付加的対立関係
文法形式意味
E (F)
B (C)
A1
A2
B (C)
E (F)
反義語

3.1.2. 対立しながら統一することについて

モンゴル語における反義語が対立すると同時に統一するという特徴の研究は、最近のことである。この特徴は意義素分析方法を通して明らかにすることができる。

意義素分析方法は音声の弁別的特徴を明らかにする方法から啓発された意味論の分析方法である。この方法は語の内部的な構造と本質を明らかにする上で有効な方法である。モンゴル語の意味論に意義素分析方法は積極的に適用され、モンゴル語の意味論の発展に寄与している。具体的に言えば、モンゴル語の意味論の研究対象が以前は、単語 (udqalasu) と複合語(kelkisü)に限られており、現在は、研究対象は広がり、最も小さな研究対象である udqa element(意義素)から最も大きな研究対象である yarisu(談話の意味)まで広がり、七つの研究対象になった。つまり、A1- udqa element (意義素)、A2 - udqalasu (語の意味)、A3- kelkisü (複合語の意味)、A4－ögülesü (文章の意味)、A5- yasisu (談話の意味)、A6- bötügesü (接尾辞の意味)、A7-nemelte udqa (付加的意味) である[6]。その中で、A1、A2、A3、A4、A5 の意味関係を図式化すば以下の通りである (図1)。モンゴル語の意味論の研究対象は、以前は udqalasu (A2) と kelkisü (A3) という二つの研究対象だった。図式化すれば以下の通りである (図2)。

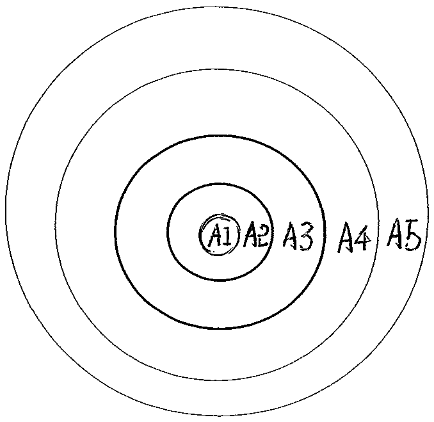


図1

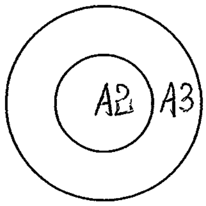


図2

引き続き、具体的にモンゴル語における反義語の例を意義素分析方法で分析してみよう。例えば、qola (遠い) ≑ oyira (近い) 、 jegün (左) ≑ baraγun (右) 、 γang γamsiγ (干ばつ) ≑ usun γamsiγ (水害)、bayartu jüčüge(喜劇) ≑ γuniγtu jüčüge(悲劇)などである。

{ qola [ögülegči-eče][aluslaqu jai][yeke]
oyira [ögülegči-eče][aluslaqu jai] [baγa]

{ jegün [jüg čiglel][naran][manduqu]
baraγun [jüg čiglel][naran][tasiqu]

{ γang γamsiγ [baiγali-yin γamsiγ][qura boruγan][baγaduqu]
usun γamsiγ [baiγali-yin γamsiγ][qura boruγan] [yeketükü]

{ bayartu jüčüge [jüčüge] [üre düng][kümüs-yi][bayarlaγulqu]
γuniγtu jüčüge [jüčüge] [üre düng][kümüs-yi][qaramsaγulqu]

上記の分析によると、qola≑ oyira という反義語は、 [ögülegči-eče][aluslaqu jai]という共性意義素と[yeke]、[baγa]という二つの個性意義素から構成されている。共性意義素とはその二つの語が反義語になる前提であると同時にその二語の共通点である。個性意義素とはその二語が反義語を形成する要因である。そして、反義語は共通性の意義素を基に互いに関連して、個性の意義素の区別特徴によって反義語になっている。その通りに、jegün ≑ baraγun という反義語の共通意義素は [jüg čiglel][naran]であり、個性意義素は[manduqu]と [tasiqu]の二つである。γang γamsiγ と usun γamsiγ という反義語の共通意義素は[bayiγali-yin γamsiγ][qura buruγan]であり、個性意義素は[baγaduqu]と[yeketükü]である。bayartu jüčüge ≑ γuniγtu jüčüge という反義語の共通意義素は[jüčüge] [üre düng][kümüs-yi]であり、個性意義素は[bayarlaγulqu] と [qaramsaγulqu]である。

3.1.3. 反義語の多様性について

3.1.3.1. ある反義語がほかの単語と組み合わてせ使用されるときは反義語になることができない場合がある。これは、その単語は元の意味を失い、二つの語は一つの語の意味を示すということである。つまり意味変化によって異なっている。例えば、qara（黒い）とčaγan（白い）という語は反義語であるが、miqa という単語と組み合わせて使用される場合は反義語になることができない。つまり、qara miqa と čaγan miqa という二つの語は反義語になることができない。なぜならば、qara miqa と čaγan miqa は意味の点で互いに対立

する関係がないからである。qara miqa という語は脂肪が少ない肉を指すのに対して、čaɣan miqa という語が肛門の端の肉である。しかし、qara miqa という語は 脂肪が多い肉である taryun miqa という語と反義語になる。モンゴル語では qara と taryun という二つの単語は反義語になることができない。qara という単語は čaɣan という単語と反義語となり、taryun という単語は turangqai という単語と反義語になる。つまり、以下のようになる。

反義語（qara miqa — taryun miqa）

反義語 { qara → qara miqa ／ čaɣan → čaɣan miqa } 非反義語（qara miqa, čaɣan miqa — taryun miqa）

3.1.3.2. ある反義語の後ろにある接尾辞を連続して新しい反義語を形成するが、ある接尾辞はその反義語の一つの語に連続できるが、もう一つの語に連続できない場合もある。例えば、qara≑ čaɣan という反義語では、-ra-という接尾辞を連続すれば、qarala-（黒くなる）≑ čaɣira-（白くなる）という動詞の反義語を形成できる。しかし、ngɣui という接尾辞を連続すれば、qara という単語に連続できるが、 čaɣan という単語に連続できない。新しい形成された qarangɣui という語が gegen という語と反義語になることができる。つまり、以下のようになる。

反義語（qarangɣui ≑ gegen）

反義語 { qara + ngɣui → qarangɣui ≑ gegen ／ čaɣan + ngɣui→ × }

3.1.3.3. ある反義語の前に必ずしも同じ修飾語が要るとは限らないが、語によって異なる。例えば、qara ≑ čaɣan という反義語では、その二つの単語の前に程度副詞の masi（とても）、tung（非常に）、neliyed（かなり）などの語に組み合って、masi qara（とても黒い）、 masi čaɣan（とても白い）、tung qara（とても黒い）、 tung čaɣan（とても白い）、neliyed qara（かなり黒い）、 neliyed čaɣan（かなり白い）などの反義語が形成できる。しかし、qara という単語の前に修飾語の kö が要るが、čaɣan という単語の前に要らない。逆に、čaɣan という単語の前に labai という修飾語が要るが、qara という単語の前にいら

ないのである。つまり、以下のようになる。

反義語 { qara ： kö + qara → kö qara （非常に黒い） } 反義語
čayan ：labai + čayan →labai čayan （非常に白い）

反義語 { qara → labai qara （×）
čayan→ kö čayan （×）

3.1.3.4. 興味深いことは、ある反義語がある単語と組み合わせて使用される場合は反義語になることができないが、逆に同義語になることができる。例えば、qara≑ čayan という反義語は ariki（酒）という単語と組み合わせて使用される場合は、同義語の意味を示す。つまり、qara ariki （黒い酒）— čayan ariki（白い酒）である。この二つの語の意味は同じだが、内モンゴルでは、qara ariki と言うのに対して、モンゴル国では čayan ariki と言う。中国語の白酒という言い方はモンゴル国においてモンゴル語の čayan ariki という言い方と同一である。語の同じモンゴル民族でも地域によって語の使い方が異なる。これは、モンゴル語の反義語の特殊な現象である。

3.1.3.5. 反義語になることができない二つの単語はある単語に組み合わせて使用される場合新しい反義語を形成することもある。例えば、siyud （直接）と urbayu（逆）という二つの単語は単語として反義語になることができない。しかし、この二つの単語は qaričayatu（比率）という単語と組み合わせて使用される場合は反義語になることができる。つまり、siyud qaričayatu（正比率） ≑ urbayu qaričayatu（反比率）は反義語になる。usu（水） と yang（干ばつ）という二つの単語は単語として反義語になることができないが、その二つ単語は yamsiy（災害）という単語と組み合わせて使用される場合、つまり usun yamsiy（水害） と yang yamsiy（干ばつ）という二つの連語は反義語になることができる。つまり、usun yamsiy ≑ yang yamsiy である。これは、語の組み合わせ関係によって決められることである。

3.1.4. 対応する反義語について

モンゴル語の反義語について分析した多数の著作では、全ての語に対応する反義語があるわけではないと強調してきた。「反義語は語彙の重要なものであるが、全ての語に対応する反義語があるとは限らないのである」[6)]。反義語は全ての語に存在している普遍的なも

のであるが、全ての語に反義語があるとは限らない。「世界の全ての言語に反義語は存在しているが、全ての語に対応する反義語あるとは限らない」[7]。「反義語は言語のものだから、全ての矛盾している物事、概念は反義語を通して表現できるとは限らない」[8]。例えば、『モンゴル語辞典』には７万ほどのモンゴル語を掲載して注釈を加えている[9]。また、学者であるB・リンチンは「モンゴル語の語彙は約１０万ある」と述べている[10]。しかしながら、モンゴル語の反義語は、モンゴル語の一部分を占めるにすぎないのである。中国語では、反義語は少なくとも４０００個あると述べている[11]。具体的に言えば、

用語類：abiya（音声）、atum（原子）、körüngge（資本）、es（細胞）、energi エネルギー tegsidgel（方程式）、 not（楽譜）…

鳥類— bijuqai（スズメ）、keriye（カラス）、todi,toɣus（クジャク） qariyačai（ツバメ）、eliye （とび）、 bödüne（うずら） …

動物類— arslan（ライオン）、činua（狼）、bars（トラ）、jaɣan（象）、taulai（兎）、ünege（狐）、jaraɣa（はりねずみ）…

果物類— banana（バナナ）、toɣur（もも）、almurad（りんご）、alima（なし）、jürji（みかん）、güyilesü （あんず）、samur（くるみ）…

野菜類— songgina（葱）、töbed qasi（トマト）、örgesütü kemke（きゅうり）、tömüsü（ジャガイモ）、ɣoɣud（にら）…

家畜類— noqai（いぬ）、muur（ねこ）、mori（馬）、ɣaqai（豚）、üker（牛）、takiya（鶏）、qoni（羊）…

交通工具類— masin（車）、bolu（自転車）、motur（バイク）、ongɣuča（船）、ɣaltu terge（列車）、niskel（飛行機）…

家庭用品類— köldegegür（冷蔵庫）、jiruɣtu radio（テレビ）、ɣar utasu（携帯電話）、qorɣu（たんす）、sirege（机）、 sandali（椅子）…

植物類— ebesü（草）、čečeg（花）、modu（木）、qulusu（竹）、narasu（松）uda（楡）、uliyasu（柳）…

資源類— čilaɣun tosu（石油）、alta（金）、mönggü（銀）、negüresü（煤）、temür（鉄）、bolud（鋼鉄）、 jes（銅）、 tuɣulɣa（鉛） …

しかし、方向詞及び位置詞に対応する反義語の確率が高いのである。そのほか、動作や変化を示す語及び特徴を示す語に対応する反義語が多いのである。

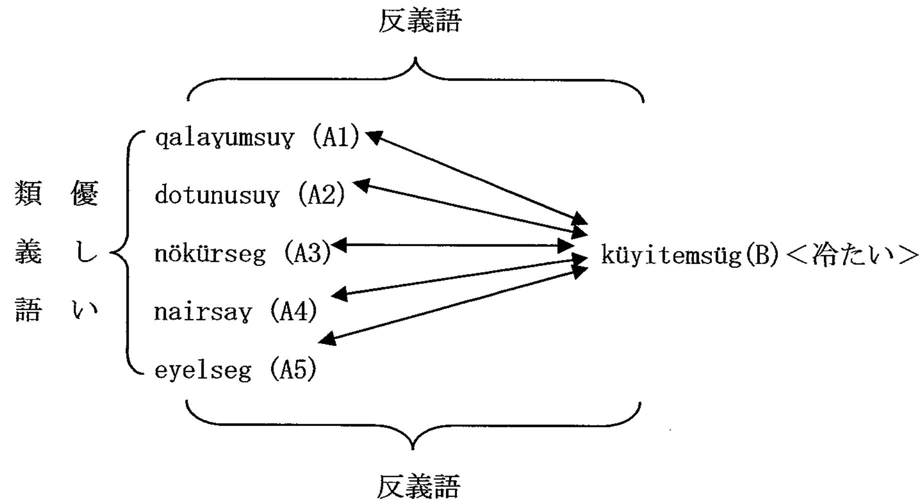
3.1.5. 反義語と類義語の相互関係について

モンゴル語の反義語と類義語は、非常に重要な意味関係にあり、意味論や語彙論の著作の中では、重視して強調して分析してきた研究対象である。したがって、反義語と類義語が意味論で重要な位置を占めている。このことは、学者達に認められている。「語彙は意味の点で、反義語と類義語という二ジャンルに分けられる」と述べた学者もいる[13]。「反義関係と類義関係は意味論の中で最も注目を集めている二つの意味関係である」[14]。「語の意味関係のジャンルはいろいろであり、その中で一番注目を集めているのは対立関係（反義語）と類義関係（類義語）である」[15]。反義語と類義語というものの名称から見ると、相互に関係がない意味の研究対象のようである。しかし、反義語と類義語は密接な関係がある。反義語と類義語は意味論の異なる研究対象であるが、両者は互いに対立するのではなくて、逆に両者の間には切っても切れない相互関係にある。モンゴル語における反義語の研究の中には、反義語と類義語の関係について簡単に分析したものもある。ある単語に多数の反義語が対応する場合もある。つまり、ある語はその語と反義語になると同時にその語の類義語にも反義語になる場合がある。例えば、中国語の「热闹」という語は以下の２３語と反義語になることはできる。「寂寞，寂然，凄凉，冷落，寂静，寂寥，冷清，冷僻，冷静，冷寂，冷淡，幽寂，幽静，清幽，清静， 沉静，孤寂，安静，背静，宁静，僻静，偏僻，荒僻」[16]。

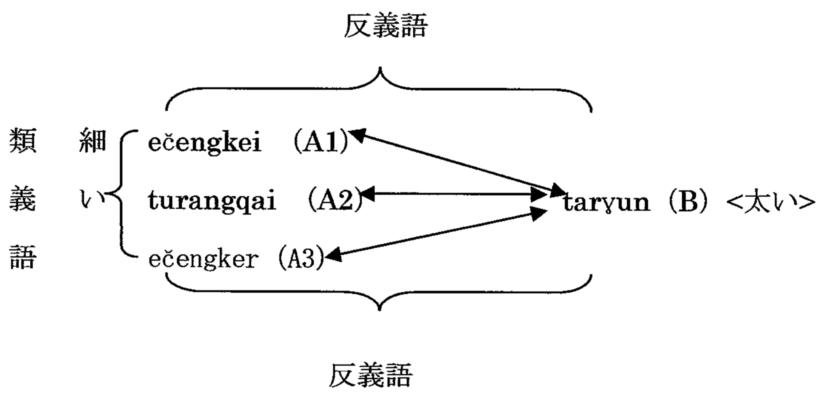
詳しく説明するため、二つのジャンルにわけて分析しよう。

3.1.5.1. 一語における多数の反義語

これは、一つの語に多く反義語が対応するということである。例えば、



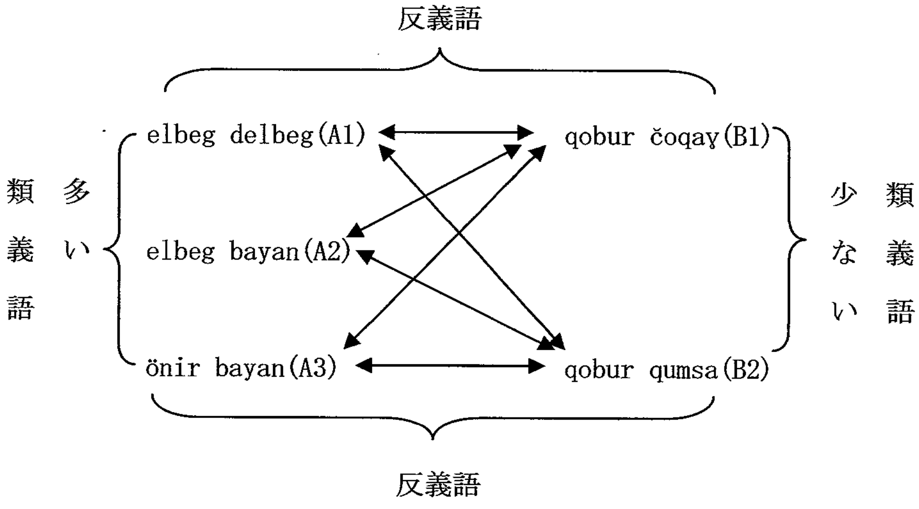
上記の分析によると、küyitemsüg という単語は合わせて五つのペアの反義語を形成している。つまり、A1 ≑ B,A2 ≑ B,A3 ≑ B,A4 ≑ B,A5 ≑ B である。



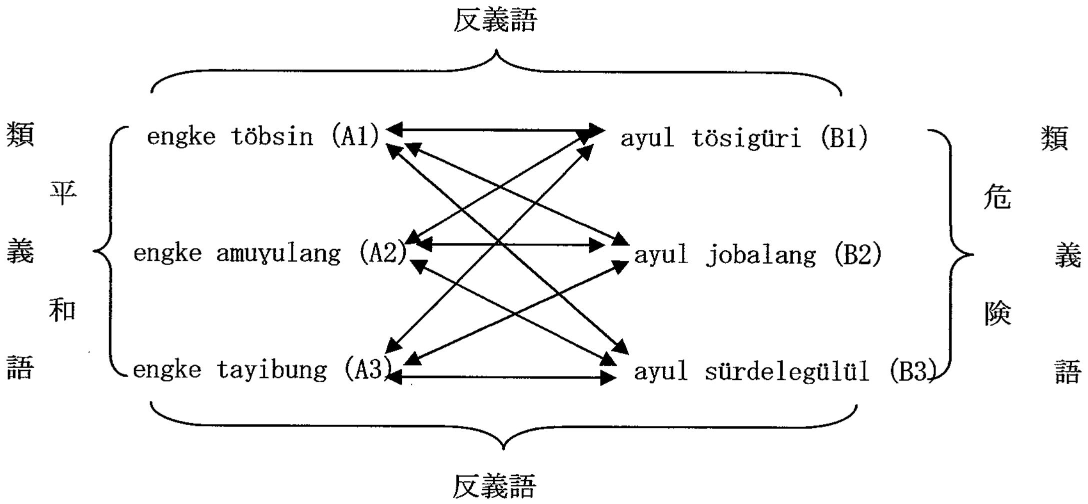
上記の分析によると、taryun という単語は合わせて三つのペアの反義語を形成している。つまり、A1 ≑ B, A2 ≑ B, A3 ≑ B である。

3.1.5.2. 多数の語における多数の反義語

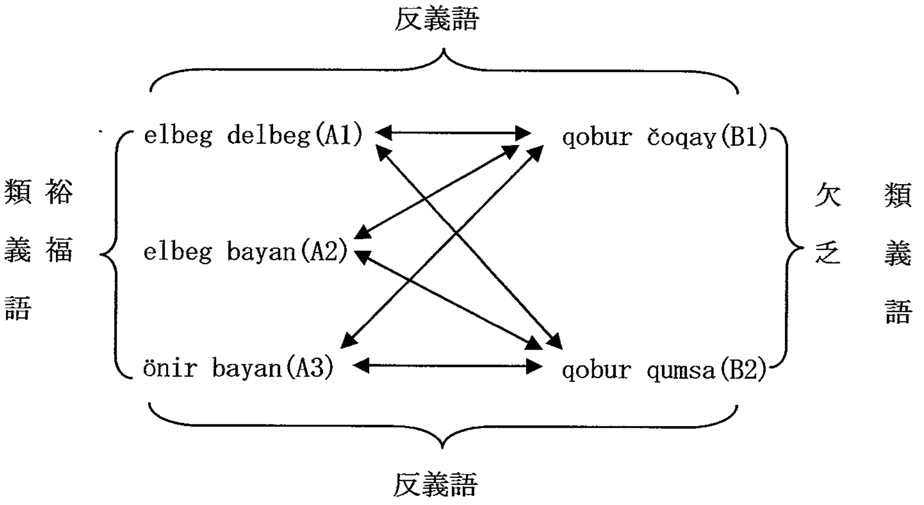
これは、多く語に多く反義語が対応するということである。当然のことながら、多数の語は相互に類義語である。例えば、



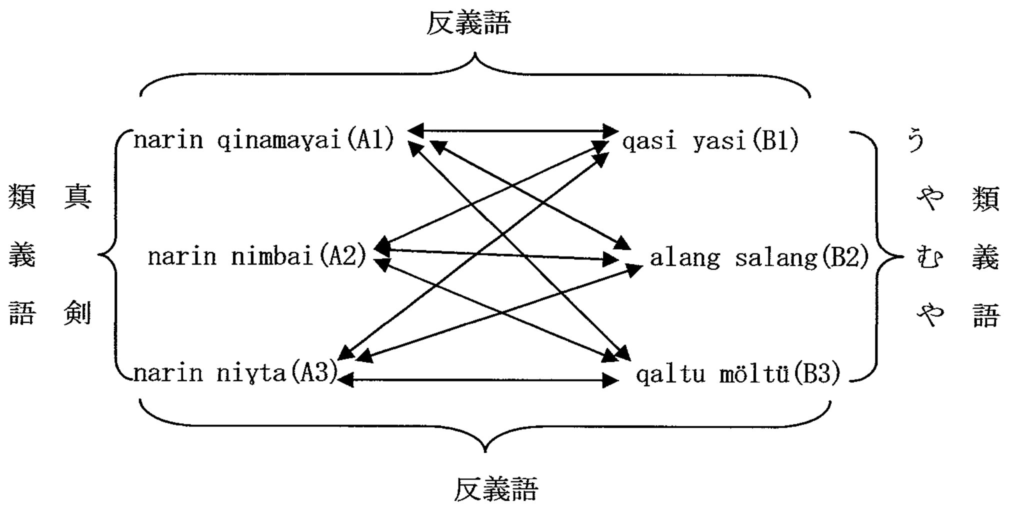
上記の分析によると、A1 ≑ B1、 A1 ≑ B2、 A2 ≑ B1、 A2 ≑ B2、 A3 ≑ B1、 A3 ≑ B2 など 6 ペアの反義語が形成されている。



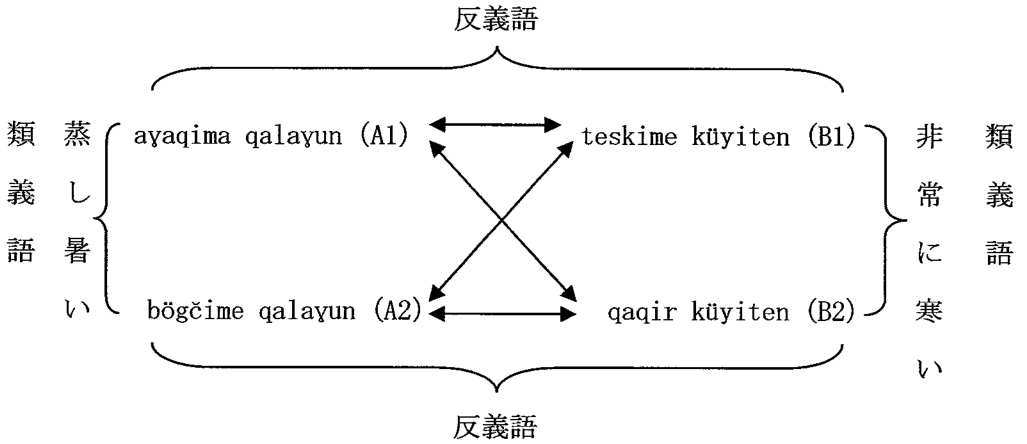
上記の分析によると、九つのペアの反義語が形成している。つまり、A1 ≑ B1、A1 ≑ B2、A1 ≑ B3、A2 ≑ B1、A2 ≑ B2、A2 ≑ B3、A3 ≑ B1、A3 ≑ B2、A3 ≑ B3である。



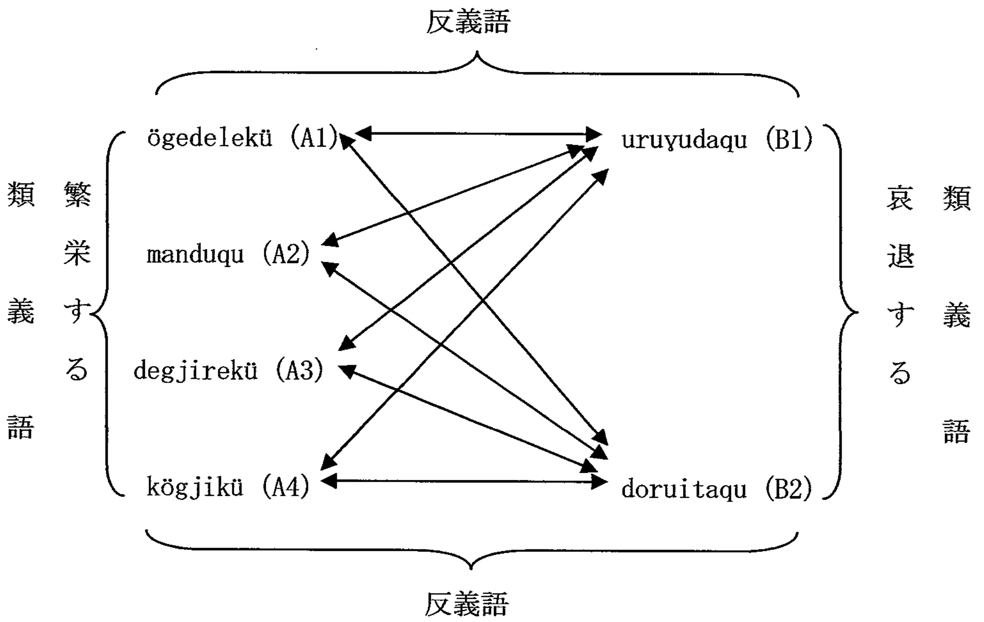
上記の分析によると、六つのペアの反義語が形成されている。つまり、A1 ≑ B1、A1 ≑ B2、A2 ≑ B1、A2 ≑ B2、A3 ≑ B1、A3 ≑ B2である。



上記の分析によると、これらの語は合わせて九つのペアの反義語を形成している。つまり、A1≑B1、A1≑B2、A1≑B3、A2≑B1、A2≑B2、A2≑B3、A3≑B1、A3≑B2、A3≑B3などの九つのペアの反義語である。



上記の分析によると、これらの語は合せて四つのペアの反義語を形成している。つまり、A1≑B1、A1≑B2、A2≑B1、A2≑B2である。

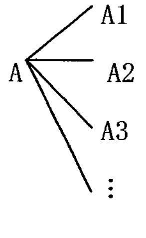


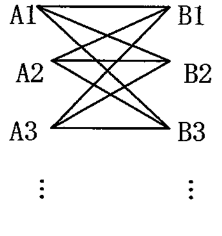
上記の分析によると、これらの語は合せて八つのペアの反義語を形成している。つまり、A1 ≑ B1、A1 ≑ B2、A2 ≑ B1、A2 ≑ B2、A3 ≑ B1、A3 ≑ B2、A4 ≑ B1、A4 ≑ B2 である。

上記の分析によって意義深いことが知られる。これは、反義語と類義語の相互関係によって形成された反義語の数について計算する公式ということである。つまり、対立している類義語の数を互いにかけて得た数である。例えば、「裕福」という意味を示している elbeg delbeg、 elbeg bayan、 önir bayan という３語と「欠乏」という意味を示している qobur čuqay、 qobur qomsa という２語を互いにかける、つまり、３×２=６である。そのように類推し計算できる。この公式を図式化すれば以下のようである。A はこの類義語の一方であり、B は他方の類義語であり、C は反義語の数である。

A × B = C

上に述べた反義語と類義語の相互関係を図で示せば以下のようにになる。

1) 

2) 

3.1.6. 反義語の共通意味領域について

反義語は相互に対立する関係にあるが、同じ意味の領域で対立し反義語になっている。同じ意味の領域とは、反義語の対立するオトハラソを指している。実際、反義語の共通の

意味領域とは反義語の同一意義素である。「同一の意味範囲の語ではなければ反義語になることができないのである」[17]。例えば、

反義語　　　　　　　　　　意味の領域

urtu（長い） ≑ oqur（短い）――― urtu-yin kemjiye（長さによって）

kündü（重い）≑ könggen（軽い）―――kündü-yin kemjiye kündüče（重さによって）

qoyina（北）≑ emüne（南） ――― jög čiglel（方向によって）

oruqu（入いる）≑ γarqu（出る）――― urun bayiri-yin siljikü（移動の方向によって）

qour（害）≑ tusa（益） ――― asiγ tusa-yin qaričaγa（利益によって）

qalaγumsuγ（優しい）≑ küyitemsüg（冷たい）――― ubur bayidal（態度によって）

qara（黒い）≑ čaγan（白い） ――― öngge ilγal（色によって）

erte（早い） ≑ orui（遅い） ――― čaγ quγučaγa（時間によって）

eregtei(男性) ≑ emegtei(女性) ――― küyisü-yin ilγal（性別によって）

untaqu（寝る）≑ serikü（目を覚める）――― nuyirmuγ bayidal-ača-ban saluγsan esekü（寝ることによって）

ajillaqu（働く）≑ amaraqu（休む）――― ajil kijü bayiqu esekü（休憩によって）

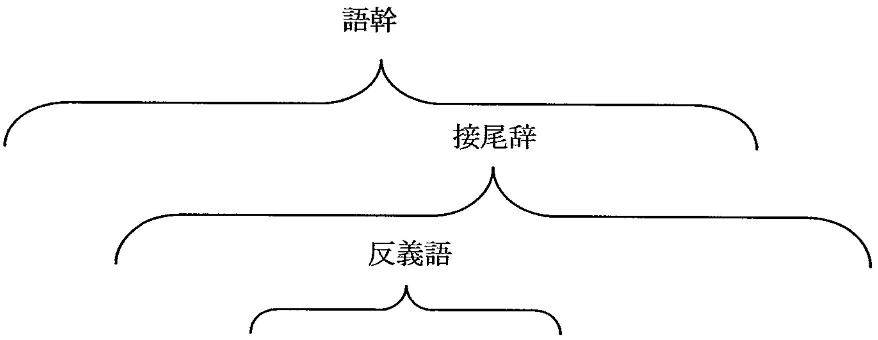
3.2. 構造的特徴

構造的特徴とは、モンゴル語の反義語がどのように形成する規則を明らかにする研究である。これまで、モンゴル語における反義語の構造的特徴について研究がなされていなかった。これは、語の構造的なことが形態論のみの範囲に研究されるという観点と関係がある。しかしながら、モンゴル語の構造的なことは意味論と密接な関係がある。モンゴル語の構造的研究は意味をもとに分析されていることは明々白々である。それで、意味論から離れてモンゴル語の構造的な特徴を研究するのは不思議である。モンゴル語における反義語研究の対象は、単語と連語であるので、構造的特徴は単語反義語の構造的特徴と連語反義語の構造的特徴という二種類分けて分析すべきである。まず、単語反義語の構造的特徴について分析する。

3.2.1. 単語反義語の構造的特徴

モンゴル語における単語反義語の構造的研究とは、語幹と接尾辞に関する研究である。モンゴル語は、語幹に接尾辞を接続して語を派生させるという膠着語であり、モンゴル語

における反義語の構造的特徴を明らかにするときに語幹、接尾辞の角度から研究しなければならない。例えば、küyitemsüg（冷たい）— qalaɣumsuɣ（優しい）という反義語は、語幹が反義語のküyiten（寒い） — qalaɣun（暑い）という語と接尾辞の- msüg と-msuɣ から構成されている。図式化すれば以下のようである。



qalaɣun +msuɣ → qalaɣumsuɣ ≑ küyitemsüg ← küyiten +msüg

モンゴル語における単語反義語の構造的特徴は、大きく二種類にわけてそれぞれ分析する。つまり、異同語幹反義語と同一語幹反義語である。

3.2.1.1. 異同語幹反義語

モンゴル語では異同語幹反義語は数量的に絶対多数で、全体の９３％を占めており、モンゴル語における反義語の中心となっている。また、異同語幹反義語の表現方法も様々である。詳しく説明するために更に二種類に分けて説明する。

3.2.1.1.1. 「語幹反義語＋接尾辞」形式の反義語

語幹が反義語になると同時に、その語幹の後ろに接尾辞を繋げて形成された新しい語も互いに反義語になるということである。この方法によって多数の反義語が形成され、モンゴル語の反義語が豊富になっている。体系的に分析するために、さらに二種類にわけて説明する。

3.2.1.1.1.1.「異同語幹＋同一接尾辞」形式の反義語

語幹が異なる反義語の後ろに同じ接尾辞を連続することによって形成される反義語を指す。この方法によって形成された反義語は非常に多数である。換言すれば、モンゴル語における反義語を形成する主な方法である。これもさらに二種類にわけて分析する。

3.2.1.1.1.1.1. ＜一語 ＋ 一接尾辞＞形式の反義語

反義語の後ろに一つの同じ接尾辞を連続することによって形成された新しい反義語を指

す。例えば、

反義語 { ünen（本当） ＋ či → ünenči （真実）
qudal（うそ） ＋ či → qudalči（偽り） } 反義語

反義語 { edür（昼） ＋ jin → edürjin（一日中）
söni（夜） ＋ jin → sönijin（夜中） } 反義語

反義語 { joɣsu（止まる）＋ ngɣui → joɣsungɣui （静止的）
ködel（動く） ＋ nggüi → ködelünggüi（運動的） } 反義語

反義語 { jujaɣan（厚い） ＋ ra- → jujaɣara-（厚くなる）
nimken（薄い） ＋ re- → nimkere-（薄くなる） } 反義語

反義語 { abliɣa（賄賂） ＋ či → abliɣači（賄賂を貪る）
öglige（施し） ＋ či → ögligeči（よく施をする） } 反義語

3.2.1.1.1.1.2. ＜一語 ＋ 二接尾辞＞形式の反義語

反義語の後ろに異なる二つの接尾辞を連続することによって形成された新しい反義語を指している。例えば、

反義語 {
jirɣa（幸せになる） { ＋ lang → jirɣalang（幸せ）
＋l → jirɣal（幸せ）
juba（悲しむ） { ＋ lang → jubalang（悲しみ）
＋l → jubal（悲しみ）
}

jirɣalang（幸せ）/ jubalang（悲しみ）：反義語

jirɣal（幸せ）/ jubal（悲しみ）：反義語

反義語

sula (弱い)
+ la- → sulala-（緩める）
+ ra- → sulara-（弱くなる）

čingɣa (力入れ)
+ la- → čingɣala-（力を入れる）
+ ra- → čingɣara-（力が入る）

反義語 / 反義語

反義語

ere （男性）
+ gtei →eregtei （男性）
+ gčin → emegčin （雌）

eme（女性）
+ gtei → emegtei （女性）
+ gčin → eregčin （雄）

反義語 / 反義語

上記の点を図式化すれば以下のようになる。

接尾辞(a)

反義語(AB)

反義語(A1B2)

A + a → A1 ≒ B1 ← B + a

接尾辞(ab)

反義語(AB)

反義語(A2B2)

反義語(A1B1)

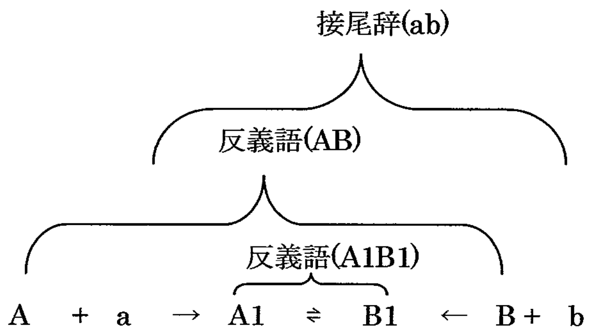
A + a&b → A1 &A2 ≒ B1 & B2 ← B +a&b

3.2.1.1.1.2. ＜異同語幹 + 異同接尾辞＞形式の反義語

これは、語幹の異同反義語の後ろに異なる接尾辞を繋げることによって新しい反義語を形成するということである。このような反義語はモンゴル語における反義語の重要な部分であり、しかもその方法はモンゴル語における反義語を増えさせる重要なルートである。例えば、

反義語	sayin（良い） ＋ qan → sayiqan（美しい） maɣu（悪い） ＋ qai → maɣuqai（醜い）	反義語
反義語	oru（入る） ＋ ɣul → oruɣul（入れる） ɣar（出る） ＋ ɣa → ɣarɣa（出す）	反義語
反義語	ögede（上り坂） ＋ le- → ögedele-（坂を上がる） uruɣu（下り坂） ＋da- → uruɣuda-（坂を下がる）	反義語
反義語	narin（細い） ＋ s- → naris-（細くなる） büdügün（太い） ＋ re- → büdügüre-（肥える）	反義語
反義語	olan（多い） ＋ sira- →olasira-（増える） čöken（少ない） ＋re- → čökere-（減る）	反義語
反義語	čeber（きれい） ＋ si- → čebersi-（きれいになる） bujar（きたない） ＋tu- → bujartu-（汚れる）	反義語

上記の点を図式化すれば以下のようになる。



3.2.1.1.2. 「語幹非反義語 ＋ 接尾辞」形式の反義語

反義語ではない語幹の後ろに接尾辞を繋げることによって形成された新しい二語は相互に反義語になるということである。当然のことながら、これらの語はその接尾辞の役割によって反義語になっているのである。接尾辞の機能は原語を変化させ、新しい語を形成することである[16]。そういう反義語がモンゴル語の中では少なくないのである。わかりやすくするためにさらに二種類にわけて説明する。

3.2.1.1.2.1. ＜異同語幹 ＋ 同一接尾辞＞形式の反義語

語幹が反義語ではない語の後ろに同じ接尾辞を繋げることによって形成された語は互いに対立して新しい反義語になるということである。例えば、

非反義語 { usu（水） ＋ da → usuda-（水害になる） / ɣang（乾燥） ＋ da → ɣangda-（乾燥する） } 反義語

非反義語 { dulaɣan（暖かい） ＋ ra → dulaɣara-（暖かくなる） / küyiten（寒い） ＋ re → küyitere-（寒くなる） } 反義語

非反義語 { ol（得る） ＋ ja → olja（利益） / ɣar（出る） ＋ ja → ɣaruja（損害） } 反義語

非反義語 { dotunu（友好） ＋ čila → dotunučila-（友好になる） / ɣadaɣur（外） ＋ čila → ɣadaɣurčila-（いじめる） } 反義語

非反義語 { čelme（晴れる） ＋ g → čelmeg（晴れ）
bürkü（覆う） ＋ g → bürküg（曇り） } 反義語

特筆すべきことは、このような特徴を持った反義語に特別な例もある。形式から見れば「異同語幹 ＋ 異同接尾辞」形式の反義語のようであるが、実際には、「異同語幹 ＋ 同一接尾辞」形式の反義語である。理由は簡単であり、モンゴル語における音位の前後の影響によって形成したためである。例えば、

反義語 { nökür（友） ＋ le- → nökürle-（友になる）
dayisun（敵） ＋ na- → dayisungna-（敵になる） } 反義語

非反義語 { noγuγan（緑） ＋ ra- → noγuγara-（緑になる）
sira（黄色） ＋ la- → sirala-（黄色になる） } 反義語

上記の分析によると、反義語の nökürlekü と dayisungnaqu という語は反義語の nökür と dayisun という語の後ろに接尾辞の le と na を連続して形成された動詞反義語ということである。ここで、その接尾辞である-le- と-na-の形式が異なるのは間違いない。しかし、詳しく分析すれば、その接尾辞の le と na は同じ接尾辞の la^{2}である。これは、モンゴル語における音声調和規則の子音調和規則によって形成されたことである。モンゴル語の音声論では、音声調和規則は重要な研究対象であり、母音調和法則と子音調和法則の二つのジャンルにわけられる。母音調和法則とは、女性語の音節は相互に、男性語の音節は相互に組み合う関係である。子音調和法則とは、子音が相互に自由に組み合わないで、選択性がある。『現代モンゴル語の形態論』という著作の説明によると「r という子音付く語に r という子音付く接尾辞を連続すれば r は l となる。m、n、ng という子音終わりの語の後ろに l という子音始めの接尾辞を連続すれば l は n となる」[17]。そのため、n という子音終わりの語に la という接尾辞を連続すれば、la という音節は na という音節になるのである。つまり、dayisungna-という語は dayisun＋ la-→ dayisungna-というように分析される。

反義語 { nökür（友） ＋ le- → nökürle-（友になる）
dayisun（敵） ＋ na- → dayisungna-（敵になる） } 反義語 ⇒

反義語 { nökür（友） ＋ le- → nökürle-（友になる）
dayisun（敵） ＋ la- → dayisungna-（敵になる） } 反義語

動詞反義語である sirala- と nuγuγara-という語の構造を分析すれば以下のようになる。

{ noγuγan（緑） ＋ ra- → noγuγara-（緑になる）
sira（黄色） ＋ la- → sirala-（黄色になる）

分析によると、sirala-と noγuγara-という反義語は、非反義語異同語幹＋異同接尾辞→反義語という構造をもつ語である。しかし、モンゴル語の子音調和規則によると、その接尾辞は異同接尾辞ではなく、同一接尾辞である。モンゴル語の子音調和法則によると、sira という語の後ろに ra という音節を連続すれば、接尾辞 ra という音節は語幹 sira の ra の影響で、la という音節になる。それで、結論は以下のようになる。

非反義語 { noγuγan（緑） ＋ ra- → noγuγara-（緑になる）
sira（黄色） ＋ la- → sirala-（黄色になる） } 反義語 ⇒

非反義語 { noγuγan（緑） ＋ ra- → noγuγara-（緑になる）
sira（黄色） ＋ ra- → sirala-（黄色になる） } 反義語

上記の点を図式化すれば以下のようになる。

接尾辞(a)

非反義語(AB)

反義語(A1B1)

A ＋ a → A1 ≑ B1 ← B ＋ a

3.2.1.1.2.2. 「異同語幹　＋　異同接尾辞」形式の反義語

語幹が異なる非反義語の後ろに異なる接尾辞を繋げることによって構造された語は相互に対立して新しい反義語になるということである。このような反義語はかなり多いのである。

非反義語
- qurdu（スピード）＋ n → qurdun（速い）
- uda（遅れる）＋ ɣan → udaɣan（遅い）

反義語

非反義語
- tarɣu（肉付き）＋ n → tarɣun（太い）
- tura（痩せる）＋ ngqai → turangqai（細い）

反義語

非反義語
- küčü（力）＋ rkeg → küčürkeg（強い）
- baɣu（降りる）＋ rai → baɣurai（弱い）

反義語

非反義語
- ükü（死ぬ）＋ mel → ükümel（まぬけな）
- amidu（生きる）＋ liɣ → amiduliɣ（すばしこい）

反義語

非反義語
- qara（黒い）＋ ngɣui → qarangɣui（暗い）
- gege（明るい）＋ n → gegen（明るい）

反義語

上記の点を図式化すれば以下のようになる。

接尾辞(ab)

非反義語(AB)

反義語(A1B1)

A ＋ a → A1 ≑ B1 ← B ＋ b

3.2.2.1. 同一語幹反義語

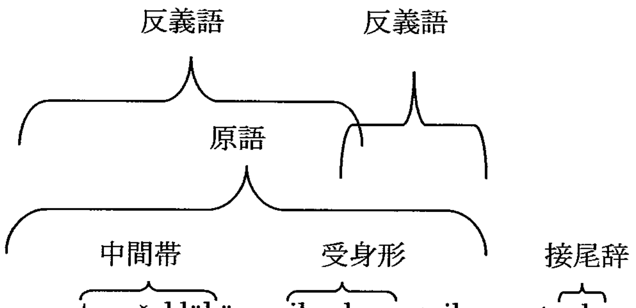
モンゴル語では、語幹が同じ反義語は少ないが、特有な特徴を持っており、語幹が異なる反義語とはっきり区別されている。詳しく説明するため、さらに二種類にわけて分析する。

3.2.2.1.1. 受身形の反義語

モンゴル語の受身形とその原語に対立して同じ語幹の反義語を形成するということである。モンゴル語の中では、受身形の反義語は非常に少数である。ここで、特に強調することは、モンゴル語の全ての受身形とその原語は反義語になることができないのである。例えば、**sonusqu**（聞く）— **sonusuɣdaqu**（聞こえる）、**čoqiqu**（殴る）— **čoqiɣdaqu**（殴られる）、 **alaqu**（殺す）— **alaɣdaqu**（殺される）、 **üjekü**（見る）— **üjegdekü**（見える）、 **kelekü**（言う）— **kelegdekü**（言われる）などの例は原語と受身形であるが互いに反義語になることができないのである。

3.2.2.1.1.1. 動詞受身形の反義語

モンゴル語における動詞受身形の反義語は **ilaqu**（勝つ）— **ilaɣdaqu**（負ける）、**deyilkü**（勝つ）— **deyilügdekü**（負ける）などである。それらの反義語の特徴は受身形と受身形、原語と原語は相互に類義語であり、しかも **tengčeldükü**（引き分ける）という中間帯がある両極反義語である。図式化すれば以下のようになる。



ilaqu — **tengčeldükü** — **ilaɣdaqu** ←**ilaqu** + **ɣda**

deyilkü — **tengčeldükü** — **deyilügdekü** ← **deyilkü** + **gde**

上記の点を図式化すれば以下のようになる。C は中間帯(または移動的意味)である。

反義語　　反義語　接尾辞

中間帯

A　—　C　—　B　← A+ɣda（gde）

3.2.2.1.1.2. 名詞受身形の反義語

モンゴル語における名詞受身形の反義語は darulaɣči（圧迫者）≒ darulaɣdaɣči（被圧迫者）、 möljigči（圧迫者）≒ möljigdegči（被圧迫者）、 noyarqaɣči（圧迫者）≒ noyarqaɣdaɣči（被圧迫者）、ilaɣči（勝利者）≒ ilaɣdaɣči（失敗者)、 jaɣalduɣči（原告）≒ jaɣalduɣdaɣči（被告）などである。これらの反義語は中間帯がない相補反義語である。

反義語

原語　　受身形　　語幹　　接尾辞

darulaɣči ≒ darulaɣdaɣči ← darula（圧迫する）　+ɣda + ɣči

möljigči ≒ möljigdegči ←mülji（搾取する）　+ gde+gči

noyarqaɣči ≒ noyarqaɣdaɣči ← noyarqa（圧迫する）　+ɣda + ɣči

ilaɣči ≒ ilaɣdaɣči ← ilaqu（勝利する）　+ ɣda + ɣči

jaɣalduɣči ≒ jaɣalduɣdaɣči ← jaɣaldu（起訴する）　+ɣda + ɣči

上記の点を図式化すれば以下のようになる。

反義語　　　　接尾辞

語幹

A　—　∅　—　B ← C + ɣda　(gde) + ɣči (gči)

同一語幹の反義語に関して、küsel（希望）≒ küserdel（失望)、 küsekü（希望する）≒ küserdekü（失望する）という二つの反義語も存在していることを注意しよう。

3.2.2.2. 二語幹反義語

モンゴル語では、ほどんとの単語が一語幹の語であるが、非常に少数の単語が二語幹より形成されている。「モンゴル語では多数の語は語幹が一つであるのに対して、時折二つの

語幹から構成される語もある。これは二語幹の語である」[18]。つまり、異なる二つの単語が一つの単語として使用される時、いくつかの音声が脱落して形成される語である。例えば、duuɣarqu（ daɣu ＋ɣarqu）＜声が出る＞、ɣayiɣui（ ɣai＋ ügei）＜大丈夫＞、büsegüi（ büse＋ ügei）＜妻＞、örübdekü（ örü＋ ebedkü）＜同情する＞、önüdür（ önü ＋ edür）＜今日＞などである。このうち、一つの語は反義語になる。構造は《動詞＋動詞 → 複合動詞》ような形式である。

abču （持つ）＋irekü（来る） → abčiraqu （持ってくる）≑ abačiqu（持っていく） ← abču（持つ） ＋očiqu（行く）

これはモンゴル語における語の構造的特徴の特殊な現象である。

上記の点を図式化すれば以下のようになる。

反義語（A2B2）

単語　　二語幹反義語　　単語

A1 ＋ A2 → A ≑ B ← A1 ＋ B2

以上の事柄を要約すれば、モンゴル語における単語反義語の構造のモデルは以下の通りである。

反　義　語

異同語幹反義語　　同一語幹反義語

反義語＋接尾辞　　非反義語＋接尾辞　　受身形の反義語　　二語幹反義語

反義語＋同一接尾辞　反義語＋異同接尾辞　非反義語＋同一接尾辞　非反義語＋異同接尾辞　動詞反義語　名詞反義語　動詞＋動詞 → 二語幹反義語

以上、構成分析方法を使用してモンゴル語における単語反義語の構造的特徴について詳しく分析して、さらにモンゴル語における反義語の構造的モデルを明らかにした。このことは、モンゴル語における反義語の研究を進めることができるだろうと思われる。

3.2.2. 連語反義語の構造的特徴

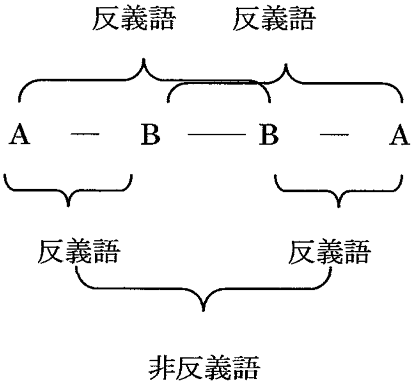
モンゴル語の反義語研究の中で、研究されていないことは多数あり、連語反義語はその一つである。これまで、モンゴル語における反義語の研究対象は単語のみに限られてきた。例えば、sayin（良い）≑ maγu（悪い）、 yeke（大きい）≑ baγa（小さい）、 nökür（友）≑ dayisun（敵）、 irekü（来る）≑ očiqu（行く）などである。これは、モンゴル語の反義語研究の対象となる語の一部分を研究したにすぎない。つまり、もう一つの重要な研究対象である連語反義語の研究を見落としてきた。そのことによって、モンゴル語の反義語とは単語だけの反義語であるというイメージを残してきた。しかしながら、モンゴル語の反義語の研究対象は単語だけではなく、連語の反義語も存在している。例えば、erkim degedü（上品）≑ egel douradu（下品）、 ünenči siduryu（誠実）≑ jisur jaliqai（狡猾）、 aburγu yeke（膨大）≑ öčüken baγa（微小）、 γang qaγurai（干ばつ）≑ čigig noyitan（湿気）、ajilči ködelmüriči（働き者）≑ jalqaγu qoyirγu（怠け者）などである。意味の点について「単語より連語のほうが意味をもっと強調する役割がある」[19]。単語反義語と連語反義語の数量について、単語反義語の数が連語反義語の数よりはるかに多いのである。具体的に言えば、単語反義語は合わせて５４０組であり、連語反義語は１２０組である。それで、連語反義語もモンゴル語における反義語の研究対象として、無視してはならない研究課題である。

3.2.2.1. 連語反義語の概念について

連語反義語という概念を説明する前にまず連語について説明する必要があるだろう。連語の概念について学者達によって説明が異なるので、意見が一致していないのである。内モンゴルにおけるモンゴル語学者達の研究成果である『現代モンゴル語』という著作では、連語について「二つあるいは二つ以上の語が組み合わせ使用されており、慣用句の概念を表す複合語である」と説明している[20]。この説明によると、モンゴル語の連語は複合語一つのジャンルで、複合語は上位概念であり、連語は下位概念の関係であると説明している[2]。この二つの概念は、属する関係と属される関係である。また、構造の数量について、

二つあるいは二つ以上の語から構成されていると説明している。モンゴル国の学者達の研究成果である『現代モンゴル語の意味論の基礎』という著作では、連語の概念について「二つの語から構成され、単語より抽象的な意味を表す語彙論の研究対象である」と説明している[21]。この説明によると、連語は二つの単語から構成され、しかも語彙論の研究対象であるということである。しかし、この二つの著作は、連語は語彙論の研究対象であるという点で意見は一致している。連語の構造の数量について、『現代モンゴル語』では二つあるいは二つ以上の単語から構成されていると説明しているのに対して、『現代モンゴル語の意味論の基礎』では連語が二つの単語から構成されていると説明している。しかし、『現代モンゴル語』に説明している連語の例の中では、二つ以上の単語から構成された例はまったく現れていなかった。その他、『現代モンゴル語』に、名詞連語、動詞連語、その他の連語という三つの種類にわけて、さらに他の連語の中では、形容詞連語と副詞連語とわけて説明している[22]。『現代モンゴル語の意味論の基礎』という著作でもモンゴル語の連語は主に名詞、動詞、形容詞から構成されると記述している[23]。『モンゴル語の連語辞典』によると、名詞連語、動詞連語、形容詞連語が多いのである[24]。総じて、モンゴル語の連語は、二つの単語から構成されている語彙論の研究対象であり、名詞連語、動詞連語、形容詞連語は多数であるという特徴を持っている。その中では、二つの単語から構成され、語彙論の研究対象ということが基本的な特徴であり、この二つの条件はどちらも欠くことができないのである。連語についての説明を理解することによって連語反義語という用語の概念が明らかになるだろう。連語反義語とは、対立関係がある連語である。構造の数量の点で、それぞれ二つの単語から構成されており、すなわち合わせて四つの単語である。また、連語の使用頻度について研究したこともある。「連語反義語の使用頻度について、第一番目は名詞の連語反義語、第二番目は、副詞の連語反義語、第三目は形容詞の連語反義語、第四目は動詞の連語反義語である」[25]。また、モンゴル語の連語は様々な方法によって形成されるが、非常に重要な二つの方法を説明しなければならない。一つの方法は、二つの類義語による形成である。例えば、**jirɣal čenggel**（幸福）、**ösiye qorusul**（憎み）、**sečen sergüleng**（賢い）、**qayiralaju sanaqu**（愛する）、**ögedelen dabsiqu**（繁栄）など多数ある。もう一つの方法は二つの反義語による形成である。『モンゴル語における連語の構造と範囲』という研究論文によると、「モンゴル語における連語は五つの方法によって形成され、その中で一番目の方法は反義語から構成されている」と述べている[26]。例えば、**asiɣ qour**（益—害）、**sayin maɣu**（良い—悪い）**tölkikü tataqu**（押す—引く）、**ögede uruɣu**

（上り坂—下り坂）など多数ある。しかし、連語反義語の研究対象は全ての連語ではなく、つまり反義語から構成されている連語を除く他の連語を研究対象として研究する。なぜならば、反義語から構成されている連語に反義語がなく、原語が反義語からである。例えば、A と B は反義語であり、A—B は反義語から構成された連語である。A—B 連語が対応する反義語があると考えれば、その反義語は B—A になるしかないのである。つまり A という単語の反義語が B という単語であると、当然のことながら B という単語の反義語が A という単語である。



上記の分析によると、A—B 連語と B—A 連語は異なる二つの単語から構成されているということである。これは、連語反義語は三つの異なる単語（ögede čirai ⇔ uruγu čirai,usun γamsiγ ⇔ γang γamsiγ）あるいは四つの異なる単語（erelkeg baγatur ⇔ ögenče dorui, učaran jolγaqu ⇔ qaγačan salqu）から構成される（このことについて後説明する）という特徴と矛盾する。つまり、反義語になることができないということを証明している。「反義語から構成された連語に対応する反義語がないのである」[27]。具体的な実例を分析しよう。sayin（良い） — maγu（悪い）という反義語から構成された sayin maγu という連語に反義語があると思うと maγu sayin ということになるしかない。実際、sayin maγu という連語と maγu sayin という連語は反義語になることができないだろう。意味の点で、sayin maγu という連語は、益があるか否かをわからない（sayin maγu-yi ilγaqu ügei）という意味であるが、maγu sayin という連語は価値がないもの（edeger maγu sayin amitad-i itegejü bolqu ügei）という軽蔑する意味である。なお、反義語から構成された全ての連語は、位置が交換することができるとは限らない。つまり、A—B 連語は B—A 連語になることができない場合もある。このことについて第六章に説明する。反義語から構成された連語は主に「時間、空間、数量、性質、変化、状態、過程、人間関係、行為関係、感情態度、地位順番」などの意味について表している[28]。

モンゴル語における連語の構造の主な特徴は反義語から構成されることと類義語から構成されるということである。「モンゴル語における連語の構造の最も重要な特徴は類義語より形成されることと反義語より構成されることである」[29]。

モンゴル語の連語反義語の構造的特徴について詳細に説明するために、連語反義語の構造形式、連語反義語の意味関係、連語反義語の対立関係などの三つの角度から分析する。

3.2.2.2. 連語反義語の構造形式

モンゴル語における連語反義語は四つの単語から構成されている。この四つの単語が全て異なっている場合と、二つの単語は異なっている場合と二種類ある。引き続き、それぞれ説明する。

3.2.2.2.1. 全部異同連語反義語

連語反義語を形成している四つの語は全て異なるということである。このような反義語は、モンゴル語における連語反義語の中で多数あり、合わせて１０５組ある。全体の８８％を占めており、連語反義語のトップである。例えば、

dotuɣadu jasaɣ（内政） ≑ ɣadaɣadu qarilčaɣa（外交）

darulal möljil（圧迫） ≑ esergüčel temečel（反抗）

alus qola（はるかに遠い） ≑ oyira orčim（近所）

elbeg　delbeg (余裕)≑ qobur čuqaɣ（稀少）

jirɣaju čenggekü（喜ぶ） ≑ 　ɣuniju ɣuturaqu（苦しむ)、

qairalaju sanaqu（愛する） ≑ qorusun januqu　（憎む)、

arbilan ɣamnaqu（倹約）≑ börilgen süyidgekü（贅沢する)、

sula jadaɣai（いい加減な） ≑　narin kinamaɣai（しっかり）

上記の点を図式化すれば以下のようになる。

A　―　B ≑ C　―　D

3.2.2.2.2. 二語異同連語反義語

連語反義語の二語は同じであるが、あとの二語は異なる反義語を指している。このような反義語は少数であり、合わせて１５組で、連語反義語の１２％を占めている。このような反義語は異なる三つの単語から構成されている。例えば、

bayartu jüčüge（喜劇） ≑ γuniγtu jüčüge（悲劇）、

qorwa tokiraγululta（マクロ的なコントロール） ≑ qumaki tokiraγululta（ミクロ的コントロール）、

aγadar boruγan（大雨） ≑ jüser boruγan（小雨）

čengken usu （塩水）≑ surbuγ usu（淡水）

öberminče ončaliγ（個性） ≑ neyitelig ončaliγ（共通性）、

tegsi toγa（偶数） ≑ sondaγai toγa（奇数）

jöb tala（右側） ≑ boruγu tala（左側）

上記の点を図式化すれば以下のようになる。

A — B ≑ C — B

上述したことをまとめると、モンゴル語における連語反義語の構造形式は異なる三つの単語あるいは四つの異なる単語から構成されていることである。つまり、一番目の全部異同連語反義語は四つの異なる単語から構成されており、二番目の二語異同連語反義語は三つの異なる単語から構成されている。

3.2.2.3. 連語反義語の意味関係

モンゴル語における連語反義語は、前後の語の意味関係に基づき、対等関係の反義語と支配関係の反義語の二種類にわけられる。これが、モンゴル語の形態論に分析している并列関係の構造（jergečegsen qaričaγa）や修飾関係の構造（totudγaγsan qaričaγa）と理屈は同じである。

3.2.2.3.1. 並列関係の反義語

これは、連語反義語の前後の二語が横関係（kündelen qaričaγa）であり、つまり相互に並列関係の連語反義語である。このような連語反義語の特徴はそのそれぞれ連語が類義語から構成されている。モンゴル語における列関係の連語反義語は合わせて８８組あり、全体の７３％を占めている。例えば、

bujar burtaγ（汚い） ≑ ariγun čeber（きれい）

ügegüü yadaγu（貧乏） ≑ bayan činegelig（余裕）

eregül bütün（健全な） ≑ jemdeg dutaγu（欠けていること）

uyidqar bokinidul（苦しみ） ≑ bayar jirγal（幸福）

sečen sergüleng（賢い）≑ bidaɣu mongqaɣ（愚か）

qobur čuqaɣ（少ない）≑ elbeg bayaliɣ（多い）

ɣabiya jidkül（貢献）≑ ɣala nigül（罪悪）

上記の点を図式化すれば以下のようになる。

反義語

類義語（並列関係） 類義語（並列関係）

A — B ≑ A1 — B2

3.2.2.3.2. 支配関係の反義語

連語反義語の前後の二語は横関係ではなく、逆に縦関係（ɣoldu qaričaɣa）であり、支配する関係と支配される関係の反義語を支配関係の反義語と称する。さらに連語反義語のそれぞれ二語は中心語と非中心語にはっきり区別され、中心語は非中心語を支配し、非中心語は中心語に支配される関係である。支配関係の連語反義語は合わせて３２組あり、全体の２７％を占めている。このような連語反義語もさらに二種類にわけて分析する。

3.2.2.3.2.1. 支配する中心語は同一反義語

これは、連語反義語の中で、支配する中心語は同じであるが、支配されている非中心語は異なる反義語である。このような連語反義語は異なる三つの単語から構成されている。例えば、

bayartu jüčüge（喜劇）≑ ɣuniɣtu jüčüge（悲劇）、

siɣun qaričaɣatu（正比率）≑ urbaɣu qaričaɣatu（反比率）

dabaɣuliɣ tala（長所）≑ baɣurai tala（欠点）

neyitelig487 ončaliɣ（共性）≑ öbermiče ončaliɣ（個性）

上記の点を図式化すれば以下のようになる。

非中心語 中心語（同一）

a — A ≑ b — A

3.2.2.3.2.2. 中心語と非中心語は異同反義語

連語反義語の中で、支配する中心語と支配される非中心語は全て異なる反義語を指す。

このタイプの反義語は異なる四つの単語から構成されている。例えば、

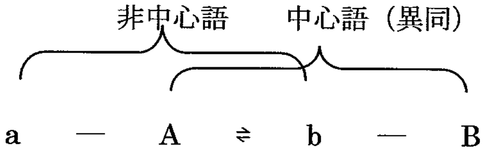
labai čaɣan（真っ白い） ≒ kö qara（真っ黒い）

aɣagima　qalaɣun（蒸し暑い）≒　qakir küyiten（非常に寒い）

eres ondoo　（まったく異なる）≒ egege adali（まったく同じ）

oki silideg（最も良い）　≒ adaɣ maɣu（最も悪い）

上記の点を図式化すれば以下のようになる。

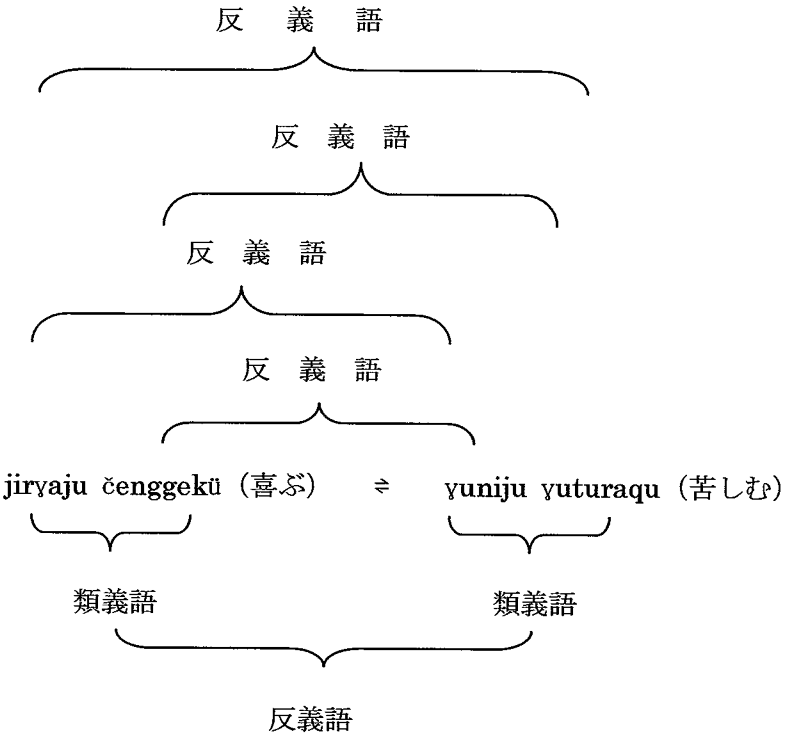


3.2.2.4. 連語反義語の対立関係

モンゴル語における連語反義語の対立関係の種類は多く、しかも構造は複雑である。モンゴル語における連語反義語の対立関係をまとめると六種類にわけられる。この六つのジャンルの対立関係の詳しい分析がモンゴル語における連語反義語研究のポイントである。

3.2.2.4.1. 全部対立関係の反義語

連語反義語のそれぞれ連語は相互に対立しながら四つの単語反義語を形成するということである。このような連語反義語の特徴はその連語は二つの類義語から構成されているということである。例えば、



そのほか、別の例もある。

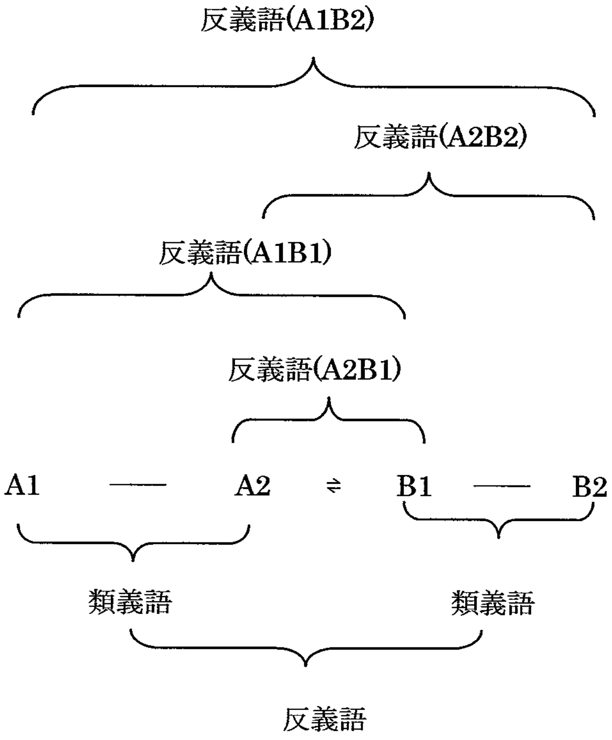
ači tusa(利益) ≑ qour könügel (損害)

kögjijü manduqu (繁栄する) ≑ iljaran doruyitaqu (衰退する)

nomuqan sidurγu (おとなしい) ≑ jerlig balmad (野蛮な)

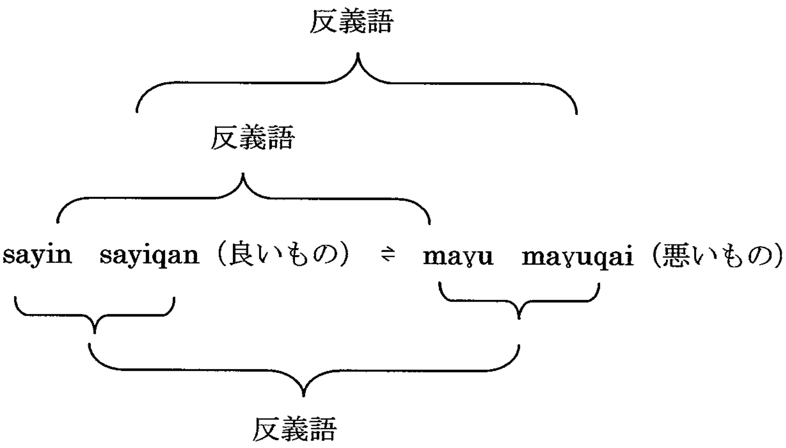
aγujiγu talbiγu (ゆっくり) ≑ yaγarau sandarau (忙しい)

上記の点を図式化すれば以下のようになる。



3.2.2.4.2. 対等対立関係の反義語

連語反義語のそれぞれ連語の前語は互いに対立し、後語は互いに対立して対等対立の反義語を形成するということである。このような連語反義語の連語は二つの単語反義語を形成することができる。例えば、

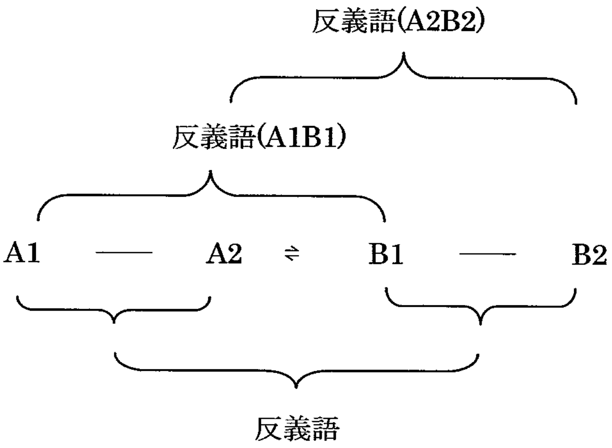


そのほか別の例もある。

egel douradu（下品） ≑ erkim degedü（上品）

qudal　qaγurmaγ（偽物）≑　ünen bodatu（本物）、

上記の点を図式化すれば以下のようになる。



3.2.2.4.3. 後語対立の反義語

連語反義語のそれぞれ連語の後者の単語は互いに反義語になるが、前者の単語は互いに反義語になれない連語反義語を指す。その連語の前後語は中心語と非中心語とわけられており、非中心語は中心語の程度状態を表し、中心語は反義語になっていることである。このような連語反義語は一つの単語反義語を形成するしかない。例えば、

程度語　反義語

šal　ondoo（まったく異なる）≑ egege　adali（まったく同じ）、

そのほかまた別の例もある。

labai čaɣan（真っ白い）≑ pad qara（真っ黒い）、

qakir küyiten（非常に寒い）≑ aɣagima qalaɣun（蒸し暑い）、

tesgime　küyiten（とても寒い）≑ bügčim　qalaɣun（とても暑い）

上記の点を図形式すれば以下のようである。

程度語　反義語

A1 —— A2 ≑ B1 —— B2

3.2.2.4.4. 前語対立関係の反義語

連語反義語における連語のそれぞれ前者の単語は互いに反義語であるが、後者の単語は相互に反義語ではない連語反義語を指す。その連語の二つの単語も中心語と非中心語にわけられており、中心語が同じであり、非中心語が対立して反義語になっていることである。このような連語反義語は一つの単語反義語を形成するしかない。例えば、

反義語（非中心語）　同一語（中心語）

bayartu　jüčüge（喜劇）≑ ɣuniɣtu　jüčüge（悲劇）、

そのほか、別の例もある。

šorbuɣ usu（塩水）≑ čenggeg　usu（淡水）

qorwa　tokiraɣululta（マクロ的なコントロール）≑ qumaki tokiraɣululta（ミクロ的コントロール）

öbermiče　ončaliɣ（個性）≑ neitelig　ončaliɣ（共通性）

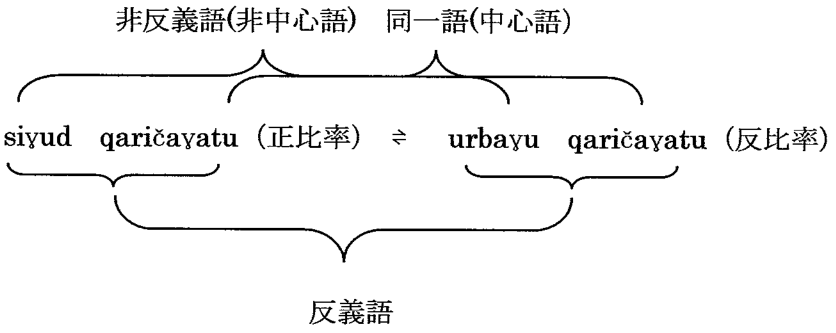
上記の点を図式化すれば以下のようになる。

反義語（非中心語）　同一語（中心語）

A1 —— A2 ≑ B1 —— A2

3.2.2.4.5. 整体対立関係の反義語 I

連語反義語の連語それぞれ前語は相互に異なるが、反義語にならず、後語は相互に同じである連語反義語を称する。具体的に言えば、A という単語と B という単語は単語として反義語になることができないが、C という単語と組み合わせて用いられると、つまり A—C という連語と B—C という連語が反義語になるということである。このような連語反義語の四つの単語は単語反義語を一つも形成することはできない。しかし、連語の整体として連語反義語になる。例えば,



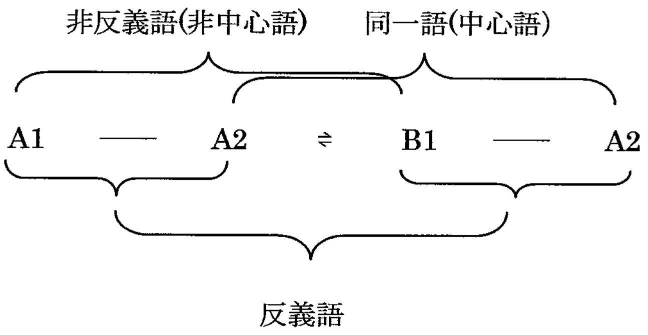
そのほか、別の例もある。

qara miqa（赤身の肉） ≑ taryun miqa（肉の脂身）、

youl urusqal（主流） ≑ salburi urusqal（支流）、

tegsi toya（偶数） ≑ sondayai toya（奇数）

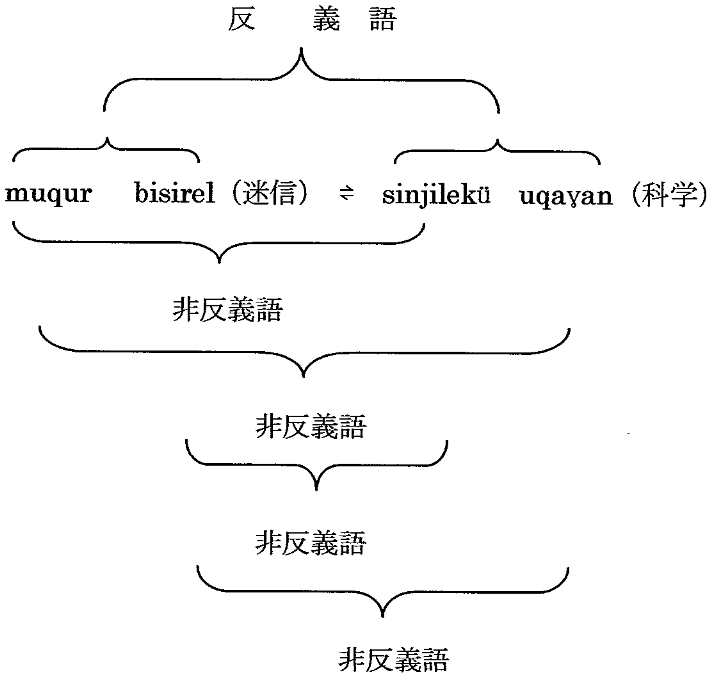
上記の点を図式化すれば以下のようになる。



3.2.2.4.6. 整体対立関係の反義語 II

連語反義語の四つの単語は全て異なり、しかもその四つの単語は互いに対立して単語反義語をまったく形成することはできない連語反義語である。具体的に言えば、A という単語と B という単語から構成された A — B という連語は、C という単語と D という単語から構成された C — D という連語と反義語になるが、A という単語が C という単語あるいは

Dという単語と反義語になることができないであり、Bという単語はCという単語あるいはDという単語にも反義語になることができない。つまり、連語の整体として連語反義語になる。例えば、



その他、別の例である。

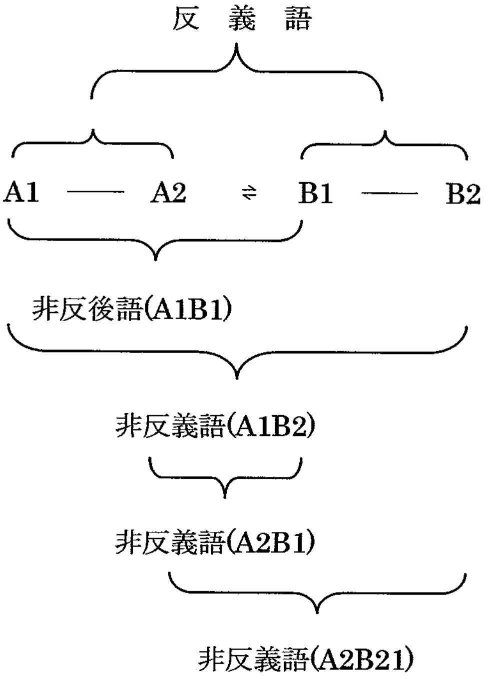
sula jadaɣai（いいかげん）≒ narin kinamaɣai（しっかり）

degem　degegür（いいかげん）≒ narin　niɣta（しっかり）

qasi yasi（うやむや）≒ narin nimbai（真剣）

könggen qaɣumaɣai（うやむや）≒ niɣta nimbai（慎重）

上記の点を図式化すれば以下のようになる。



上記のように、モンゴル語における連語反義語の六種類の意味関係をまとめれば以下のようになる。

連語反義語の対立関係

- 全部対立関係の反義語
- 対等対立関係の反義語
- 後語対立関係の反義語
- 前語対立関係の反義語
- 整体対立関係の反義語 I
- 整体対立関係の反義語 II

モンゴル語における反義語の研究対象は単語と連語の二種類がある。これが現実であるということをモンゴル語の実態は証明している。「モンゴル語では連語で構成された反義語の存在を否定することはできない」という言い分は理屈に合っている[30]。単語のみを対象として反義語を研究すると、モンゴル語における反義語の特徴と性質を全面的に明らかにすることができない。更に、モンゴル語における反義語の構造のモデルについて全面的に明かにすることができない。したがって、モンゴル語の反義語研究は単語反義語と連語反

義語を共通に研究しなければならない。それによって、モンゴル語の反義語研究を深めるのに役立つだろう。モンゴル語における反義語の研究対象の範囲を広げて研究することは、モンゴル語の反義語研究の進歩であることは間違いない。

3.3. 民族的特徴

3.3.1. 言語は社会現象である。「言語は社会から離れることができないし、社会も言語から離れることができない」[31]。同じ意味を異なる言語に異なる発音で示す。例えば、自己を生んだ女性をモンゴル語では eji、eke などの語で表現するが、日本語でお母さん、母、中国語で妈妈、母亲、英語で **mother**、 **mummy** などの語で表現している。また、同じ発音でも異なる言語では異なる意味を表す。例えば、モンゴル語の či という二人称の代名詞は、中国語では数字の七などの意味を示す。

3. 3. 2. 人間のコミュニケーションの手段として、異なる民族の語にその民族の生活と文化の特別な特徴が反映されている。「言語は文化の担体である。その民族の文化についての概念はその民族の言語に反映される」[32]。敬語は日本語の重要な特徴である。このことは、特に外国人にとって難しい点であると同時に興味深い点である。「日本語の大きな特色の一つとして「敬語」が採り上げられることも多く、日本語の教師や学習者には＜日本語を本当に習得するためには敬語は欠かすことのできないものだ＞という認識も強いのだろうと思います」[33]。また、日本は島国であることから、日本人の生活の中で、魚は欠かすことができない食品である。そして、魚についての語も様々である。『図解日本語』という本はこう述べている。「同じ魚でも、「鰤」が、「ワカシ、イナダ、ワラサ、ブリ」というように、成長階段に応じて異なる名前で呼ばれるものもある」[34]。やっぱりその通りである。ラクダは砂漠に暮らしている動物である。ラクダは、モンゴル人の五畜（tabun qusiγu mal）の一つであり、現在、主に内モンゴルの西部のアルシャン盟に集中している。アルシャンには、砂漠が多いからである。ラクダについて、モンゴル語には様々な言い方がある。一歳のラクダは botuγu と称し、tayiluγ は二歳から五歳の雄ラクダを称し、ingge とは語は５歳以降の雌ラクダを称し、buura とは成年雄ラクダをそれぞれ称している。アラビア語では、ラクダの役割によって名前は異なる。アラビア民族では、ラクダは交通工具として使用されている。「言葉というものは、生活と深いかかわりを持っている。動物のラクダは、日本語では「ラクダ」という単語しかない。どころが、アラビア語には、同じラクダを押すのにも、「人が乗るためのラクダ」「荷物を運ぶためのラクダ」など、それぞれ違う単語

がある。砂漠に生きる人々にとってラクダが生活に欠かすことのできないものだから、それだけ言葉も細かく使い分けるようになったらしい」[35]。モンゴル人は昔から牧畜業に頼って暮らしてきた遊牧民族である。したがって、モンゴル語の中では、牧畜業についての語が豊かであるのは言うまでもない。例えば、牛は年歳によって呼称がまったく異なる。「tuγul（一歳牛）、 biraγu（二歳牛）、 sidüleng（三歳牛）、 qijalang（四歳牛） 、suγulang（五歳牛）それぞれである」[36]。その他、üker に関する語は üniye（乳牛）と buqa（種牛）という二つの言い方がある。 B. リンチンは「語の意味について」という著作の中で、「地球の北方で暮らしている lapun（[illegible], ラップー）という民族の語には、氷を表す語は２０ほどあり、寒さについての語は１１あり、雪について語は４１ある」と述べている[37]。また、『文化意味論』という本に、色を表した語についてこう述べている。「ハンガリー語には英語の **red** という語と対応する単語はないし、フランス語には英語の **brown** という語ときちんと対応する単語はないし、スペイン語とイタリア語には、英語の **blue** という単語と対応する単語はないのである」[38]。諺にも民族的特徴が反映されている。例えば、「鶏口となるとも牛後となるなかれ」という中国の諺は、国々によって、いろいろな言い方がなされている。日本：小鳥の頭―大鳥の尾、イギリス：ろばの頭―馬の尾、フランス：かますの頭―鮫の尾、イタリア：猫の頭―ライオンの尾、スペイン：極楽の下部―地獄の王」[39]。これは、言語が民族性あることをはっきり示している。

3.3.3. 言語は民族の特徴であるので反義語も当然民族の特徴を持っている。これは、国家、または地域の社会、文化、生活、習慣、歴史、環境の差異によって形成されたことである。こうしたことは反義語の民族特徴の基礎である。「異同の民族言語における反義語はまったく同一ということは限らないのである。これは、反義語の民族の特徴を形成した」[40]。

反義語は言語によって異なる。つまり、全ての言語の反義語が同じということではない。「反義語は語彙論においての分布は均衡ではないのである」[41]。ある言語に存在している反義語は他方の言語に存在しているとは限らない。「異なる民族の言語においての反義語は異なるのは当然のことである」[42]。これは、反義語の民族特徴の一つの点である。具体的な例によって分析しよう。

日本語における「買う」―「売る」という反義語は中国語（买—卖）、英語（**buy— sell**）などにきちんと対応する反義語あるのに対して、モンゴル語で対応する反義語はないのである。この反義語をモンゴル語では **qudalduqu — qudaldun abqu** という語で示すが、当

然、反義語にならない。単語と複合語の対立関係からである。その他、中国語の「娶 —嫁」という反義語はモンゴル語にはないのである。また、深さを示した反義語はモンゴル語（gün ⇔güyüken）、日本語(深い⇔ 浅い)、中国語（深 ⇔ 浅)、英語(deep ⇔ shallow)には存在している。しかし、意味論の学者である石安石はこう述べている。「英語には天と地は反義語にならない。フランス語とスペイン語では浅いと深いという反義語がない。フランス語とスペイン語では、深いという意味を表した profond(フランス語) と profondo(スペイン語)のみあるが、浅いという意味を示す語がない。ロシア語の больше(より多い)⇔меньше(より少ない)という反義語、英語の best⇔ worst という反義語は中国語にはいないのである」[43]。ロシア語の больше(より多い) ⇔ меньше(より少ない)や英語の best⇔worst という反義語が、モンゴル語と中国語で反義語になることができないのである。日本語では、「山一川」という反義語あるが、モンゴル語と中国語では反義語になることができないのである。また、「アフリカ、アメリカ州のインディアン及びオセアニアの多数の言語では、悪いという単語がないのであり、よくないという語で悪いという単語の意味を表す。Hausa という語では、狭いという単語がないのである。広いという意味を広さという語で表し、狭いという意味を広さは不足するという語で表す」と述べている[44]。これは、反義語についての意義深い民族の特徴である。

なお、反義語から構成された語の位置の順番は言語によって異なる場合もある。実例は以下のようである[45]。

中国語	英語	中国語	ロシア語
貧富	rich and poor	水火	огонь и вода
左右	right and left	甘苦	горе и радость
新旧	old and new	貧富	богатый и бедный

モンゴル語では、emüskü（着る、穿く） — tayilqu（脱ぐ）という反義語がある。中国語ではきれいに対応する反義語「穿—脱」がある。それでは、日本語の場合はどうなるか。モンゴル語では emüskü という語が服、シャツ、ズボン、靴などの場合は全部通じるが、日本語の場合は異なる。日本語では、服、シャツなどの場合は着るという語で表しが、ズボン、靴などは穿くという異なる語で表す。したがって、「着る一脱ぐ、穿く一脱ぐ」という二つの反義語が形成されてきた。これは、日本語における反義語の特別な特徴である。『日本語新辞典』で以下のように説明している。「着る」は、上半身、または、上半身と下半身を覆う衣類について使う。「パンツ・ズボン・スカート・靴下・ストッキング・靴・げた」

など、下半身を覆うものについては「はく」を使う」[46]。

モンゴル人は遊牧民族である。ラクダ、牛、馬、羊、山羊などの家畜を五畜（tabun qusiyu mal）と言う。体の大きさによって、boda mal と boy mal の二種類にわけている。大きなものを boda mal というのに対して、小さなものを boy mal と言う。この五畜は、モンゴル人の生活や社会と密接な関係を持っている。したがって、モンゴル人は家畜の体の大きさに基づき、大型のものを boda mal という呼称で表現し、小型のものを boy mal という呼称で表現指す習慣は昔から伝えられてきた。「モンゴル人はこの五つの家畜の大きさによって boda mal（大型のやつ）と boy mal（小型のやつ）とわけて、その boda mal であるラクダ、牛、馬で大きなものを比喩的意味として転用し、boy mal である羊、山羊というもので小さなものを比喩的意味として転用することになった」[47]。これは、モンゴル語の反義語の顕著な特徴である。例えば、

morin siralji（高い、大きいクリニンジン）≑ qonin siralji（低い、小さいクリニンジン）

morin yonuy（高い 大きい）≑ qonin yonuy（低い 小さい）

temegen qarayana（大きい杏の木）≑ imayan qarayana（小さい杏の木）

üker puu（大きい銃）≑ yar puu（小さい銃）

uquna isige（一歳の大きい山羊）≑ kenje isige（一歳の小さい山羊）

üker büriye（大きいラッパ）≑ imayan büriye（小さいラッパ）

üker čilayu（大きい石）≑ öndegen čilayu（小さい石）

üker čoočali（大きいしぎ）≑ qonin čoočali（小さいしぎ）

üker qariyačai（大きいツバメ）≑ qonin qariyačai（小さいツバメ）

injayan buruyan（小雨）≑ ajiryan buruyan（大雨）

モンゴル語の反義語の中では、モンゴル人の社会及び生活に関する語もある。これは、モンゴル語の反義語のもう一つの重要な民族特徴である。言語は文化の担体である。これは、言語の語彙を通しその民族の文化、歴史、生活についてある程度に知る可能性があるということが反映されている。実際、これは言語の重要な役割の一つである。「モンゴル人の特別な生活の環境、心理、思惟に関する反義語は様々であり、それらの反義語を研究すべきである。例えば、jöb tala（右手の側、馬などの左側、乗り側）≑ buruyu tala（左手の側、馬などの右側、乗れない側）、nara jöb（時計回り）≑ nara buruyu（反時計回り）、degürekü（馬乗っている人は他人を前に乗せる）≑ sondalqu（馬乗っている人の後

ろに人を乗れる)、qanan ger (家) ≑ qadan ger (葬させる所)、totuɣu (ドアの上側) ≑ bosuɣa (ドアの下側), ere nousu (雄カシミヤ) ≑ eme nousu (雌カシミヤ)、erkei (親指) ≑ sigeji (小指) などである」[48]。

「語の意味の民族的特徴は社会、思惟、言語によって決まられる」[49]。反義語の民族的特徴の研究は、様々な分野の研究と関係がある非常に複雑な事項である。その特徴を分析することは、母国語の語彙の特徴及びシステムの研究に大きく寄与するであろう。

[注]

1)Boɣču 2003 p.67

2)王立廷 1986 p.62

3)李丽君 1989 p.9

4)许威汉 2002 p.452

5)傅朝阳 1980 p.46

6)Sečen Delgerma 2000

7) Lobsangwangdan 1961 p.507

8) 马学良等 1997 p.178

9) 陈满华 1994 p.35

10) Norjin-nar 1997 p.4

11) Rinčin 1962 p.18

12)张庆云 1996 p.5

13) 杨晓安 1987 p.80

14) 叶蜚声 2000 p.142

15) 甘为生 1984 p.25

16) Öbür mongɣul-un yeke surɣaɣuli-yin mongɣul kele bičig sudulqu ɣajar 2005 p.355

17)čenggeltai 1999 p.131

18) Öbür mongɣul-un yeke surɣaɣuli-yin mongɣul kele bičig sudulqu ɣajar 2005p.353

19) Badmadorji 1997 p. 136

20) Öbür mongɣul-un yeke surɣaɣuli-yin mongɣul kele bičig sudulqu ɣajar 2005 p.814

21)Badmadorji 1997 p.63

22) Öbür mongɣul-un yeke surɣaɣuli-yin mongɣul kele bičig sudulqu ɣajar 2005p.815

23) Badmadorji 1997 p.65

24) Batuiregedüi 2008

25) 郭定泰 1989 p.48-51

26) Osur 1985 p.231

27) 谭达人 1989 p.29

28) 兰玉英 1998 p.16

29) Batuiregedüi 2008 p.3

30) Tulɣaɣuri 1993 p.38

31) 于根元等 1981 p.27

32) 黄晓苑 2000 p.60

33) 滝浦真人 2005 p.2

34) 沖森卓也他 2006 p.90

35) 人民教育出版社编写组 1992 p.157

36) Öbür mongɣul-un yeke surɣaɣuli-yin mongɣul kele bičig sudulqu ɣajar 1999 p.308

37) Rinčin 1962 p.36

38) 马清华 1997 p.129

39) 森岡健二 1987 pp.172-173

40) 倪宝元 1957 p.43

41) 顾明华 1985 p.36

42) 谢文庆 1983 p.141

43) 石安石 1998 p.67

44) 张晰 1990 p.79

45) 张志毅等 2001 p.202

46) 松井栄一 2001 pp.461-462

47) Sengge 1997 p.43

48) Badmadorji 1997 p.113

49) 张志毅等 2001 p.189

第四章　モンゴル語における反義語の分類

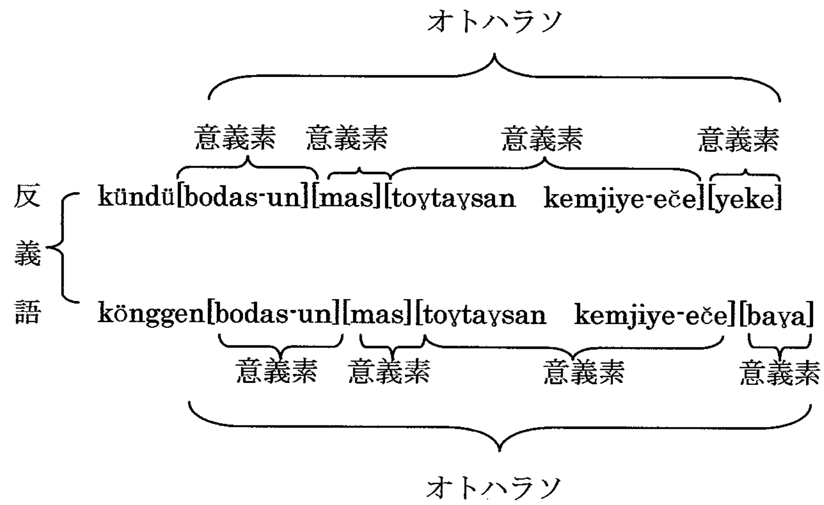
モンゴル語における反義語の分類は、学者達に重要され、主に概念の角度から分類して、分析してきた。例えば、人間の動作についての反義語（ükükü ＜死ぬ＞ ≑ törükü＜生まれる＞、itegel<信用> ≑ sejiglel＜疑い＞、 nökür＜友＞ ≑ dayisun＜敵＞）、自然のことについての反義語（qalaɣun＜暑い＞ ≑ küyiten＜寒い＞ 、čečeglekü＜咲く＞ ≑ julɣaraqu＜＞、ebülsikü＜冬になる＞ ≑ junsiqu＜夏になる＞）、時間についての反義語（örlüge＜朝＞ ≑ üdesi＜夜＞ 、ebül＜冬＞ ≑ jun＜夏＞、edür＜昼＞ ≑ söni＜夜＞）、位置についての反義語（degere＜上＞≑ doura＜下＞, dotuna＜中＞ ≑ ɣadana＜外＞ ende＜こっち＞ ≑ tende＜そっち＞）、特徴についての反義語（sayin＜よい＞ ≑ maɣu＜悪い＞, qataɣu＜硬い＞ ≑ jögelen＜柔らかい＞, kündü＜重い＞≑ köngken＜軽い＞）、方向についての反義語（jegün＜東＞ ≑ baraɣun＜西＞、emüne＜南＞ ≑ qoyina＜北＞）などである。

分類の研究は、モンゴル語における反義語の重要な研究対象であり、分類の種類が細かければ細かいほど、よりよい深くなることができるものと考える。「合理的な、科学的な分類は反義語の特徴や役割について理解するに役立を果たす[1)]。本論では、モンゴル語の反義語の分類についてオトハラソ（udqalasu）による分類、品詞による分類、移動的意味による分類というような三種類にわけて分析する。

4.1. オトハラソによる分類

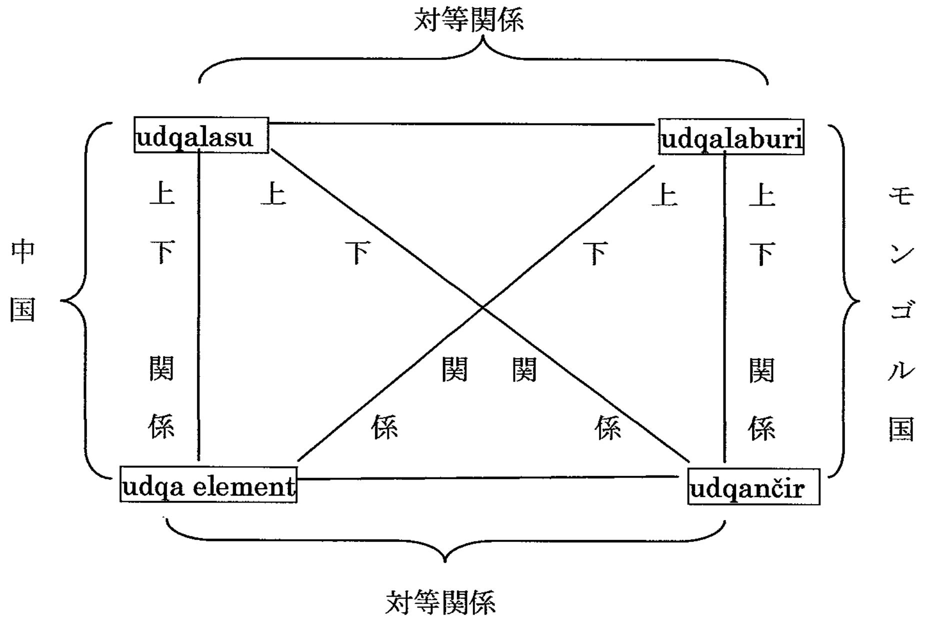
4.1.1. オトハラソについて

モンゴル語におけるオトハラソとは何を指しているか。新しい用語のため、広く知られておらずなじみのない用語である。この用語はまず『意味論』という著作に現れた。この著作の説明によると、オトハラソとは、語の個々の意味を指すと説明している[2)]。つまり、一つの意味がある語は一つのオトハラソから構成され語であり、二つの意味がある語は二つのオトハラソから構成される語であるということである。総じて、いくつの意味がある語はいくつのオトカラソから構成された語であるということである。オトカラソと意義素は、オトカラソは意義素から構成され、意義素はオトカラソを構成する要素であるという関係にある。つまり、オトカラソ は意義素より上の意味単位であり、 意義素は オトハラソより下の意味単位である。kündü（重たい）— könggen（軽い）という反義語の実例を挙げて説明しよう。



上記の分析によると、kündü— könggen という反義語はそれぞれ四つの意義素より構成され、その四つの意義素は kündü — könggen という反義語を形成しているということである。当然のことであるが、意義素は同一の意義素と異同意義素の二ジャンルにわけられる。意義素とオトハラソの数のことについて、オトハラソが少なくとも二つの意義素より構成される。

説明することは、同じ概念の用語であるが、中国における内モンゴルとモンゴル国ではまったく異なるということである。内モンゴルでは、udqa element と udqalasu という用語を用いるのに対して、モンゴル国では、 udqancir と udqalaburi という用語を用いている。換言すれば、udqalasu と udqalaburi という二つの用語が対等関係であり、 udqa element と udqančir という二つの用語は対等関係である。また、udqalasu は udqa element と udqančir という二つの用語と上下関係であり、 udqalaburi は udqančir と udqa element という二つの用語と上下関係である。同じ言語の間で、同じ概念を異なる用語で示すことは、用語の混乱を生じさせ、研究の発展に悪い影響を与える恐れがあるので、統一する方が望ましい。わかりやすくするため上に述の用語について、図式化すれば以下のようである。



モンゴル語では、一つのオトハラソを持つ語よりも、複数のオトハラソを持つ語が多いのである。「モンゴル語の多数の語は複数の意味を持つ」とモンゴル語の多義語の研究者である何連喜は述べている[3)]。モンゴル語における反義語の分類をオトハラソに基つき、以下のように大きく二項目に分けて様々に分析する。また、体系的に分析するために更に小さい項目に分けて分析する。

4.1.2. 一つのオトハラソにおける反義語

モンゴル語の一部の反義語は、一つのオトハラソで対立して反義語になっている。しかし、このような反義語は一つのオトハラソの語であるとは限らない。詳しく説明するためにこの種類の反義語を更に二つの種類に分けてそれぞれ分析する。

4.1.2. 1. 一つのオトハラソにおける一つの反義語

これは、一つのオトハラソにおいて一つの反義語が対応するものである。従来のモンゴル語における反義語の研究では、主にこのタイプの反義語が研究されてきた。以下は実例である。

反義語	オトハラソ
itegel（信頼）⇔ sejiglel（疑い）	nayidaburitai esekü（信頼度）
ɣal（火）⇔ usu（水）	qarsilduqu qaričaɣa（対立する関係）

čelmeg（晴れ）≑ bürküg（曇り）　　ayur amisqul-un qubiral（天気の変化）

ebül（冬）≑ jun（夏）　　ularil（季節）

上述のことを図式化すれば（AとBは反義語、a、a1、a2、a3…はオトハラソを示す）

反義語　　オトハラソ

A ≑ B — a

4.1.2.2. 一つのオトハラソにおける複数の反義語

ここで、一つのオトハラソにおいて、複数の反義語が対応する例を挙げる。この複数の反義語は相互に類義語になる。「ある語は他の語と反義語になると同時に、その語の類義語とも反義語になる」[4)]。これは、モンゴル語における反義語の重要な、同時に複雑な特徴である。反義語と類義語は意味論の異なる研究対象ではあるが、相互に密接な関係を持っている。例えば、

doruyitaqu（A1）≑ { manduqu（B1）, kögjikü（B2）, degjirekü（B3）, ögedelekü（B4） } — neyigem aqui-yin kögjilte ögsüjü uruyudaqu(a)

doruyitaqu という単語は manduqu、kögjikü、degjirekü、ögedelekü という四つの単語と反義語になり、manduqu、kögjikü、degjirekü、ögedelekü という四つの単語は、相互に類義語になるということである。

A1衰弱する・　B1、B2、B3、B4繁栄する・a栄枯盛衰

mayuqai（A1）≑ { sayiqan（B1）, üjesküleng（B2）, yoyu（B3）, yuwa（B4）, kegenčir（B5） } — bodas-un dürsü bayidal-un toyuydaqu kemjiye（a）

maγuqai という単語は sayiqan、 üjesküleng、 γoyu、 γuwa、 kegenčir という五つの単語と反義語になり、sayiqan、 üjesgüleng 、γoyu 、γuwa、 kegenčir という五語は、相互に類義語になるということである。

A 1 醜い・B1、B2、B3、B4、B5 美しい・a 外観の美しさ

上記のことを図式化すれば以下なようである。

A1 ≒ { B1, B2, B3, ⋮ } — a1

4.1.3. 複数のオトハラソにおける反義語

これは、二つあるいは二つ以上のオトハラソにおいて対立しながら反義語になるということである。これは反義語が形成される方法の一つである。「少なからぬ語は二つあるいは二つの以上の語と反義語になり、それらの反義語は反義語群を生じさせる」[5]。この反義語群を生じさせている直接の原因はその語が複数の対立関係のオトハラソを持つからである。このタイプの反義語をさらに二種類に分けて分析する。

4.1.3.1. 一つの語の複数オトハラソにおける反義語

一つの語はその異なるオトハラソによって異なる反義語を形成するということである。しかし、この場合の異なる反義語は相互に類義語にならないのである。例えば、

negegekü (A1) ≒
- qaγaqu (B1) — egüde čongqu jerge-yi ongγuyilγaqu (a1)
- tarqaqu (B2) —qural čuγlaγan-u ekilekü (a2)
- aniqu (B3) — anisqa-ban ese qamkiqu (a3)
- onisulaqu (B4) —onisu čooji-yi aldaraγaqu (a4)

A1 開ける・B1 閉める、B2 終わる、B3 閉じる、B4 鍵をする・a1 扉や窓を開ける、a2 会議、集会を行う、a3 目を開ける、a4 鍵を開ける

jobaqu (B1) — amidural-un qabu čenggel –i edlekü (a1)

jirγaqu (A1) ≑

manduqu (B2) — naran-u unaju singgekü (a2)

A1 幸せになる・B1 苦しむ、B2 出る・a1 生活の快楽を享受する、a2 太陽の出る

上述したことを図式化すれば以下のようになる。

A1≑ { B1 — a1 / B2 — a2 / B3 — a3 / ⋮ ⋮ } オトハラソ

4.1.3.2. 反義語の複数のオトハラソにおける反義語

モンゴル語の反義語の中に、同じ反義語が異なるオトハラソによって様々な意味の反義語を生じさせるという現象が存在している。これは、モンゴル語の反義語の従来研究されていない特有な特徴であり、同時にモンゴル語の意味論の豊かさを反映していることである。このような反義語の特徴は、形式は変化していないが、内容が変化しているという点である。 例えば、

qataγu (A) ≑ jögelen (B)

qataγu(jögelen) modu (C1) — bodas-un qataγuča-yin kemjiye (a1)

qataγu (jögelen) sedkil(C2)— sedkil sanaγa-yin eneringgüi esekü (a2)

qataγu(jögelen) ariki(C3)— ariki-yin gradüs-ün kemjiye(a3)

qataγu(jögelen) üge(C4)— üge yariya-yin obur sinji(a4)

A 硬い、B 柔らかい・C1 硬い（柔らかい）木、C2 冷たい（温かい）心、C3 強い（弱い）酒、C4 厳しい言葉、優しい言葉・ a1 物体の硬さ、a2 心の優しさ、a3 酒の強さ、a4 相手に対する態度

yeke (A) ≒ baɣa (B)

- nutuɣ debisker yeke (baɣa) (C1) — ejelekü orun jai-yin kemjiye (a1)
- küčü yeke (baɣa) (C２) — bira čidal-un kemjiye (a2)
- yeke(baɣa) kereg (C３) — kereg učir-un nočitai esekü (a3)
- yeke (baɣa) salki (C4) — salkilaqu kemjiye (a4)
- yeke(baɣa) dayin (C５) – küriye kebčiye (a５)

A 大きい、B 小さい・C1 面積が広い（狭い）、C2 力は強い（弱い）、C３深刻な事件と深刻ではない事件C４大（小）風、C５大（小）戦争・a1 空間の広さ、a2 力の強さ、a3 事件の深刻さ、a4 風の強さ、a５規模の大きさ

上述のことを図で示せば以下である。

A ≒ B

- C1 — a1
- C2 — a2
- C3 — a3
- ⋮ ⋮

} オトハラソ

4.1.4. 特筆すべきことは、このような種類の反義語は、全てのオトハラソで対立して反義語になるとは限らないということである。具体的に言えば、büdügün と narin という反義語に関して、büdügün という語は bayan činegelig（豊富） ＜büdügün amidural（豊かな生活）＞ と tomu bujaɣai（大きな、巨大な）＜büdügün asar（大きなビル）＞という二つのオトハラソで、narin という単語と反義語になることはできない。逆に narin という単語は、qaramči（けちな）＜ amidural-du narin （生活にけち）＞と todurqai（明確な）＜narin tayiburilaqu（詳しく説明する）＞という二つのオトハラソで、büdügün という単語と反義語になることはできない。čingɣa — sula という反義語の čingɣa という単語は、

ed mönggü-dü masi γamtai（金銭などを非常に倹約する）＜γar čingγa（倹約な）＞とküčütei（力強い）＜čingγa adququ（強く握る）＞という二つのオトハラソで、sula という単語と反義語になることができない。逆に sula という単語は、nidün qaraγa maγu（目が悪い）＜sula qaraγa（近視）＞と selegüü jab（暇）＜sula čaγ（暇な時）＞というオトハラソで、čingγa という単語と反義語になることができない。また、qataγu—jögelen という反義語の qataγu という単語は sonustaqu kemjiye maγu（あまり聞こえない）＜čiki qataγu（耳が悪い）＞というオトハラソで、jögelen という単語と反義語になることはできない。逆に jögelen という単語は nam dölügen（穏やか、弱い）＜jögelen γal(弱い火)＞というオトハラソで qataγu という単語と反義語になることができない。以上の分析を通して明らかになることは、モンゴル語の反義語のオトハラソは選択性があるということである。この選択性とは、反義語を形成するオトハラソはは選ばれ、反義語を形成できないオトハラソは廃棄されることである。反義語は必ずしも一つのオトハラソに対立しながら反義語になっているとは限らない。逆に、全てのオトハラソの対立によって反義語になっているとは限らない。なぜならば、反義語にオトハラソの選択性があるからである。北原保雄は「ある語の反対語は、一つとは限らない。基準が変わると、いくつも存在することになる」と述べている[6]。ここで述べている基準とはオトハラソを指している。

上記したモンゴル語における反義語のオトハラソによる分類をまとめると次のようになる。

- 反義語
  - 一つのオトハラソにおける反義語
    - 一つのオトハラソにおける一つの反義語
    - 一つのオトハラソにおける複数の反義語
  - 複数のオトハラソにおける反義語
    - 一つの語の複数のオトハラソにおける反義語
    - 反義語の複数のオトハラソにおける反義語

4.2. 品詞による分類

モンゴル語の品詞の研究は形態論の基本的な研究課題であると同時に複雑な研究課題である。どうのように分類するかということについて意見が合意していないのである。モンゴル語の品詞分類について『ハルハ方言の派生接尾辞の研究』[7]と『現代モンゴル語の形態論』[8]という二つの著作では、興味深い分け方を提示した。つまり、名詞類、動詞類と不変化詞類の三種類である。名詞類には名詞、形容詞、数詞、代名詞、時間空間詞などの品詞を含めており、不変化詞類の中には連接詞、副詞、助詞、感嘆詞、後置詞、待遇詞などの品詞が含まれている。動詞類には動詞しかないのである。その中で、主に名詞類と動詞類における反義語について研究され、不変化詞類における反義語は研究されなかった。これは、モンゴル語の反義語研究のもう一つの欠点である。品詞における反義語の数について、モンゴル語の名詞類と動詞類における反義語は極めて多数であり、全体の９5%を占めており、不変化詞類における反義語は非常に少数であり、全体の 5%を占めている。反義語における研究対象として、不変化詞類における反義語も研究しなければならない。それでは、形態論の研究対象である品詞研究は、意味論の研究対象である反義語とどのような関係にあるか。モンゴル語の品詞の分類は、語の意味、文法の特徴、文に使用されることなど三原則によって分けられてきた。つまり、この三原則の一つは意味論を基に分類したことである。実際、品詞の分類だけではなく、全ての形態論の研究対象は意味論から離れることができない。引き続き、名詞類詞、動詞類詞及び不変化類詞についてそれぞれ説明する。

4.2.1. 名詞類の反義語

モンゴル語の名詞類における反義語に名詞反義語、形容詞反義語、空間時間詞反義語、代名詞反義語が含まれている。

4.2.1.1. 名詞反義語

モンゴル語における名詞反義語は重要な研究対象であるが、これまでモンゴル語の名詞反義語について分析されていないのである。モンゴル語の名詞反義語の数量が合計９３個あり、全体の１７％を占めており、品詞の中で、数量は三番目である。モンゴル語における名詞反義語の特徴は以下のようである。

4. 2. 1. 1. 1. 抽象的反義語と具体的反義語について

モンゴル語の名詞反義語の中では、抽象的反義語は多数であり、合計５９個あり、名詞

反義語の６３％を占めている。例えば、itegel（信用）≑ sejiglel(疑い)、 qour（害）≑ tusa(益)、sayisiyal（褒め）≑ mayusiyal(悪口)、esergüčel（反抗）≑ darulal(圧迫)、jirγal（幸せ）≑ jobal(苦しみ)などである。具体的な反義語は３４個あり、名詞反義語の３７％を占めている。例えば、köl（足）≑ γar（手)、nökür（友）≑ dayisun（敵)、tengri（天）≑ γajar（地)、γabiyatan（功労者）≑ ösiyeten（報復者）などである。

4.2.1.1.2. **派生反義語について**

モンゴル語の名詞反義語の中では、派生反義語は７０個あり、名詞反義語の７５％を占めている。例えば、bülkümdel（団結）≑ qaγačal（分離)、nemelte（付加）≑ qasulta（減少)、γabiyatan（功労者）≑ γalatan（犯人)、orulγa（収入）≑ γarulγa（支出)、eregtei（男性）≑ emegtei（女性）などである。語根反義語は１７個あり、名詞反義語の１８％を占めている。例えば、ere （男）≑ eme（女)、tusa（益）≑ qour（害)、nigül（罪）≑ buyan（善）などである。「語根—派生」反義語はもっとも少なく、６個あり、名詞反義語の７％を占めている。例えば、qayira <語根>（愛）≑ qorusul<派生：qour+ s+l>（憎み)、dayin <語根>（戦争）≑ nayiramdal<派生:nayir + mda+l>（平和)、nökür<語根>（友）≑ dayisun <派生:dayin + sun>（敵)、onul<語根>（理論）≑ üyiledülge<派生:üyile + dü + lge>（実践）などである。

4.2.1.1.1.3. **表現する意味について**

人についての反義語：

γabiyatan(功労者）≑ γalatan（犯人)、nökür（友）≑ dayisun（敵)、baraγuntan（右翼）≑ jegünten（左翼)

性別についての反義語：

ere（男）≑ eme（女）、eregčin（雄）≑emegčin（雌)、eregtei（男性）≑ emegtei（女性)

精神的な物についての反義語：

qayira（愛）≑qorusul（憎み)、itegel（信用）≑ sejiglel（疑い)、küsel（希望）≑ küserdel（失望)

結果についての反義語：

maγtaγal（褒め）≑ jimelel（叱り)、sangnal（賞与）≑ sidgel（処罰)、kökigülül（奨励）≑ torγuγali（処分)

生活についての反義語：

bayajil（豊富）≑ yadaɣural（貧乏）、jirɣal（幸せ）≑ jobal（苦しみ）、 jirɣalang （幸福） ≑ jobalang（苦しみ）

政治についての反義語：

aradčilal（民主） ≑ ejerkeglel（専制），jegunten（左翼） ≑ baraguntan（右翼），darulaɣči（圧迫者）≑ darulaɣdaɣči（被圧迫者）

戦争についての反義語：

dayin（戦争） ≑ nayiramdal（平和），büselelte（包囲） ≑ sibtululta（突撃），daɣarilta （突撃） ≑ qoriɣlalta（防御）

用語についての反義語：

onul（理論）≑ üyiledülge（実践），aɣulɣa（内容） ≑ kelberi（形式），arɣa（陽） ≑ bilig（陰）

収入についての反義語：

orulɣa （収入）≑ ɣarulɣa（支出），olja（収獲） ≑ ɣaruja（損害），aldaburi（損） ≑ qunjiburi（利）

他の反義語：eki（始め）≑ adaɣ（終わり），ɣal（火） ≑ usu（水），tengri（天） ≑ ɣajar （地）。

4.2.1.2. 形容詞反義語

モンゴル語の形容詞反義語は **139** 個あり、動詞反義語の数より少ないが、名詞反義語の数より多いのである。形容詞は物事の区別特徴を顕著に表せるので、例として反義語についての説明した研究論文や著作の中に挙げる頻度も多いのである。特に、**sayin** （良い）≑ **maɣu**（悪い）、 **qara**（黒い） ≑ **čaɣan**（白い）、 **yeke**（大きい） ≑ **baɣa**（小さい）、**sine**（新しい） ≑ **qaɣučin**（古い）などの形容詞反義語を例として挙げて反義語を分析している。以下、モンゴル語の形容詞反義語の特徴について分析しよう。

4.1.2.1.1. 形容詞反義語の数量について

モンゴル語における反義語の研究の中で、品詞の角度から研究され、解説されたものは多数ある。特に形容詞反義語の研究については数量が最も多くと強調し、語例も他の品詞の語例より多く出されていることは複数見られる。具体的に言えば、次のようである。

研究成果	著者	形容詞の例	動詞の例	名詞の例
Mongɣul kelen-ü üge-yin sang-un sudulul	Temürčerin	15	11	2
Orčin čaɣ-un Mongɣul kele	Lubsangwangdan	7	5	0
Mongɣul keken-ü esergü udqa-tai üge-yinončaliɣ sinji ba ilerekü bayidal	Engkemendü	12	5	4
Mongɣul kelen-ü esergü udqa büküi üges- ün tuqai	Rinčin	12	6	0
Mongɣul kelen-ü esergü udqa-tai üge-yin tuqai	Bao zhi hong	40	16	13
Mongɣul kelen-ü udqa esergü üge-yinončaliɣ-i sinjikü ni	Tulɣaɣuri	11	6	5

この図表を見ると、モンゴル語における形容詞反義語は、「反義語」という用語に最も深い関係にあり、まさに、反義語の中核を成しているのと言える。また、モンゴル語の形容詞反義語は比較的多いということをモンゴル語の学者達も主張している。「モンゴル語において形容詞の反義語は最も多い、次に動詞と名詞である」と述べている[9)]。「形容詞は対比概念を示しているから対応する反義語の数は最も多いのである。その次に動詞であり、三番目は名詞である」[10)]。さらに、形容詞反義語の多い理由を分析したものもある。「モンゴル語の形容詞の反義語は、他の品詞の語数より多い。なぜならば、全てのものは対義性

があり、しかもそのものを単語で示した形容詞はそれらの特徴を指したものとして、よく使われるからである」[11]。実際本当にそうだろうか。私はこの見方に賛成してはいない。なぜならば、モンゴル語における反義語の中で、数量が最も多いのは形容詞ではなく、動詞反義語だからである。このことを数字で証明しよう。『モンゴル語反義語辞典』（筆者の編集した提出予定、博士論文の辞典篇）では、動詞反義語は合わせて２４３出現し、全体の４５％を占めているが、形容詞反義語は１３９出現し、全体の２６％を占めており、二番目である。名詞反義語は９３出現し、全体の１７％を占めており、三番目である。つまり、モンゴル語の反義語の中では、形容詞反義語は最も多いとは言えない。モンゴル語の反義語の中で形容詞反義語が最も多いという結論は事実ではなく、動詞反義語が最も多いのは明白である。総じて、モンゴル語において、形容詞反義語が最も多いという従来の見解は誤っていると思う。しかし、全ての言語の中で、形容詞反義語は最も多いとは限らないのである。例えば、「中国語には、形容詞の反義語は一番多いし、次に動詞の反義語、名詞の反義語、副詞の反義語という順番である」[12]。「形容詞は事物の特徴、状態、性質などをはっきり表現し、そのため対応する反義語は最も多くて、他の品詞にも対応する反義語あるが形容詞ほど多くないのである」[13]。「品詞の角度から見ると、形容詞の反義語は最も多いのである」[14]。以下は、モンゴル語における動詞反義語、形容詞反義語、名詞反義語の数量について比較した表である。

反義語	動詞反義語	形容詞反義語	名詞反義語
数量	２４３	１３９	９３
比率	４５％	２６％	１７％

4.2.2.2. 相補反義語と両極反義語について

モンゴル語における形容詞反義語の中では、ünen（真実）— qudal（偽り）、jöb（正しい）— buruγu（間違い）、jingkini（本物の）—qaγurmaγ（偽物の）、ünenči（誠実な）—qudalči（嘘つき）など１５相補反義語あるのに対して、両極反義語は 124 ある。つまり、

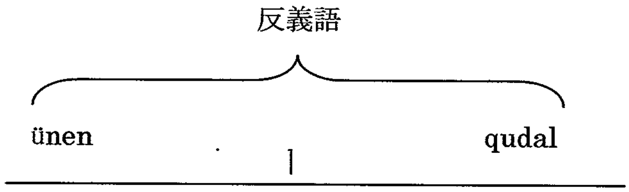
それぞれ比率は11%と89%である。表で示せば以下のようである。

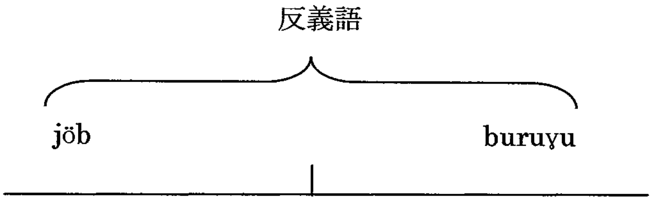
反義語	数量	比例
両極反義語	124	89%
相補反義語	15	11%

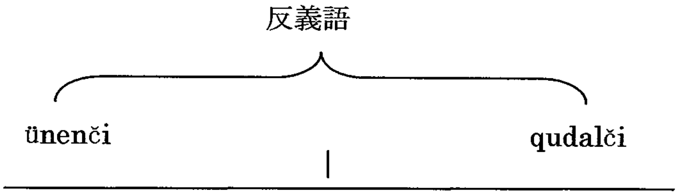
更に、両極反義語の過渡的意味の語は相互に対立して、両極反義語になる。これらの現象を図示し説明すれば、一層わかりやすくなる。

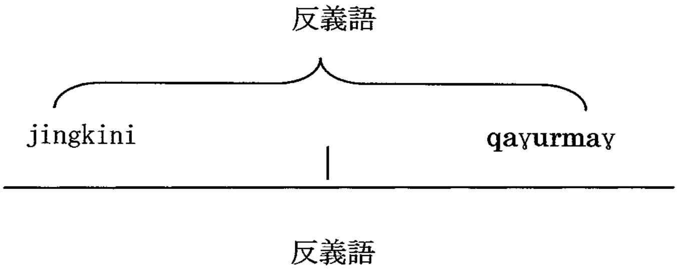
4.2.2.2.1. 相補反義語の分析図

相補反義語の特徴は、事物の特徴が二つの状態でしか分かれておらず、その間に三番目の概念は存在することができない。つまり、ある意味の中で、概念の領域を二分し、一方が肯定されれば、他方が否定される関係にあるということである。例えば、ünen（真実）— qudal（偽り）という反義語で、ünen ではなければ必ず qudal 、逆に qudal でなければ必ず ünen である。ünen と qudal の間に過渡的な意味はないのである。だからこそ、実際の会話で、ünen –čü bisi qudal-ču bisi(真実でもないし、偽りでもない)という話は存在していないであろう。ünen bisi bol labtai qudal,qudal bisi bol labtai ünen（真実でなければ確実に偽り、偽りでなければ確実に真実）である。以下は例である。

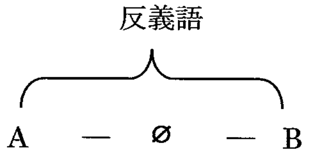






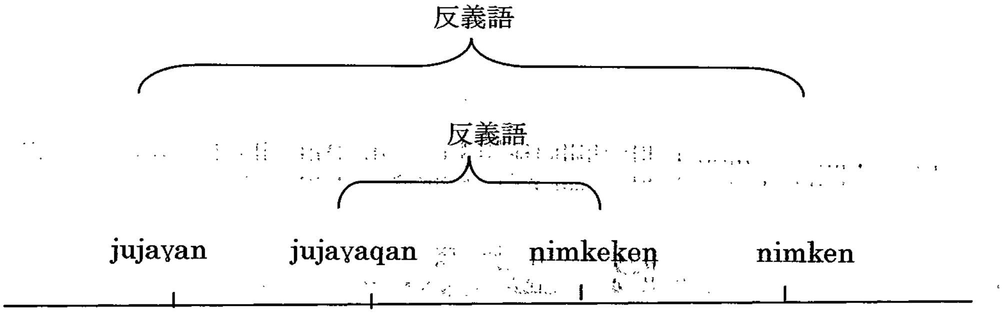


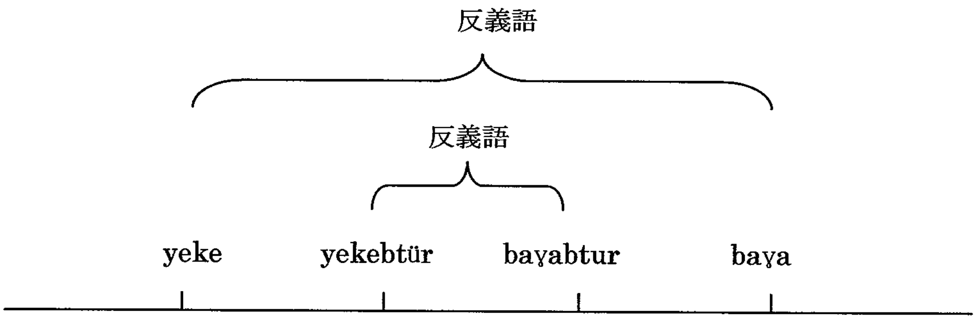
以下は相補反義語のパターンである。A と B は反義語を示す。



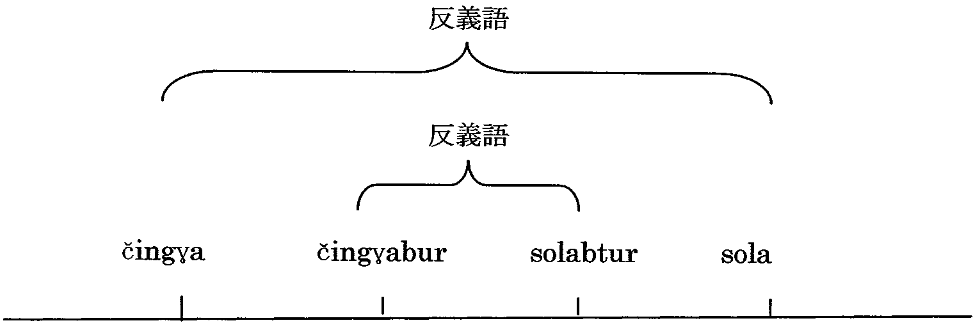
4.2.2.2.2.2. 両極反義語の分析図

モンゴル語において形容詞の両極反義語はが多数である。両極反義語の顕著な特徴は意味の連続性があるということである。例えば、A と B は形容詞反義語の意味の連続性の両極であり、その中間に a1,a2,a3 … — b1,b2,b3…という過渡的な意味の語が存在している。このことについて国廣哲弥はこう述べている。「一対の反義語によって示される両端の間に無限段階があり得る」[15]。そして意義深いことに、この過渡的な意味の語がさらに相互に反義語になるのである。言い換えれば、反義語の中に反義語があるということである。例えば、ene nom jujaɣan-ču bisi nimgen-čü bisi jujaɣabtur nom bayina.(この本は厚くもなく、薄くもなく、厚めの本である)と言うような例である。また、 qamtu surulɣatan-u dotura kiri bütümji ni sayin ba kiri bütümji ni maɣu ni čöken, kiri bütümji ni jüger ni olan.(クラスメートの中では、成績がよいのと悪いのが少なく、成績が普通なのが多い)などである。以下は語例である。

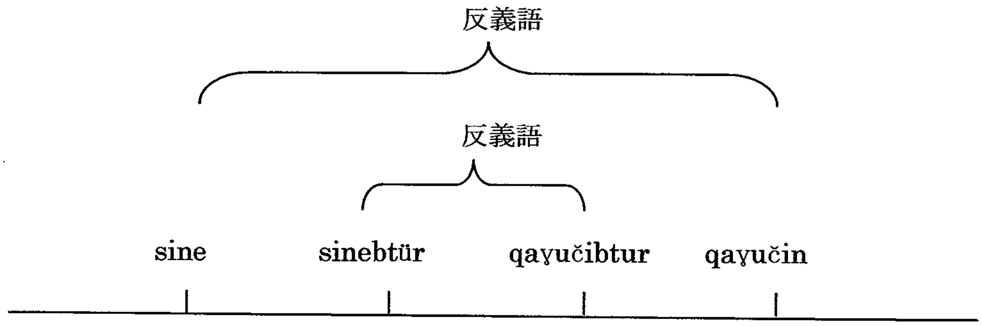




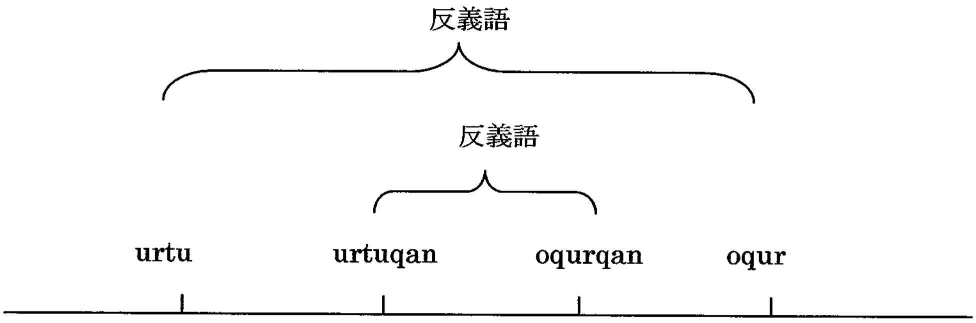
反義語
反義語
yeke
yekebtür
baγabtur
baγa



反義語
反義語
čingγa
čingγabur
solabtur
sola



反義語
反義語
sine
sinebtür
qaγučibtur
qaγučin



反義語
反義語
urtu
urtuqan
oqurqan
oqur

A と B は反義語、a と b は過渡的な語を示す。

反義語

反義語

A — a — b — B

以上の図を通して、モンゴル語における相補反義語と両極反義語の区別及び基本特徴を理解できるだろう。

4.2.2.3. 形容詞反義語の間での動詞反義語の形成について

モンゴル語の接尾辞は機能によって派生接尾辞（接尾辞）と屈折接尾辞（語尾）と二種類にわけられている。前者は新しい単語を形成させるのに対し、後者は新しい単語を形成せず、文法形式を変えるだけである。それで、形容詞反義語の後に、同じ派生接尾辞あるいは異なる派生接尾辞を接続すると動詞反義語が生じさせる場合が比較的多く見られる。つまり、形容詞語幹動詞の反義語が形成される。例えば、

形容詞反義語 { jögelen (柔らかい) + re- → jögelere- (柔らかくなる) / qatayu (硬い) + ra- → qatayura- (硬くなる) } 動詞反義語

形容詞反義語 { jujayan（厚い） + ra- → jujayara-（厚くなる） / nimken（薄い） + re- → nimkere-（薄くなる） } 動詞反義語

形容詞反義語 { yeke（大きい） + s- → yekes-（大きくなる） / baya（小さい） + s- → bayas-（小さくなる） } 動詞反義語

形容詞反義語 { börküg（曇り） + si- → börkügsi-（曇る） / čelmeg（晴れ） + si- → čelmegsi-（晴れる） } 動詞反義語

形容詞反義語 { büdügün(太い) + re- →büdügüre-(太くなる) / narin(細い) + s- →naris-(細くなる) } 動詞反義語

形容詞反義語 { olan(多い)+ sira- → olasira-(多くなる) / čöken(少ない)+ re- →čökere-(少なくなる) } 動詞反義語

形容詞反義語 { yadaγu（貧乏）＋ra- → yadaγura-（貧乏になる） / bayan （豊か）＋ ji- → bayaji-（裕福になる） } 動詞反義語

形容詞反義語 { qola（遠い） ＋da- → qolada-（遠くなる） / oyira（近い） ＋ tu- → oyiratu-（近くなる） } 動詞反義語

モンゴル語においての形容詞反義語の中で、２８％の反義語に接尾辞を接続し動詞反義語が形成することはできる。この形容詞語幹である動詞反義語は動詞反義語の１７％を占めている。この比率は少なくないのである。そのほか、「形容詞反義語 ＋ 接尾辞→形容詞反義語」と「形容詞反義語 ＋ 接尾辞 →名詞反義語」という構成の反義語の数は以下のようである。

構造の形式	数量	比率
形容詞反義語 →動詞反義語	４０	２８％
形容詞反義語 →形容詞反義語	５	４％
形容詞反義語 →名詞反義語	０	０

また、形容詞反義語とその形容詞語幹である動詞反義語の意味関係は「そういう特徴を持ち状態の変化を表す」ということである。これは、形容詞反義語とその形容詞語幹動詞反義語を解釈する意味公式である。そのため、形容詞語幹動詞反義語の意味を理解する場合、まずその形容詞反義語の意味を理解する必要があり、形容詞反義語の意味を理解するとその動詞反義語の意味を理解するはずできる。例えば、oladaqu（増える） — čökerekü（減る）という形容詞語幹動詞反義語に、形容詞語幹反義語である olan（多い） — čöken（少ない）の意味、つまり「toɣa kemjiye ni baɣa（数量が少ない）、toɣa kemjiye ni arbin（数量が多い）」という意味を理解すればその動詞反義語である olada-（多くなる）—čökere-（少なくなる）という反義語の意味を理解するはずである。

特筆することは、形容詞反義語の後に接尾辞を繋げても形容詞語幹の動詞反義語が必ずしも形成されないということである。例えば、qalaɣun（厚い）と küyiten（寒い）形容詞反義語の後ろに接尾辞である-ra^2-が接続する時形成される単語は互いに反義語になることができない。

反義語 { qalaɣun（暑い）+ ra- → qalaɣura-（熱が出る）
　　　　küyiten（寒い）+ re- → küyitere-（寒くなる） } 非反義語 ⇒

dulaɣara-（暖かくなる）≑ küyitere-（寒くなる）

このように、新しく形成された語である qalaɣura- と küyitere-は反義語になることができない。qalaɣura-という語は人の体温が普通より高くなり、病気になるという意味であるが、 köyitere-は気温が下がるという意味である。qalaɣura- という語に対応する反義語はないが、küyitere-という語には対応する反義語があり、その語は dulaɣara-(気温が上がる)である。また、ある形容詞反義語の後に動詞形成する接尾辞を繋げると、片方に繋げることはできても、他方に繋げることができない場合もある。例えば、ünen（真実）と qudal（偽り）という形容詞反義語の後ろに msi 接尾辞を繋げると ünemsikü という語形になるが、qudal という単語に連続することができない。つまり、

反義語 { ünen（真実）+ msi- → ünemsi-（信じる）≑ sejiglekü（疑う）
　　　　qudal（偽り）+ msi - → ø

上述したことに関することは、モンゴル語の形容詞反義語の中で、<動詞 + 接尾辞 →

形容詞反義語>という形式の反義語は合わせて１７あり、全体の１３％を占めている。

4.2.2.4. 表現する意味について

形容詞は物事、動作の特徴と性質についての意味を示す。モンゴル語の学者チンゲルタイは「モンゴル語の形容詞は主に物事の性質と特徴について示し、さらに、動作や状態の性質と特徴を示す」と述べている[16]。モンゴル語の意味論の学者バダマドルジはモンゴル語における形容詞反義語の表現する意味について「性質、距離、色彩、性状、大きさを表現する」と説明している[17]。先行学者の成果に基づき、もっと詳細にわけて分析しよう思っている。これはモンゴル語の形容詞反義語についての認識を深めることに役立つであろう。

性格について：

qalaɣumsuɣ(優しい) ≑ köyitemsüg（冷たい）、 abliɣaqi（欲張り） ≑ ögligeči（施し）、 ajilči（働き者） ≑ jalqaɣu（怠け者）

人間の能力について：

sergüleng（賢い） ≑ bidaɣu（愚か）、 mergen（頭がいい） ≑ mongqaɣ（頭がわるい）、 uran（器用な） ≑ oldui（不器用な）

外観について：

sayiqan（美しい） ≑ maɣuqai（醜い）、boruɣjiɣun（質素な） ≑ kekenčir（贅沢な）、üjesgüleng（かわいい） ≑ maɣuqai（醜い）

限度について：

yeke（大きい） ≑ baɣa（小さい）、 tomu（大きい） ≑ jijig（小さい）、 aburɣu（大きな） ≑ öčüken（小さいな）

数量について：

olan（多い）≑ čöken（少ない）、 čökengki（少数の） ≑ yekengki（多数の）、 elbeg（多い） ≑ čoqaɣ（少ない）

地形について：

ögede（上り坂になった） ≑ uruɣu（下り坂になった） qotuɣur（凹型になった） ≑ ɣuduɣur（凸型になった）

天気について：

qalaɣun（暑い） ≑ köiten（寒い）、dulaɣan(暖かい) ≑ serigün(涼しい)

物の性質について：

sine（新しい） ≑ qaγučin（古い）、 böke（壊れにくい） ≑ kebereg（壊れやすい）、

qaγurmaγ（偽りの） ≑ jingkini（本物の）

距離について：

qola（遠い） ≑ uira（近い）、 urtu（長い） ≑ oqur（短い）、 öndür（高い） ≑ nam（低い）

色彩について：

qara（黒い） ≑ čaγan(白い)、

光度について：

qarangγui（暗い） ≑ gegen(明るい)、

匂いについて：

angγiluma （いいにおい）≑ ömükei(臭い)

気候について：

čelmeg（晴れ） ≑ börküg（曇り）

4.2.2.5.表現する相対概念について

モンゴル語の形容詞反義語のもう一つの顕著の特徴は、比較を通じて存在しているということである。事物の特徴は比較によって認識される。そのことは形容詞反義語にはっきり反映されている。モンゴル語における形容詞反義語は、A（A ≑ B）語の存在が B 語の存在の前提となり、逆に B 語の存在が A 語の存在の前提となる。つまり互いに前提となって存在している。片方の語がなければもう一方の語は存在できないし、もう一方の語がなければ片方の語が存在できないということが言える。例えば、kündü（重い） — könggen（軽い）という反義語では、kündü という語は könggen という語、あるいは könggen という語は kündü という語と対比を通じて存在している。kündü という語はなければ könggen という語は存在できないし、その逆もまたしかりである。könggen がなければ kündü の重さを知るとができないし、逆に kündü がなければ köngken の重さを知ることはできない。必ず比較を通して、kündü と könggen の重さが表現される。つまり、両語は比較を通して共存し、いずれも欠くことができない。形容詞反義語は一つの事物の対立している二つの特徴を示している。

4.2.3. 時間空間名詞反義語

モンゴル語では時間と空間の名詞を合わせて空間時間名詞と名付けている。以下、時間名詞と空間名詞とわけてそれぞれ述べる。

4.2.3.1. 時間名詞

時間名詞とは、期間についての名詞である。例えば、

erte（早い）≒ orui（遅い）、örlüge（朝）≒ üdesi（晩）、ebül（冬）≒ jun（夏）、edür（昼）≒ söni（夜）

4.2.3.2. 空間名詞

空間名詞とは、位置や方向についての名詞である。そして、空間名詞もさらに位置名詞と方向名詞という二種類に分けられる。

4.2.3.2.1. 方向名詞

jegün（左）≒ barayun（右）、emüne （南）≒ qoyina（北）

örüne（東）≒ doruna（西）、emünetü（南方）≒ qoyitu（北方）、emünesi（南へ）≒ qoyisi（北へ）、emünegür（南方へ）≒ qoyiyur（北方へ）、jegünsi（東方へ）≒ barayunsi（西方へ）

4.2.3.2.2. 位置名詞

degere（上）≒ doura（下）、degegsi（上へ）≒ doyugsi（下へ）、degedü（上）≒ douradu（下）、degegür（上に）≒ douyur（下に）、degereki（上の）≒ douraki（下の）、yadana（外）≒ dotuna（中）、dotuysi（中へ）≒ yadaysi（外へ）、dotuyur（中に）≒ yadayur（外に）、nayana（こちら）≒ čayana（そちら）、nasi（ここに）≒ casi（そこに）、nayayur（ここに）≒ čayayur（そこに）、nayatai （この辺）≒ čayatai（その辺）、nayadaki（こちらに）≒ čiyadaki（そちらに）、inadu（こちら）≒ činadu（そちら）、inaysi（こちらへ）≒ činaysi（そちらへ）

『モンゴル語の形態論』という著作では、モンゴル語の時間空間の名詞は合計１１０ほどあると述べている[18)]。以上述べた例によると、時間空間の名詞の中で、半分以上の語は反義語になることができる。これは、時間空間の名詞が反義語になる比率は非常に高いということを明らかに示している。つまり、二つの語の中で一つの語に対応する反義語があるということである。また、時間空間の名詞反義語の構造に注意すれば、語尾は「na^2、ra^2、da^2、tai^2、tu^4、yur^4、ysi^2、si、ki、$daki^2$」という形式である。モンゴル語の学者チンゲルタイは、「モンゴル語の期間位置の名詞は<na^2、ra^2、da^2、tai^2、tu^4、yur^4、ysi

^{2}、si、ki、daki^{2}＞という語尾で表現する」と述べている[19]。そのため、その語尾に基づき、モンゴル語における時間空間の名詞における反義語を以下のように分けて分析する。

語尾がna^{2}である反義語:

nayana(ここ) ≑ čayana(そこ)、emüne(南) ≑ qoyina(北)

語尾がra^{2}である反義語:

degere (上)≑ doura(下)

語尾がsiである反義語:

jegünsi(東へ)≑ barayunsi(西へ)、 nasi(こちら)≑ časi(そちら)

語尾がtai^{2}である反義語:

barayuntai(西)≑ jegüntei(東)、 nayatai(ここ) ≑ čayatai(そこ)

語尾がyur^{4}である反義語:

degegür(上に)≑ douyur(下に)、yadayur(外) ≑ dotuyur(中)

語尾がysi^{2}である反義語:

degegsi(上) ≑ doyuysi(下)、inaysi(こちらへ) ≑ činaysi(そちらへ)

語尾がkiである反義語:

degereki(上) ≑ douraki(下)、 emüneki(南) ≑ qoyinaki(北)

語尾がdu^{4}である反義語:

yadayadu(外) ≑ dotuyadu(中)、emünedü(南) ≑ qoyidu(北)

語尾がda^{2}である反義語:

urida(前) ≑ qoyisida(あと)

語尾がdaki^{2}である反義語:

jegündeki(東) ≑ barayundaki(西)、nayadaki(こちらに) ≑ čayadaki(そちらに)

もう一つの特徴は、時間空間の名詞における反義語の語根は非独立語根(beye-ben dayaqu ügei ijayur)である。モンゴル語の語根は独立語根(beye-ben dayaqu ijayur)と非独立語根(beye-ben dayaqu ügei ijayur)という二つの種類にわけられている。独立語根とはその語根は独立語として使用される語根であり、非独立語根とはその語根は独立語として使用されない語根である。例えば、

degere ←dege +re、 emüne ← emü + ne 、 yadayur ← yada + yur

doura ← doyu + ra 、qoyina ← qoyi +na 、 dotuyur ← dotu + yur

「dege - doyu、qoyi emü、 yada dotu」は非独立語根である。

4.2.4. 代名詞反義語

代名詞とは事物、期間、位置、数量、人称などを代替して示す語である。代名詞の中で、beye-yin tölugen-u nere（人称代名詞）の ene（これ） ≑ tere（それ）、ede （これら） ≑ tede（それら）、 öber-ün tölügen-ü nere（再帰代名詞）の öber（自分） ≑ busud（他人）、jiγaqu tölügen-ü nere（指示代名詞）の egün（これ） ≑ tegün（それ） eyimü （この）≑ teyimü （その）、edüi（こんな） ≑ tedüi（そんな）、edüyičinen（これほど） ≑ tedüyičinen（それほど）、 ende（こちら） ≑ tende（そちら）などは反義語になることができる。その他、代名詞反義語を大きくて物事を表す反義語と位置を表す反義語という二種類にわけて分析してもいい。前者は、例えば、ene（これ） ≑ tere（それ）、edeger（これら） ≑ tedeger（それら） 、egün（これ） ≑ tegün（それ）であり、 後者は、例えば、ende（ここ） ≑ tende（そこ）、 endeki（ここの）≑ tendeki（そこの） 、enegür（この辺） ≑ tenegür（その辺）、 esi （こちらへ）≑ tesi（そちらへ）などである。代名詞の反義語をしっかり観察すれば興味深い特徴を発見できる。つまり、「e」と「te」という語頭の反義語は多いのである。「＜e＞語頭の語は近いものや所を指すのに対して、＜te＞語頭の語は遠いものや所を指す」[20]。

4.4.2. 動詞類の反義語

動詞類反義語には、動詞反義語のみ含まれている。

モンゴル語における動詞反義語の研究について、研究者は主にその概念の視点からモンゴル語の動詞反義語を分類してきた。具体的に言えば、『現代モンゴル語の意味論基礎』という著作では、モンゴル語の動詞反義語については、反方向反義語（egekü esergü udqatu uge）という種類の反義語を提出して分析した。つまり、相互に逆の方向であり、対立すると同時に補足する関係の反義語である。例えば、ögkü （あげる）≑ abqu（もらう）、bosqu（立つ）≑ saγuqu（座る）、 asaγuqu（尋ねる） ≑ qariγulqu（答える）、 abariqu（昇る）≑ baγuqu（下りる）などである」と注釈した[21]。『現代モンゴル語の語彙論の基礎』という著作では、モンゴル語の動詞反義語について、動作についての反義語と動作の特徴についての反義語とにわけて分析した。例えば、yabuqu（行く） ≑ irekü（来る）、 tataqu（引く） ≑ tülkikü（押す）、 unaqu（転ぶ） ≑ bosqu（立つ）、untaqu（寝る） ≑ serikü（目を覚める）、 okilaqu（泣く） ≑iniyekü（笑う）、yadaraqu（疲れる） ≑ tengkerekü（元気になる）などである[22]。『モンゴル語の語彙論』という著作では、動詞反義語は主

に、色々な動作及び変化の意味を示すと説明している。例えば、uruqu（入る）≑ γarqu（出る）、sanaqu（思い出す）≑ martaqu（忘れる）、emüskü（着る）≑ tayilqu（脱ぐ）、degegsilekü（上がる）≑ doruγsilaqu（下がる）などである[23]。モンゴル語の品詞の中で、反義語の数量が最も多いのは動詞であり、反義語の４５％を占めている。モンゴル語における反義語の特徴は以下のようになる。

4.2.2.1 動詞反義語の数量について

モンゴル語の品詞の中で、動詞反義語がなぜ最も多いかと思われるだろう。これは、動詞反義語の中に、一つの語に複数の反義語が対応する場合が、比較的多いということと関係がある。モンゴル語の動詞反義語の中では、５１個の語に１４１個の反義語が対応しており、さらに一つの語に１０個の反義語が対応する場合もある。例えば、

ekilekü(A) { dayusqu(A1) / tegüskü(A2) / baraqu(A3) } 類義語　ebsekü(B) { dayiduqu(B1) / bayilduqu(B2) / tululduqu(B3) } 類義語

A — 始まる、A1,A2,A3 — 終わる、 B —和解する、B1,B2,B3 — 戦う

ükükü(C) { törükü(C1) / amiduraqu(C2) }　örgedkü(D) { narilqu(D1) / čomadqaqu(D2) }

C — 死ぬ、C1—生まれる、C2— 生きる、 D—広がる 、D1— 細くなる、D2 —減少する

olasiraqu(E) { čögerekü(E1) / qomsadqu (E2) / qasuγdaqu(E3) / baγadqu (E4) } 類義語　negegekü(F) { qaγaqu(F1) / aniqu(F2) / onisulaqu(F3) / tarqaqu(F4) / untaraγaqu(F5) }

E — 多くになる、E1,E2,E3, E4— 少なくなる、 F— 開ける、 F1— 閉める、F2 — 閉じる、F3— 鍵をする、F4— 終わり、F5—消す

bayarlaqu(G)	doruyitaqu(H)	
ayurlaqu(G1)	kögjikü(H1)	類義語
yuturaqu (G2)	čečeglekü(H2)	
bukiniduqu(G3)	manduqu(H3)	
yuniylaqu (G4)	badaraqu(H4)	
jobaqu (G5)	ögedelekü(H5)	
uyidqarlaqu(G6)	degjirekü(H6)	
	dabsiqu(H7)	
	sayijiraqu(H8)	
	čigiraγjiqu(H9)	
	küčürkegjikü(H10)	

G— 喜ぶ、G1一怒る、G2,G3,G4,G5,G6— H—衰退する、H1,H2,H3,H4,H5,H6,H7,H8,H9,H10— 繁栄する

4.2.2.2 自動詞反義語の数について

モンゴル語の動詞は、目的語が要るかそうでないかに基づいて、自動詞と他動詞の二種類にわけられる。目的語が要る語が他動詞であるのに対して、前に目的語が要らない語が自動詞である。「モンゴル語の自動詞と他動詞について、主に目的語が要るかどうかによって区別している」[24]。モンゴル語の動詞反義語の中では、自動詞反義語は合計１７０個あり、全体の70%を占めている。例えば、ködelkü(動く) ≑ joγsuqu (止まる)、küyiterekü(冷える) ≑ dulaγaraqu (暖める),qataγuraqu(硬くなる) ≑ jögelerekü(柔らかくなる)、kökerekü(青ばむ) ≑ siralaqu(黄色くなる)、norqu(濡れる)≑ qataqu(干す)、nökürlekü(友になる) ≑ dayisungnaqu(対立する)などである。他動詞反義語は合計で７２個であり、全体の２９％を占めている。例えば、tasulqu(切る) ≑ jalγaqu(つなぐ)、tataqu(引く) ≑ tülkikü(押す)、γoluqu(嫌う) ≑toγuqu (相手にする)、qaγaqu(捨てる) ≑ tegükü(拾う)、negegekü(開ける) ≑ qaγaqu(閉める)、čiqulčilaqu(重要にする) ≑ umdaγaγilaqu(軽視にする)、čingγaqu(強める) ≑ suladγaqu(緩む)などである。自動詞 —他動詞形式の反義語は、三つあり、動詞反義語の1%を占めている。例えば、ilaqu(勝利する) ≑ ilaγdaqu(失敗する), deyilkü(負かす) ≑ deyilügdekü(負ける),küsekü(希望する) ≑ köserdekü(失望する)などである。

4.2.2.3. 動詞反義語の構造について

モンゴル語における動詞反義語の構成については、＜動詞　→　動詞＞形式の反義語、＜形容詞　→　動詞＞形式の反義語、＜名詞→　動詞＞形式の反義語は重要な位置を占めている。その中で、「動詞→　動詞⇒反義語」形式の反義語、つまり、動詞の後ろに接尾辞を連続することによって形成された新しい動詞反義語は最も多く、合計で１０５個あり、全体の４３％を占めている。例えば、abqu　(もらう)≑ögkü (あげる)，köbbükü (浮く)　≑ jibbükü (沈む)，qayilqu (溶ける)　≑　köldekü (凍る)，bariqu (持つ)　≑ talbiqu (放つ)，amiduraqu (生きる)　≑　ükükü (死ぬ) などである。次に、「形容詞　→動詞⇒反義語」形式の反義語、つまり形容詞の後ろに接尾辞を連続して形成された新しい動詞反義語であり、合計４１個あり、全体の１７％を占めている。例えば、sularaqu　(緩む)≑　čingɣaraqu (強まる)，maɣujiraqu (悪くなる)　≑ sayijiraqu (よくなる)，könggerekü (軽くなる) ≑ köndürekü(重くなる)，bayajiqu(金持ちになる)≑　yadaɣuraqu(貧乏になる)，bürkügsikü (曇る)　≑ čelmegsikü (晴れる) などである。その次に、「名詞→　動詞⇒反義語」形式の反義語、つまり、名詞の後ろに接尾辞を連続して形成された新しい動詞反義語であり、合計２１個あり、全体の９％を占めている。例えば、nökürlekü　(友になる) ≑ dayisungnaqu (敵対する)，bayarlaqu (喜ぶ)　≑　aɣurlaqu (怒る)，usudaqu (洪水にみまわれる)≑ ɣangdaqu(干ばつになる)，qayiralaqu(愛する ≑ qorusqu(憎む)，nayiramdaqu(和解する)　≑ dayiduqu(戦う)などである。上記の図表で示せば、以下のようになる。

構成の形式	例	数	比率
動詞＋接尾辞 → 動詞反義語	bariqu ≑talbiqu jibbükü ≑ köbbükü abqu ≑ ögkü	105	43%
形容詞＋接尾辞→動詞反義語	sularaqu ≑ čingɣaraqu yadaɣuraqu ≑ bayajiqu bürkügsikü ≑ čelmegsikü	41	17%
名詞＋接尾辞→　動詞反義語	usudaqu ≑ ɣangdaqu nökürlekü ≑ dayisungnaqu qayiralaqu ≑ qorusqu	21	9%

4.2.2.4. 動詞反義語の表現する意味について

モンゴル語における動詞は、種類が豊富であり、その上数量が多い品詞である。「モンゴル語の動詞は、他の品詞から大量に生み出されるので、種類が多く、しかも数量も多いのである」[25)]。詳細に観察すれば、モンゴル語の動詞反義語の中で、人間や動物の動作及び変化を示す反義語は優位を占めている。当然のことであるが、その他の意味も示す。具体的に言えば、

人間に関する反義語：

asayuqu(尋ねる) ≑ qariyulqu(答える) emüskü(着る) ≑ tayilqu(脱ぐ) bayajiqu（金持ちになる） ≑ yadayuraqu（貧乏になる）abqu（もらう） ≑ ögkü（あげる） mayusiyaqu（非難する） ≑ sayisiyaqu（褒める）

人間と動物に関する反義語：

öluskü（腹が減る） ≑ čadqu（満腹する)、 turaqu（痩せる）≑ taryulaqu（肥える） irekü(来る) ≑ očiqu(行く)、untaqu(寝る) ≑ serikü(目覚める) 、 ükükü（死ぬ） ≑ amiduraqu（生きる）

人間、動物及び無生命の物に関する反義語：

ködelkü（動く）≑ joysuqu（止まる） nayasilaqu（近づく）≑ čayasilaqu（遠ざかる）norqu（濡れる）≑ qataqu（乾く）

草、植物に関する反義語：

kökerekü（青ばむ）≑ qubaqayiraqu（干からびる)、 noyuyaraqu（緑になる）≑ siralaqu（黄色くなる） čečeglekü（咲く）≑ siralaqu（黄色くなる）

社会のことに関する反義語：

manduqu（繁栄する） ≑ doruyitaqu（哀退する)、 kögjikü（栄える）≑ uruyutaqu（哀える） manduqu（興る）≑ mökükü（滅びる）

自然のことに関する反義語：

köldekü（凍る）≑ qayilqu（溶ける） 、 yangtaqu（干ばつ）≑ usudaqu（水害になる)、 egülesikü（曇る）≑ tungyalaysiqu（晴れる）

その他の反義語：

delgeregülkü（ 大する）≑ quriyangyuyilaqu（要約する） keyisbürilekü（抽象化する） ≑ bodatayičilaqu（具体化する）

以上、名詞類と動詞類において反義語を分析した。引き続き、不変化詞類の反義語につ

いて分析する。

4.2.3. 不変化詞類における反義語

モンゴル語の不変化詞類における品詞とは、dayiburi üge (副詞)、ayalɣa üge (間投詞)、qandulɣa üge (待遇詞)、daɣaburi üge (後置詞)、sula üge (助詞)、qolbuqu üge (連続詞) など六種類の品詞が含まれている。その中では、副詞、 待遇詞、 助詞に対応する反義語がある。つまり「品詞の全ての分類に対応する反義語があるわけではない」[26]。不変化詞類の反義語は名詞類と動詞類の反義語よりはるかに少数である。つまり、名詞類と動詞類の反義語はモンゴル語の品詞の中で、絶対多数を占めている。これまで、モンゴル語の不変化詞類における反義語について研究されていない。これは、モンゴル語における反義語研究のもう一つの欠点である。以下、不変化詞類の反義語についてそれぞれ説明する。

4.2.3.1. 副詞反義語

モンゴル語の副詞とは、行動、状態、性質の特徴を示す語である。副詞の中で、対応する反義語があるのは čaɣ orun-u dayiburi üge(時間副詞)しかないのである。例えば、genedte(急に) ⇔ imaɣta(いつも)、ürgülji(常に)⇔ qaya(たまに)、mödtü(すぐ) ⇔ ayar(あと)、kedüini(すでに) ⇔ sayi(さっき)、bayingɣu(常に) ⇔ qaya(時折)、ödker(すぐ) ⇔ ayar(あと)などである。

4.2.3.2. 助詞反義語

モンゴル語の助詞とは、人が物事に対する態度の意味を示す語である。助詞の中で、肯定助詞 と否定助詞 は相互に対立して反義語になる。つまり、肯定助詞 の mön という語と否定助詞 の bisi という語であり、mön (である) ⇔ bisi (ではない) である。

4.2.3.3. 待遇詞反義語

モンゴル語の待遇詞 (qndulɣa üge) 詞とは、物事及びその関係に対する人の態度を示している言葉である。例えば、maɣad (かもしれない)、erkebisi (必ず)、üneker (本当に)、ilangɣuya (とりわけ)、jabal (必ず)、labtai (きっと)、jöbken (単に)、bolultai (たぶん)、yariyan ügei (言うまでもない)、sejiglesi ügei (疑いなく)、yerüni (一般に) などである。その中で、bolultai (かもしれない)⇔ labtai(必ず)という一つの反義語し

かないのである。

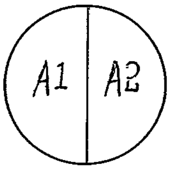
品詞研究はモンゴル語の形態論の重要な研究対象であり、同時に「モンゴル言語学の中で、最も議論される問題の一つである[27]。品詞の角度からモンゴル語の反義語を分析することは、その様々な特徴について明らかにするに役立を果たすだろう。反義語について熱心に研究した学者である謝文慶が、「反義語について研究する際、品詞の角度から注意して研究すれば、その内部的な特徴を明らかにするときに非常に有効であろう」と述べている[28]。

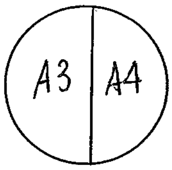
4.3. 過渡的意味による分類

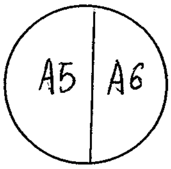
一般的に、反義語は両極反義語と相補反義語の二種類にわけて研究されている。過渡的意味のある（siljilte-yin činar-tai üge）反義語が両極反義語であるのに対して、過渡的意味のない反義語が相補反義語である。このような分類法はモンゴル語、日本語、中国語のいずれも同じである[29]。

4.3.1. 相補反義語について

相補反義語とは、反義語の中には過渡的意味がない反義語である。相補反義語の特徴は事物を二つの状態にしか分けておらず、その間に三番目の概念を表す語が存在していないのである。つまり、概念の領域を二分し、一方が肯定されれば、他方が否定される関係にあるということである。例えば、joγsuqu（真実）≑ ködülkü（偽）という反義語に、joγsuqu でなければ必ず ködülkü　、逆に ködülkü なければ必ず joγsuqu である。joγsuqu と ködülkü の間に中間帯、または過渡的な意味がまったくないのである。例えば、ere（男）<A１>≑　eme（女）<A2>、jöb（正しい）<A3>≑　buruγu（間違い）<A4>、köbbükü（浮く）<A5> ≑ jibbükü（沈む）<A6>。図形式すれば以下の通りである。





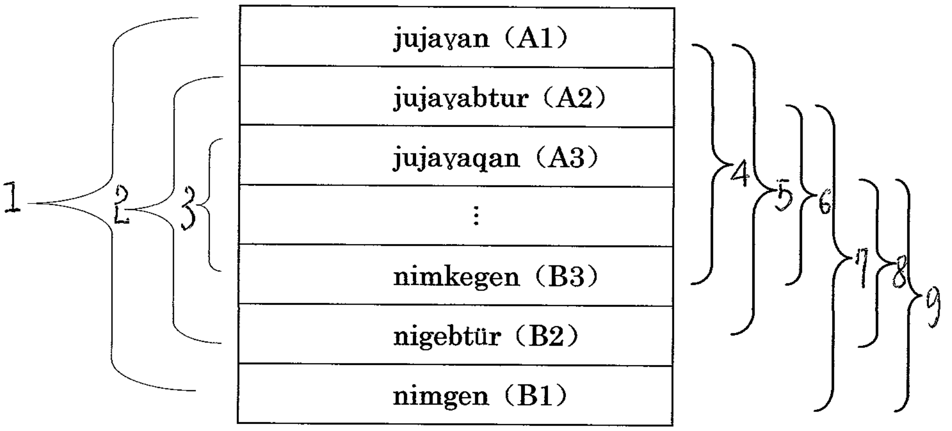


「男—女」という相補反義語について、ある笑い話が伝えられている。ある日、孫がおばあさんに「昨日先生に子供が生まれたんだって。当ててみて、女の子か。男の子か。」「女

の子。」「違う、もう一回当ててみて。」「男の子。」「あたり、あたり。おばあさんはすごいね、たった二回で当てるなんて…」実際、これは非常に普通なことである。人間にとって、性別は男と女の二種類にしかないからである。男性でなければ女性であり、逆に女性でなければ男性であるというのは当たり前のことである。

4.3.2. 両極反義語について

両極反義語の中間帯に意味の連続性である。説明されている反義語はその連続性の両極であり、中間の過渡的意味がその反義語の両極の連続性である。このことについて国広哲弥は「両端の間に無限の中間段階があり得る」と述べている[30]。例えば、qalaγun（暑い）≑ küyiten（寒い）⇒ qalaγun—dulaγan（暖かい）— serigün（涼しい）— küyiten、jujaγan（厚い）≑ nimgen（薄い）⇒ jujaγan（厚い）— jujaγabtur（厚め）— nimgebtür（薄め）— nimgen（薄い）。しかし、原語とその意味の連続性の語は相互に反義語になることはできなく、また意味の連続性の語も文法形式の異同場合、反義語になることはできない。図式化すると以下のようである。

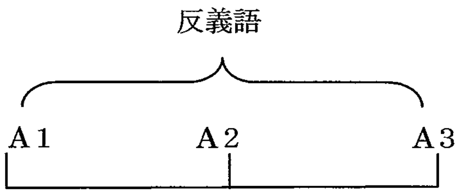


1 反義語（A1 ≑ B1）、2 意味の連続性＝反義語（A2 ≑ B2）、3 意味の連続性＝反義語（A3 ≑ B3）、4．非反義語（A1— B3）、5．非反義語（A1—B2）、6 非反義語（A2—B3）、7 非反義語（A2—B1）、8 非反義語(A3—B2)、9 非反義語（A3—B1）

過渡的意味によって、両極反義語をさらに一つの移動的意味ある両極反義語と多数の移動的意味ある両極反義語の二種類にわけて分析する。

4.3.2.1. 一つの過渡的意味ある両極反義語

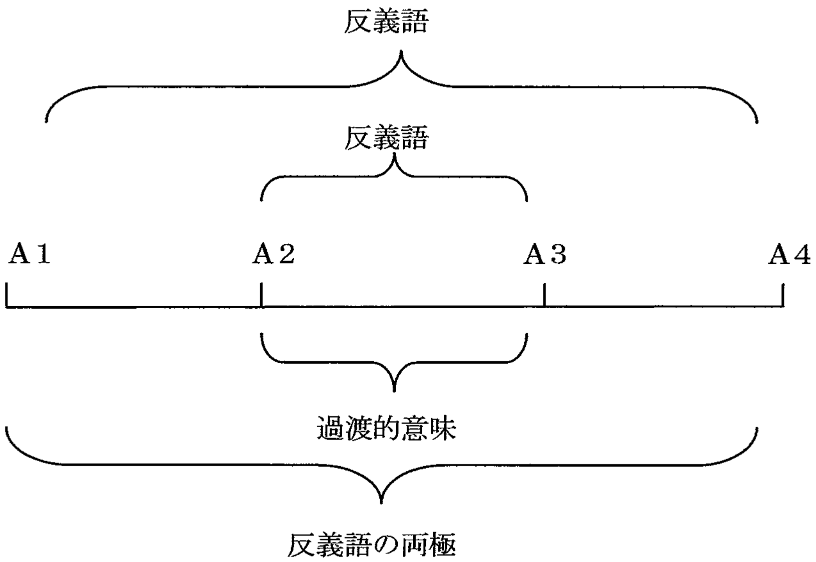
これは、過渡的意味が一つしかないの両極反義語を指す。例えば、uruɣsilaqu（前進する）— joɣsuqu（止まる） — uquriqu（後退する）、 ilaqu（勝つ）— tengčeldükü（引き分ける）— ilaɣdaqu（負ける）、 degedü（上）— dumdadu（中） — douradu（下）などである。図式化すれば、以下のようである。



4.3.2.2. 多数の過渡的意味ある両極反義語

これは、過渡的意味が多数ある両極反義語を指す。さらに、その過渡的意味は相互に対立して反義語になる場合もある。例えば、

yeke(大きい) — yekeken（大きめ）— baɣaqan（小さめ） — baɣa（小さい）、 qola（遠い） — qolabtur（幾分遠い）— oyirabtur（幾分近い） — oyira（近い）、qara（黒い）— qarabtur（黒めである） — čaɣabtur（白めである）— čaɣan（白い） 。図式化すれば以下のようになる。



両極反義語は講演や日常会話に積極的に使用されている。例えば、アメリカ民主党のオバマ上院議員は主な外交政策では中国に対して、「中国は敵でもなく友もでもない。競争相

手」と言ったことがある。(日本経済新聞　２００８・５・２２・３面　「変革訴え　秋の本選へ」)。この講演の中では、両極反義語は敵―　競争相手―友がある。また、彼は太くないし細くないし、高くないし低くないし、黒くないし白くない人である。この文章の中では、両極反義語は太い―普通―細い、高い―普通―低い、黒い―普通―白いである。

[注]

1）赵克勤　1986　p.35

2）Sečin　Delgerma 1996 p.99

3）He lian xi　2002 p.1

4）Jambalsürüng nar 1990　p.153

5）石安石　1998 p.87

6）北原保雄　1988 p.2

7）塩谷茂樹　2006　p.1

8）Čenggeltai　1999

9）Tulγaγuri　1993　p.37

10）张拱贵　1957 p.32

11）Jambalsürüng nar　1990 p.151

12）许威汉　2002　p.452

13）马学良等　1997　p.179

14）武占坤 等 1983　p.138

15）Sečin Delgerma　1996　p.184

16）Čenggeltai 1999 p.182

17）Badmadorji　1997　p.113

18）Čenggeltai 1999　p.206-207

19）Čenggeltai　1999 p.206

20）Gereltü　1998 p.　236

21）Badmadorji　1997　p.116

22）Jambalsürüng nar　1990 p.151

23）Temürčerin　2004　p.66

24）Čenggeltai　1999　p.297

25) Čenggeltai 1999 p. 235

26) D・bandi 1978 p. 9

27)Öbür mongyul-un yeke suryayuli-yin mongyul kele bičig sudulqu yajar 2005 p. 365

28) 谢文庆 1988 p. 27

29) Sečen Delgerma 1996 p. 184

工藤浩 1995 p89

贾彦德 1999 160-163

30) 国広哲弥 1987 p. 170

第五章　モンゴル語における反義語の意義深い問題について

モンゴル語における反義語研究には様々な意義深い問題が存在している。これは、モンゴル語の反義語研究において特別なことであり、同時に見落とすことのできない研究課題である。しかし、こうした課題については、これまで十分研究されていないのである。そのため、当部分では、この課題について分析することを目指した。これは、モンゴル語における反義語のことを全面的に研究するに役立つであろう。

5.1.特別な反義語

反義語は密接な意味関係ある二つの語の対立であるが、非常に少数の二つの語は意味の点であまり関係がないのに反義語になることはできる場合もある。この例としては、**yal**(火) — **usu** (水)、**toluyai** (頭) — **segül** (尾)、**tengri** (天) —**yajar** (地) などがあげられる。これらの語がなぜ反義語になっているのか。まず、それらの語の間に間接的な対立関係あるいは隠されている対立関係が存在しているためである。**yal** と **usu** という語は、**usu** は **yal** を消す、つまり燃える—消えるという矛盾する関係を示し、**toluyai** と **segül** という語は動物の身体における最も前の部分と最も後ろの部分、つまり位置における前後の対立関係を示し、**tengri** と **yajar** という語は、上と下の両極の矛盾する関係を示している。次に、これらの対立関係はその民族の語に反映され、さらに対立概念を示し、使用過程中に反義語となってきた。つまり、その民族の思惟と語の使用習慣と関係している。この課題について、他の民族の語彙における反義語研究に反映されている。「言語の使用習慣は反義語であるかどうかを判断する一つの基準である」[1]。「反義語の形成は、言語の使用習慣の基礎も必要である」[2]。「社会習慣によって反義語になる場合もある」[3]。「反義語はその社会

の文化や習慣に多少が関係がある」[4)]。

総じて、上述した語が反義語になっているのは、言語原因と社会原因という二つの原因がある。言語原因とは、対立するあるいは矛盾する関係である。社会原因とは、その民族の思惟と語の使用習慣である。さらに、言語原因は反義語になる前提と基礎であり、社会原因は反義語になる反映と結果である。

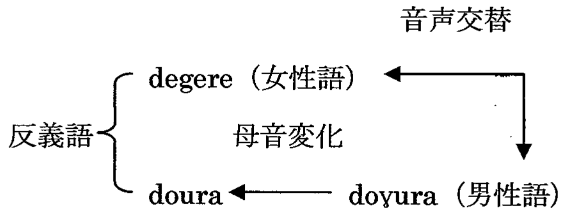
5.2. 反義語と同義語

単語として反義語であるが、他の語と組み合わせて使用される時、つまり文章の中で同義語の意味を示すということである。例えば、degere（上）≑ doura（下）、ögede（上り坂）≑ uruɣu（下り坂）、irekü（来る）≑ očiqu（行く）などである。degere ≑ doura、ögede ≑ uruɣu という二つの反義語は同義語の意味を示す代表的な例文である。

degere — doura

反義語 ｛ degere ： ɣajar degere unaba（地面に落ちた）／ doura ： ɣajar doura unaba（地面に落ちた）｝ 同義語

degere — doura という反義語は語源の観点から見ると、音声の交替によって形成されていることは明らかである。つまり、degere ≑ doura （← doɣura ）である。この音声交替から生み出された反義語を証明する証拠は degegsi — doɣuɣsi という反義語の存在である。音声交替がモンゴル語の形成の一つの要因であると言える。モンゴル語では、音声交替によって形成された単語は多くある。例えば、dabsiqu（進歩する） — debsikü（進める）、ɣatulqu（川を渡る） — getülkü（川を渡る）、očiqu（行く） — ečikü（行く）、terigün（第一） — türügün（第一）などである。興味深いことは、鼻子音の b と m はモンゴル語と日本語に交替するという現象が存在している。例えば、モンゴル語では、＜qabar（鼻）— qamar（鼻）＞である。日本語では、＜さびしい—さみしい＞という例ある。degere ≑ doura という反義語の語源を図案すれば以下のようである。



ögede — uruɣu

反義語
- uruɣu : qoni ɣoul uruɣu yabuju bayina
  （羊が川の方へ行っている）
- ögede : qoni ɣoul ögede yabuju bayina
  （羊が川の方へ行っている）

同義語

ögede — uruɣu という反義語は地形の坂に関する反義語である。オルドス方言では、この反義語は独立語の意味を完全に失い、方向格としての意味を示すことになった。

これらの例から《degere ≑ doura, uruɣu ≑ ögede》という反義語は本来の独立語の意味を消失し、抽象的意味を示すに至っている。つまり、ある独立語は使用過程において独立語としての意味を失い、抽象的な意味、さらに格としての役割で用いられることになる。具体的には、「degere ≑ doura」という反義語はモンゴル語の位置格の意味を示しており、「uruɣu ≑ ögede」という反義語は方向格の意味を示しているということである。これを例文によって示すと下のようになる。

degere ≑ doura

ɣajar degere unaba(地面の上に落ちた)

ɣajar doura unaba (地面の下に落ちた)

→ ɣajar tu unaba（地面に落ちた）

ögede ≑ uruɣu

qoni ɣoul uruɣu yabuju bayina
（羊が川の方へ行っている）

qoni ɣoul ögede yabuju bayina
（羊が川の方へ行っている）

→ qoni ɣoul jüg yabuju bayina
（羊が川の方へ行っている）

irekü（来る） ≑ očiqu（行く）という反義語は位置の移動に関する反義語である。第一人称あるいは第一人称の存在する地点から離れていく動作は očiqu という語であり、第

一人称あるいは第一人称の存在する地点に近づいていく動作は irekü という語である。この反義語は上述したように自立語の意味を失い抽象化してはいないが、本来の意味は変化し＜qariqu（帰る）＞という意味を示すことになった。この位置の移動を示す očiqu ≑ irekü という反義語は、反義語として用いる場合は移動の過程を強調し、類義語として用いる場合は移動の結果を強調している。この変化の現象を図で示せば以下のようになる。

反義語 ⟶ 過程

očiqu ≑ irekü

qariqu ⟶ 結果

irekü ≑ očiqu という反義語を例文によって示すと下のようになる。

irekü ≑ očiqu

ger- tegen ireged yaγu kibe?
（家に来て何をしましたか）

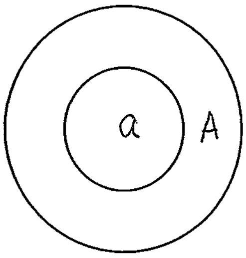
ger -tegen očiγad yaγu kibe?
（家に行って何をしたか）

ger- tegen qariγad yaγu kibe?
（家に帰って何をしたか。）

5. 3. 反義語と反義関係

反義語と反義関係は相互に密接な関係がある意味論の研究対象であるが、同一のことではない。モンゴル語における反義語研究は、この二つの概念の差異に十分に留意しなければならない。反義語は反義関係を示しているが、反義関係を示している全ての語が反義語になるとは限らない。「対立している語全ては反義語になるとは限らないのである」[5)]。反義語が必ず対等性を保持するのに対し、反義関係はこの対等性とそれほど密接な関係にはないのである。反義関係は反義語より範囲が広く、反義語は反義関係の一部分である。つまり、反義語と反義関係は包括する側と包括される側の関係あるいは上位概念と下位概念の関係にあるのである。例えば、qayiralaju sanaqu(愛する) ≑ qorusqu（憎む）という言葉は反義関係を示しているが、反義語にはならない。単語と連語は相互に反義語になることはできない。しかし、qayiralaju sanaqu （愛する）≑ qorusču januqu（憎む）あるいは qayiralaqu（愛する）≑ qorusqu（憎む）、qayiralaqu(愛する) ≑ januqu(憎む)、

sanaqu(恋しく思う) ≑ qorusqu(憎む) 、 sanaqu(恋しく思う) ≑ januqu(憎む)という語は反義語になると同時に反義関係である。意味の対立関係を示しているのに、反義語になることができない場合もある。これを図表で示すと、以下のようになる。A は反義関係であり、a は反義語である。



5.4. 反義語と否定関係

モンゴル語における反義語と否定関係は異なる概念である。反義語は意味論の研究対象であるが、否定関係は形態論の研究対象である。「原語とその否定関係は反義語になることができない」[6)]。「ある語とその語の否定詞は対立しているが、反義語になることができないのである」[7)]。モンゴル国の研究者の中には、反義語と否定関係を混同して説明している場合が多い。一つの例を挙げよう。『モンゴル語の意味論の基礎』という本では「irekü (来る) ≑ irekü ügei (来ない)、bolqu (よろしい) ≑ bolqu ügei (いけない)、čidal-tai (力がある) ≑ čidal ügei (力がない)、jab čilüge-tei (暇な) ≑ jab čilüge ügei (暇がない)、yasu-tai (骨つきの) ≑ yasu ügei (骨なしの)、ke-tei (模様のある) ≑ ke ügei (模様のない)」という語は反義語であると述べている[8)]。しかし、これらの語は否定関係になるが、反義語にはなることはできないと思われる。その他、例えば、irekü (来る) — irekü ügei(来ない)、nemekü(加える)— nemekü ügei(加えない)、kilbar(易しい)— kilbar ügei (易しくない)、küyiten (寒い) — küyiten ügei (寒くない)、jujaγan (厚い) ≑ jujaγan ügei (厚くない)、itegekü (信じる) ≑ itegekü ügei (信じられない) という語が、原語とその原語の否定関係を示すものの相互に反義語とはなることはできないことは明らかである。nemekü (加える) ≑ qasuqu (減らす)、küyiten (寒い) ≑ qalaγun (暑い)、jujaγan (厚い) ≑ nimgen (薄い)、itegekü (信じる) ≑ sejiglekü (疑う) という関係が反義語なのである。仮に、モンゴル語において否定の語がその原語と反義語であるということになれば、ほとんどの語に対応する反義語が存在することになる。しかし、実際には、モンゴル語の中で、対応する反義語の語が少数ということは事実である。非常に少数の学

者は原語とその否定詞は反義語になると主張している。「一般的に、原語とその否定語は反義語になる」[9]。しかし、原語とその否定詞は反義語ではないと主張している学者は多数である。「否定助詞をつけて形成された語は反義語になると説明することは、反義語についての認識が不足している」[10]。モンゴル語では、原語とその否定関係は反義語になることができないが、ほかの言語では原語とその否定関係は反義語になる場合がある。例えば、日本語では、有名 ⇔ 無名、便利 ⇔ 不便という語は反義語になる。モンゴル語の場合は、原語とその原語の否定関係がまったく反義語になることができないのは疑問の余地がないのである。反義語になるか否かということは言語によって異なるのである。「反義語になるかどうかということはその言語の特徴によって決められる」[11]。

[注]

1) 武占坤 1983 p.141

2) 陈满华 1994 p. 35

3) 戴耀晶 1988 p.100

4) 加藤彰彦他 1989 p. 199

5) 曹炜 2001 p.112

6) 谢文庆 1986 p. 37

7) 广达 林玉 1990 p.39

8) Badmadorji 1997 117

9) 扬之舟 1981 p. 143

10) 许威汉 2002 p. 355

11) Tedke 1987 p.277

第六章 モンゴル語における反義語の役割

モンゴル語学者達は、モンゴル語の反義語の役割について重要な研究対象として分析して、説明してきたが、主に使用の役割についてかぎるられてきた。本論では、モンゴル語の反義語の役割について四つの点から分析する。つまり、使用の役割、形成の役割、教育の役割、辞典編纂の役割ということである。

6.1. 使用の役割

反義語は言語の表現能力を高めることができる特別な役割があるので、古今東西人々の発表や作品などによく使用され、強い印象を残している。

6.1.1. モンゴル語の反義語の使用を通して、文章の意味をより一層強調し、人々の注意を引くことができる。例えば、**daruu kičiyenggüi kümün-i dabsiɣuldaɣ**（謙遜した人を進歩させる)、**omurqaɣ bardam kümüs-i qočuruɣuldaɣ**（高慢な人を後退させる）という文では、高慢ではなく、謙遜していきなさいという意味を強調した。**daruu kičiyenggüi kümün-i dabsiɣuldaɣ** という普通の表し方より **daruu kičiyenggüi kümüs-i dabsiɣuldaɣ, omurqaɣ bardam kümüs-i qočuruɣuldaɣ** という反義語の表し方は意味をより一層強調している。そのほか、例えば、**onisuɣa bol udqa sanaɣa-yi ilel bisi dalda, siɣud bisi dam iledkekü ončaliɣ-tai yum**（謎は意味をはっきりではなく、間接的に表す）という文章の **ilel bisi dalda**（はっきりではなく、秘かに)、**siɣud bisi dam**（直接ではなく間接）という言い方は意味を非常に強調しているのは明らかである。

モンゴル語の反義語を対立して使用することは哲理的意義を示し、よりよい効果をもたらしており、記憶にとどめる役割がある。これは、反義語の興味深い役割である。例えば、ロシアの偉大な作家ゴーリキーは時間について「**delekei degere qamuɣ-un qurdun böged qamuɣ-un udaɣan,qamuɣ-un urtu böged qamuɣ-un oqur,kümüs-i qamuɣ-ača qaramsaɣuldaɣ böged qamuɣ-ača bayarlaɣuldaɣ yaɣuma bol čaɣ mön**(世界で最も速いと同時に最も遅い、最も長いと同時に最も短い、人々を最も喜ばせると同時に最も苦しませるものは時間である)という箴言を述べている。この文章では、対立して使用された反義語は **qurdun**(早い) ⇔ **udaɣan**（遅い）, **urtu**（長い） ⇔ **oqur**（短い）, **qaramsaɣuldaɣ**（苦しませる） ⇔ **bayarlaɣuldaɣ**（喜ばせる）である。これは、その三つのペアの反義語の対立使用によって箴言になったということは言うまでもない。モンゴル語では、ükügsen amidu-yin quɣurundu （死に生きの間）という一見矛盾したような表現がある。これが、修辞方法によって生み出された語であり、その意味は人の無能、何もできないことを風刺したことである。例えば、中国の偉大な作家である鲁迅はそういう名言を言ったことがある。ある人は死んでしまった。しかし、また生きている。ある人は生きている。しかし、もう死んでしまった。この名言は前後矛盾しているように感じられるが、しっかり考えれば、深い哲理の意味であることを理解する。鲁迅は、「死ぬ一生きる」という反義語をきれいに使用し、まったく異なる二種類の人に対しての態度を表明した。つまり、国家及び人間に悪いこと、損害なことばかりやっている人々を強く批判するのに対して、革命のため、

進歩のため、自分の貴重な生命を捧げた犠牲者に心をこめて尊重している態度を表明した。中国語では、半死不死,九死一生,死去活来,死里逃生,虽死犹生など ükükü— amiduraqu という反義語を対立し使用した熟語がある。日本語でも半死半生、九死に一生を得るなどの語がある。これらの語は、ükükü（死ぬ）と amiduraqu（生きる）という相補反義語の対立使用の例文である。その他、日本語に「うれしい悲鳴」という語がある。この語は、うれしい一悲しいという反義語を対立使用し、極めてうれしい、うれしくてたまらないという意味を表した慣用句である。その慣用句について『日・漢・英言語文化辞典』にこう述べている。「うれしい悲鳴」という一見矛盾したような表現は、直面している事態そのものは本来歓迎すべきことであるゆえに「うれしい」ということと、しかしそれが自分の対処・対応できるような状態であるということの両方を意味しているのであって、「うれしい」という感情がきわまって「悲鳴」をあげるということでもなければ、文字通りに叫び声を出すということでもない」[1]。そういう日本語の表現はモンゴル語では、bayarlaju üküne という語で、中国語では、高兴死了という表現で表す。

また、『俗世間　つもりちがい十ケ条』という日本語の文章では、こう述べている。一　高いつもりで　低いのは教養　二　低いつもりで　高いのが気位　三　深いつもりで　浅いのは知識　四　浅いつもりで　深いのが欲　五　厚いつもりで　薄いのは人情　六　薄いつもりで　厚いのが面の皮　七　強いつもりで　弱いのは根性　八　弱いつもりで　強いのが我　九　多いつもりで　少ないのは分別　十　少ないつもりで　多いのが無断。この文章は高い ≑ 低い、深い ≑ 浅い、厚い≑ 薄い、強い≑ 弱い、多い≑ 少ないという五つのペアの反義語を自由に使用して哲理的意味が表すことができた。モンゴル語では「ilaγdal bul ilalta-yin eke　mön（失敗は成功の母である)」という助言がある。つまり、落ち込まないで一生懸命に努力していけば失敗しても成功できるという哲理意味を ilaγdal（失敗）≑ ilalta（勝利）という反義語を用いて表した。

そういう反義語は、意味の組み合わせ関係と矛盾して通じない文章のように感じられるが、深く考えれば、意義深い理屈を示しているすばらしい名言である。

6.1.2. 反義語は物事の矛盾する関係を鮮明に表しており、さらに意味をわかりやすく示して、物事を生き生きと描写することができるので、作家や指導者達は自分の作品の中で反義語の使用することを非常に重視している。こういう例文は多数である。例えば、

ögekün　baγlaγatai kümüs　ebül boluγsan-ču　qalaγun , erüke ni čoγurqai

kümüs jun boluγsan-ču　küyiten, tosu uγuγsan kümüs qabur boluγsan-ču　tarγun

tuluma čirügsen kümüs namur boluγsan-ču turangqai－Bürinbeki（金持ちの人は冬になっても冷えないが貧乏な人は夏になっても冷える、裕福な人は春になっても太いが貧しい人は秋になっても細い。－ブリンベキ）この文章に現れた反義語は以下のようである。

ebül（冬） ≑ jun（夏）、 qalaγun（暑い） ≑ küyiten（寒い）、

tarγun（太い） ≑ turangqai（細い）

ene jabsar Daγdan-u ekener-ün tarγulaγsan ba Čirma-yin turaγsan qoyar yaγ tengčene —Načuγdorji（この間、タグダンの奥さんが肥えたことやチルマが細くなったことがちょうど等しい。－ナチグドルジ）

この文章に現れた反義語は以下のようである。

tarγulaγsan（肥えた） ≑ turaγsan（細くなった）

edür-ün kemjiye urtudču（昼は長くなって）

gerel-ün küčü nemegdejü（光は強くなって）

söni-yin kemjiye boγunisču（夜は短くなって）

qarangγui-yin küčü qomsadqu adali（暗やみが弱くなるごとし）

sine jil-un irügel — Damdinsürüng（新年祝詞ーダムデンスルン）

この文章に現れた反義語は以下のようである。

urdudqu（長くなる） ≑ boγunisqu（短くなる）、 edür（昼） ≑ söni（夜）、

nemegdekü（強くなる） ≑ qomsadqu（弱くなる）

jöb yaγuma bol yerü-eče buruγu yaγuma-tai temečel kikü yabuča-du kögjideg. ünen sayin sayiqan yaγuma bol yerüni qudal maγu maγuqai yaγuma-tai adalidqal-tai -bar orusiju qarilčan temečeldün bayiju kögjideg. —Mao ze dong（正しいものはいつも間違いのものと対立する過程で発展する。真実、良い、美しいものはいつも偽り、悪い、醜いものと比較することで存在し、相互に対立して発展する。— 毛沢東）

この文章に現れた反義語は以下のようである。

jöb（正しい） ≑ buruγu（間違い）、 ünen（真実） ≑ qudal（偽り）、

sayin（良い） ≑ maγu（悪い）、 sayiqan（美しい） ≑ maγuqai（醜い）

6.2. 形成の役割：

6.2.1. Onisuɣa

Onisuɣa（謎）はモンゴル民族の文化の遺産として、人々の間に広く伝えられてきた。謎は、物事や現象などの似ている特徴を別の現象に反映する口承文芸のジャンルである。謎の特徴は、意味が隠され、聞きながら答える形式である。謎の役割が人々の連想力、思考能力を進め、語の表現力を高めるに大きな役割がある。謎とは taniday yaɣuma mededeg yaɣuma, tariki ködelgejü taɣaday yaɣuma , taɣaɣad olbal bayarladay yaɣuma , tangsuɣ oyun-i nemegdegüldeg yaɣuma（知っているものわかっているもの、考えて考えて当てるもの、当てることができればうれしいもの、人の知恵を高めるもの）である。モンゴル語の謎は反義語から構成される場合もある。換言すれば、反義語はモンゴル語の謎を形成する方法の一つであると言ってもいい。実例として以下のようである[2]。

joɣsubal bandang saɣubal yandung (noqai)（立てば椅子 座れば煙突 ー犬)。

この謎においての反義語は以下のようである。

joɣsuqu（立つ） ≑ saɣuqu（座る）

edür ni jobalang , söni ni jirɣalang (sira sibaɣu)（昼は苦しみ 夜は幸せーフクロウ)。

この謎においての反義語は以下のようである。

edür（昼） ≑ söni（夜)、 jobalang（苦しみ） ≑ jirɣalang（幸せ）

arba-yin degere nemebečü arba, arba-eče qasubaču arba (begelei)

（十個にたしても十個 十個に引いても十個 ー 手袋)。

この謎においての反義語は以下のようである。

nemekü（足す） ≑ qasuqu（減る）

jun jögelen beye-tei ebül qataɣu beye-tei(usu)（夏は柔らかい体、冬は硬い体 ー水)。この謎の反義語は以下のようである。

jun（夏） ≑ edül（冬)、 qataɣu（硬い） ≑ jögelen（柔らかい）

qota ni čaɣan, qoni ni qara(čaɣasu bičig)（院は白い、羊は黒いー紙 文字 ）

この謎においての反義語は以下のようである。

qara （黒い）≑ čaɣan（白い）

ɣadana-ban küyiten , dotuna-ban qalaɣun.— qalaɣun saba （外が寒い　中が熱い　一魔法ビン)。

この謎においての反義語は以下のようである。

ɣadana（外） ≑ dotuna（中）　、qalaɣun（熱い）≑ küyiten（寒い）

oruqu ni　orui-bar-iyan　ɣarqu ni qajaɣu-bar-iyan　—　dangqu (入るのは上で　出るのは横で　一やかん)

この謎においての反義語は以下のようである。

oruqu　（入る）≑ ɣarqu（出る）

niruɣun degere-ben nuɣusu-tai , nuɣusun degre-ben taɣlaɣa-tai , böküyibel bögeljijü gedeyibel kekerene　—　debüre (背中にちょうつがいり、ちょうつがいにふたあり、頭を下げれば吐いて、頭を上げればげっぷをする　一薬缶)

この謎においての反義語は以下のようである。

gedeyikü（頭を上げる）≑ böküyikü（頭を下げる）

.

očiqu- daɣan moɣai egürüne　irekü– degen jaraɣa egürüne　—tülege　egürükü（行く時蛇を背負う、来る時ハリネズミを背負う　－　柴を背負う）.

この謎においての反義語は以下のようである。

očiqu（行く）≑ irekü（来る）

jegüntei -eče iregsen jigür- tei alaɣ,　baraɣun-tai - ača iregsen barkiraɣa alaɣ,　qoyina -ača iregsen qobduɣ alaɣ,　emüne- eče iregsen önggeljegür alaɣ　—　šaɣajaɣai (東から来た翼がある斑、西から来た鳴く斑、北から来たな貪欲な斑、南からきたのぞく斑　一カササギ)

この謎においての反義語は以下のようである。

jegün（東）≑ baraɣun（西)、　qoyina（北）≑ emüne（南）

douɣur-iyan idejü,　degegür-iyen baɣadaɣ,　tegsi busu-yi üjebel ,tengkege meden

tegsiledeg — qarayul（下から食べて、上から出す。平らでないことを見つければできるだけ平らとする一鉋)。

この謎においての反義語が以下のようである。

douyur（下に） ≑ degegür（上に），

segül-ni ergi degere , toluyai ni dalai dotura— sinaya（尾が岸に 頭が海の中に 一じゃくし)。

この謎においての反義語は以下のようである。

segül（尾） ≑ toluyai（頭）

boyuni- ača boyuni imayan- ača boyuni , öndür- eče öndür tengri tuluma öndür, čayan-ača čayan ,časun-ača čayan ,qara-ača qara, kö-eče qara — utuya（低いより低い山羊より低い、高いより高い空まで高い、白いより白い雪より白い、黒いより黒い煤より黒い 一煙)。

この謎においての反義語は以下のようである。

boyuni（低い） ≑ öndür（高い)、 qara（黒い） ≑ čayan（白い）

örlüge dörben köl-tei, öde-dü qoyar köl-tei, üdesi yurban köl-tei— kümün-ü ösčü boyijiqu（朝は四つの足がある、昼は二つの足がある、夜は三つの足がある ― 人間の成長）

この謎においての反義語は以下のようである。

örlüge（朝） ≑ üdesi（夜）

man-u noqai čadbal bosuna, ölüsbel kebtene.— uyuta（私の犬が満腹になれば立ち、空腹になれば横になる 一袋）

この謎においての反義語は以下のようである。

čadqu（満腹である） ≑ ölüskü（空腹である)、

bosqu（立つ） ≑ kebtekü（横になる）

delgebel delekei-yin činege, qomibal quruyun činege — nidü（広げれば地球の大きさ、たためば指のおおきさ 一目）

この謎においての反義語は以下のようである。

delgekü（広げる） ⇌ qomiqu（たたむ）

aru-yin aγula-yin modud aburγu bolbaču kebereg , öbür aγula-yin modud bögtür bolbaču bekilig — boγu-yin eber üker-ün eber　（後ろの山の木が巨大なのにこわれやすい、前の山の木が曲がっているのに丈夫　—　鹿の角、牛の角）

この謎においての反義語は以下のようである。

aru（後ろ） ⇌ öbür（前）　kebereg（壊れやすい） ⇌ bekilig（壊れにくい）

6.2.2.　諺

モンゴル語の諺も豊富である。「モンゴル人は日常生活の中で、実に多くの諺を自由自在に用いている」[3]。なぜならば、「モンゴル語の諺は、まさにモンゴル民族の知恵の結晶であり、それと同時にモンゴル口承文芸の様々なジャンルの中で、最小の表現形式で、最大の意味内容を表す芸術作品である」からである[4]。モンゴル語における諺が反義語から構成されている場合が少なくない。つまり、反義語もモンゴル語の諺を形成する役立つを果たしている。反義語より構成されたモンゴル語の諺は、主に教育するや風刺するという意味を示している。例えば（これらの諺を『モンゴル語ことわざ用法辞典』より引用)、

6.2.2.1. 教育する意味の諺

gem ni emüne-ben(過ちは前に)

gemsil ni qoyina-ban(後悔は後に)

emüne（前） ⇌ qoyina（後ろ）

kelekü-dü kilbar(言うは易い)

kikü-dü küčir(やるは難しい)

kilbar（易い） ⇌ küčir（難しい）

maγu yabuqu-du nökür qola(悪いときは友人は遠い)

sayin yabuqu-du sadun oyira(良いときは親戚は近い)

maγu（悪い） ⇌ sayin（良い）、qola（遠い） ⇌ oyira（近い）

jöb-dü jöngdegen ejen-tei(正しいことに多くの主あり)

buruɣu-du bučaqu ejen ügei(間違いに認める主なし)

jöb(正しい) ⇌ buruɣu (間違い)

6.2.2.2. 風刺する意味の諺

edür aldaɣad(昼失い)

söni temterikü(夜探し)

edür (昼) ⇌ söni (夜)

abqu kümün böküyikü(もらう人は頭を下げる)

ögkü kümün gedeyikü(あげる人は頭をたげる)

abqu (もらう) ⇌ ögkü (あげる)

böküyikü (頭を下げる) ⇌ gedeyikü (頭をもたげる)

sečen-dü qoyar čiki čögedekü(賢い者に二つの耳が少なすぎる)

teneg –tü ɣaɣča kele oladaqu(愚か者に一つの舌は多すぎる)

sečen(賢い者) ⇌ teneg (愚か者)

čögedekü (少なすぎる) ⇌ oladaqu (多すぎる)

ɣadana-ban ɣilančaɣ(外はピカピカ)

dotuna-ban pilančaɣ(中はペラペラ)

ɣadana (外) ⇌ dotuna (中)

6.2.3. 箴言

モンゴル語では、同じ反義語は異なる箴言を多数形成する場合がある。《箴言集》(2007)によれば、ajilči (働き者) —aljaɣu (怠け者) という反義語は合わせて１２箴言を形成し、qayira (愛) — qorusul (憎み) という反義語は合わせて７箴言を形成し、 sayin (良い) — maɣu (悪い) という反義語は合わせて２０箴言を形成している[5)]。これらの箴言を並べれば以下のようである。

6.2.3.1. ajilči （働き者）⇔ aljaγu（怠け者）

ajilči kümün-ü γar-tu arjaγar čilaγu γilaljana, aljaγu kümün-ü γar-tu sijir alta jiberene.（働き者の手にでこぼこ石も輝き、怠け者の手に鈍金も錆びる）

ajilči ködelmuriči kümün-dü bilegüdegsen qaduγur muqur sanaγdana, aljaγu jalqaγu kümün-dü ayaγa-tai budaγa qola boduγdana.（働き者に磨いた鎌が鈍く感じられ、怠け者に茶碗の中のご飯が遠く感じられる）

aljaγu kümün –ü nidü nuuqatuna, ajilči kümün-ü γar ebersine（怠け者の目に目くそができ、働き者の手にたこができる）

ajilči kümün-dü ajil olan, aljaγu kümün-dü siltaγ olan.（働き者に仕事が多く、怠け者に言い訳が多い）

ajilči arbiči bayajil-un temdeg, aljaγu qoyirγu yadaγural-un temdeg（働き者は豊かの印、怠け者は貧乏の印）

ajilči kümün bayajina, aljaγu kümün ügeyirene（働き者は豊かになり、怠け者は貧しくなる）

aljaγu kümün-dü čag ügei, ajilči kümün-dü siltaγ ügei（怠け者に時間はなく、働き者に言い訳はない）

ajilči kümün-dü amjilta yeke bayidaγ, aljaγu kümün-dü noyir yeke bayidaγ（働き者に成功は多く、怠け者に眠気は多い）.

ajilči kümün amu quriyadaγ, aljaγu kümün ebesü quriyadaγ（働き者は食糧を得る、怠け者は草を得る）

ajilči kümün čaγ-taγan qaramči, aljaγu kümün noyir-taγan qaramči（働き者は時間に

けちであり、怠け者は眠気にけちである）

ajilči kümün-i šangnana, aljaγu kümün-i torγana（働き者を賞与し、怠け者を罰する）

aljaγu kümün-ü nidün-dü, nuuqa jujaγan čuγlaradaγ, ajilči kümün-ü qarman-du asig joγus jujaγan čuγlaradaγ（怠け者の目に目くそ多いたまり、働き者のポケットにお金が多く集まる）

ertelejü oruyilan čirmayiqu ni ajilči kümün-ü jangsil, idejü untaqu-tai jiγuralduqu ni aljaγu kümün-ü dadqal（朝早く先頭に立って努力することは働き者の習慣であり、寝食とつきまとうのは怠け者の習性である）

6.2.3.2. qayira （愛） ≑ qorusul（憎み）

qayira gegči ilči-tai γal, qorusul gegči čisu-tai kituγa（愛というのは熱のある火であり、憎みというのは血のついたナイフ）

qayira-yin qariγu sü, qorusul-un qariγu čisu（愛の報いがミルク、憎みの報いが血）

qayira qorusul todurqai bayiqu, üne qangsi γoolči bayiqu（愛憎ははっきりであり、値段が真実である）

qayira sedkil gün bayidaγ, qorusul ösiye jujaγan bayidaγ（愛情は深く、憎みが厚い）

qayira –ača egüsügsen sedkilge qalaγun jögelen bayidaγ, qorusul –ača egüsügsen sanaγa qargis kerčegei bayidaγ（愛から出じされた心は親切であり、憎みから出じた心は残酷である）

qayira aqadabal qoor boluna, qorusul aqadabal čisu boluna.（愛は過ぎると毒になり、憎みが過ぎると血になる）

qayira qorusul qoyar kemjiye ügei bayiday, qas temür qoyar jögelen ügei bayiday
（愛憎みは無限であり、玉と鉄は柔らかくない）

6.2.3.3. sayin（良い）≑ mayu（悪い）

mayu učir yabudal-du čiki jögelen daruya, sayin kereg učir-tu čiki dülei noyan（悪い事に関心があるリーダー、良い事に無関心のリーダー）

mayu sanaya beye-ji oriyana, sayin sanaya tala-ji toyurina（悪い心が自分自身に損をし、良い心が尊重される）

mayu-ban qalabal sayin bolju boluna, musiyai-ban jasabal asqan bolju boluna.（悪い事を改めると良い事になり、曲がっている物を改めるとまっすぐにする）

mayu sanaya mökül-ün bilegü, sayin sedkil sayijiral-un bilegu（悪い心が嫌われ、良い心が褒められる）

mayu kümün-ü sanaya sedkil muqur yudumji adali, sayin kümün-ü sanaya sedkil sarayul tala-tai adali（悪い人の心が行き止りであり、良い人の心が果てしない）

mayu čimege qosiyun-du, sayin čimege ayil-du（悪いことは旗まで、良いことは村まで）

sayin sanayan-u üjügür-tü sü, mayu sanayan-u üjügür-tü čisu（良い心の末が乳であり、悪い心の末報いが血である）

sayin-i dayabal čayan , mayu-yi dayabal qara（善に従えば白、悪に従えば黒）

sayin mayu-yi ilyaqu, ünen qudal-i todulaqu（善悪を区別し、真偽を明らかにする）

sayin kümün kigsen-iyen, mayu kümün idegsen –iyen（良い人はやったことを、悪い人は食事したことを）

sayin-i ni bildaučilaqu, mayu-yi ni dorumjilaqu（良い人にごまをすり、悪い人を軽視する）

sayin jam durayina, mayu jam böglerene（良い道が長いであり、悪い道が短いである）

sayin kümün-eče surulčana, mayu kümün-eče jayilana（良い人から勉強し、悪い人から避ける）

sayin kümün-du nökür olan, mayu kümün-du qorusul olan（良い人に友が多く、悪い人に憎みが多い）

sayi kümün nere-ben manduyuluna, mayu kümün nere-ben yutuyana（良い人は名を挙げる、悪い人は名を汚す）

sayin-i dayabal sayijirana, mayu-yi dayabal möküne（善に従うと良くなる、悪に従うと滅びる）

sayin keüked-tei eke ečige edür edür bayarladay, mayu keüked-tei eke ečige čay čay jobaday（偉い子供がいる両親は日々喜び、悪い子供がいる両親が時々苦しむ）

sayin ere ger-ün tulyayuri, mayu ere ger-ün daruyasu（良い男性は家の柱、悪い男は重荷）

sayin gebel minu gekü, mayu gebel busud-un gekü（良いことと言えば私のと言う、悪いことと言えば他人のと言う）

sayin mayu-yi ilyaqu ügei, qara čayan-i taniqu ügei（善悪を区別せず、白黒を認識しない）

6.2.4. 連語

モンゴル語における反義語は連語を形成する重要な方法である。「モンゴル語の中では連語は数多くあり、しかもますます増えている状態である」[6]。連語は語彙論の研究対象であり、二語から構成されていると上述したことがある。注意しなければならないことは、二語から構成されている全ての語が連語というわけではない。例えば、bi očiqu (私は行く)、 γurban qoni (三つの羊)、 tung sayin (とてもいい)、qurdun guüyüukü (早く走る)、öregen jam (広い道) などの語は全部二語から構成されても連語ではなく、普通の複合語である。反義語から構成されている連語、例えば、γar köl(手、足),γal usu (火、水)、nökür daisun (友、敵)、öndür nam (高い、低い)、oruju γarqu (入る、出る)、qalaγun küyiten (暑い、寒い)、tölkijü tataqu (押す、引く) 、nemejü qasuqu (加わる、減る) 等々である。

モンゴル語の反義語から構成された連語の特徴を例示する。

6.2.4.1. 位置の交換

6.2.4.1.1. 位置が交換できる連語

γar köl (手と足) あるいは köl γar (足と手)、 γarču oruqu (出ると入る) あるいは oruju γarqu (入ると出る)、emüne qoyina (南と北) あるいは qoyina emüne (北と南) などである。位置を交換しても意味は変わらない。

6.2.4.1.2. 位置が交換できない連語

qalaγun küyiten (暑いと寒い)、 nökür daisun (友と敵)、 qara čaγan (黒いと白い)、öndür nam (高いと低い)、 yeke baγa (大きいと小さい)、 nemejü qasuqu (足すと引く)、ebül jun (冬と夏)、erte orui (早いと遅い) などである。位置を交換すれば意味は変わるか、あるいはそういう言い方はしないのである。

6.2.4.2. 意味の特徴

同じ連語は異なる意味を示す。例えば、γal usu というモンゴル語の反義語は以下のような異なる意味を示す。

6.2.4.2.1 γal usu-yin ayul-i kečiyejü yabuγarai. (火事と水害に気をつけなさい)

6.2.4.2.2 aqa degüü qoyaγula-ban γal usu metü. (兄弟の間は仲良くない)

6.2.4.2.3 erteken sig γal usu-ban kiye. (早めにご飯を作ろう)

一番目の例文は元の意味を示しており、二番目の例文と三番目の例文は元の意味とまったく異なる意味を示している。つまり、一番目の例文は普通の火事と水害を示してお

り、二番目の例文は人々の間の仲良くない関係を示しており、三番目の例文は料理を作るという意味を示している。そのほか、ɣar köl（手と足）という反義語を分析すると次のようである。

ɣar köl ni siraɣdaju gemtüjei.（手と足はけがをした）

čerig jasaɣ-un noyad ɣar köl bolju arad tümen-i ɣasalɣana.（軍隊と政府のリーダーは相互に結託して国民を苦しめる）

前者の例文は人の手と足という元の意味を示しており、後者の例文は元の意味とまったく異なるぐるになるという意味を示している。

6.3. 教育の役割

語の意味はばらばらに存在しないで、体系として存在している。「単語は一つ一つがばらばらに存在しているのではなく、まとまりをもち、いわばネットワークをなして存在している」[7]。これは、語の重要な特徴の一つである。反義語は意味論の研究対象として、言語の体系性から離れることができない。反義語の体系性及び対立関係はその言語の語彙を教えることにも役割がある。このことを実例で証明しよう。以下は、本人の日本におけるKEC日本語学院の日本語授業の実際調査である。

調査１　場所：KEC日本語学院、　目的：留学生向けの日本語教育、　日時：２００８年５月１７日の昼のクラス（１２時から１５時まで）、　学生：留学生６人、　先生：北原恵美子（長崎出身）、　内容：形容詞を教える、　例：　高い ≑ 安い、高い ≑ 低い、暑い ≑ 寒い、大きい ≑ 小さい、暑い ≑ 冷たい、新しい ≑ 古い。

調査２　場所：KEC日本語学院　目的：留学生向けの日本語教育　日時：２００８年５月２４日の午後のクラス（１５時半から１８時半まで）、学生：留学生９人　先生：十河優子（徳島出身）、　内容：　位置名詞を教える　例：前 ≑ 後、右 ≑ 左、上 ≑ 下、中 ≑ 外。

このように教えると、学生にとって学習しやすいし、先生にとって教えやすいという両方の役割があるのは言うまでもない。教え方として、すばらしい、最高だと学生たちに認められた。

6.4. 辞典編纂の役割

辞典は参考書として、人間の学習や研究に欠かすことができないのもである。辞典を編纂する時、説明される語の意味にできるだけわかりやすく注釈を加える必要がある。その

中で、反義語の対立する特徴を使用して語の意味をわかりやすく、覚えやすく説明できる場合がある。これは、反義語の辞典学における語の注釈に対する役割である。「反義語は意味の対立関係をはっきり表しているので、辞典編纂にも参考にする価値がある」[8]。「反義語を分析することは、語の意味の注釈及び辞典編纂に役立つであろう」[9]。中国語の学者は昔から反義語の対立関係の役割を利用し語の意味を注釈したと記載している。「古代中国語では、反義語の対立関係を利用して語の意味を注釈したことは少なくないのである。これは、その語の意味を理解させるに役立を果たすであろう」[10]。モンゴル語の注釈辞典である『モンゴル語辞典』を例として挙げてみよう。本辞典で「čingүa （きつい)、buyan (善良)、 үuldu (縦)、 dooratu (下)、 kündelen (横)、 mön （肯定)、oldui (不器用な) というモンゴル語を次のように注釈している[11]。

oldui — uran-u esergü, eb dem ügei, ura düi maүutai . (巧みの反対語)

buyan — nigül-ün esergü udqa-tai üge. (罪悪の反対語)

köndelen — үuldu-yin esergü. (縦の反対語)

үuldu — köndelen-ü esergü sinji. (横の反対語)

mön — bisi-yin esergü udqa-tai batulaqu sula üge. (否定助詞の反対語)

douratu — degedü-yin esergü. (上への反対語)

čingүa— sula-yin esergü udqa-tai üge. (緩いの反対語)

[注]

1) 赤祖父哲二 1998 p. 285

2) Tangkis-nar 2007

3) 塩谷茂樹 2005 p. 1

4) 塩谷茂樹 2005 p. 1

5) Serüb 2007

6) Öbür mongүul-un yeke surүaүuli-yin mongүul kele bičig sudulqu үajar 2005 p. 816

7) 北原保雄 東郷吉男 **1988 p.1**

8) 贺水彬 1985 p. 53

9) 謝文慶 1987 p. 71

10) 孙明 1982 p. 85

11) Norjin-nar 1997 p. 415 p. 1049 p. 1507 p. 1723 p. 1882 p. 2595 p. 2754

おわりに

モンゴル語における反義語研究はモンゴル語の意味論において困難で、複雑な課題である。そのため、意味論の中で研究成果が少ない、進展が遅い分野である。本論では、筆者は新しい方法を用いて、新しい角度と視点からモンゴル語における反義語研究について体系的、詳細に分析することを目指して努めてきた。当然のことながら、本論でモンゴル語における反義語研究の全ての問題を百パーセント解決することはできないのである。今後も引き続き、モンゴル語における反義語研究について努力しようと思っている。

研究論文として、本論の独創性と発展性についてまとめ、簡単に述べようと思う。実際、これは、この研究課題にはモンゴル語における反義語について、いったい何を書き、どれくらいまで分析したかという質問に対する答えである。

独創性について：

1．本論は、初めて統計方法を使用してモンゴル語の反義語について研究しており、さらにモンゴル語の反義語研究の大きな間違い、つまりモンゴル語では形容詞反義語の数量が最も多くという結論を訂正して、動詞反義語が最も多いという結論を提出した。

2．本論は、初めて構成分析の方法を使用して、モンゴル語における単語反義語を分析しており、さらにモンゴル語における単語反義語の構造的モデルを明らかにした。

3．本論は、モンゴル語における反義語の見落とされた研究対象である連語反義語を詳しく分析しており、さらに連語反義語の構造的モデルを明らかにした。

4．本論は、初めてモンゴル語の反義語における対等性について体系的分析を行っており、さらに対等性はモンゴル語の反義語であるか否ないかを検証する基準であるという意見を提唱してきた。

5．本論は、初めてモンゴル語における反義語の意義深さについて例示しながら分析し、こういう研究を注意しなければならないという意見を示した。

6．本論は、初めてモンゴル語における反義語の多様性について例示した。この特徴は理解しにくいが、モンゴル語における反義語の重要な特徴である。

7．初めてモンゴル語の学術向けのモンゴル語反義語辞典を編集し、しかも、モンゴル語の単語反義語や連語反義語を合わせた最初のモンゴル語反義語辞典である。これは、モンゴル語における意味論だけではなく、辞典学の研究にも役立つであろう。

発展性について：

１．モンゴル語の品詞における反義語研究について、以前は名詞類の反義語と動詞類の反義語のみ研究されており、本論は名詞類の反義語と動詞類の反義語だけではなく、不変化詞類の反義語も研究した。また、名詞類の反義語と動詞類の反義語の特徴についてもできる限り分析した。

２．モンゴル語の反義語の概念について、以前の説明した概念の欠点を分析して、対等性に一致する語が反義語であるという観点を提唱した。

３．モンゴル語の反義語と類義語の相互関係について、過去の分析を基に、その研究を図式化して、さらに反義語と類義語の相互関係によっていくつかの反義語を形成するかの数量計算の公式を提出した。

４．モンゴル語の過渡的意味による分類について、以前の説明したことを基に、両極反義語と相補反義語の概念と特徴について図式化して説明した。これは、この二種類の反義語の区別や特徴について理解しやすくするだろう。

５．モンゴル語の反義語の役割について、以前は反義語の使用の役割について簡単に説明してきた。本論は、モンゴル語の反義語の使用の役割だけではなく、形成の役割、教育の役割、辞典編纂の役割についてなるべく詳しく分析して説明した。

６．モンゴル語の反義語の例において誤っている例を訂正して、更にその誤っている理由を分析した。以前は、主にモンゴル語における反義語の対等性について言及されなかったので、色々な間違いが出てきた。

７．モンゴル語における反義語のオトハラソ(udqalasu)による分類について、以前の分類は以下の通りである。

一つのオトハラソにおける反義語
- 一つのオトハラソにおける一つの反義語
- 一つのオトハラソにおける複数の反義語

本論のオトハラソによる分類は以下の通りである。

- 反義語
  - 一つのオトハラソにおける反義語
    - 一つのオトハラソにおける一つの反義語
    - 一つのオトハラソにおける複数の反義語
  - 複数のオトハラソにおける反義語
    - 一つの語の複数のオトハラソにおける反義語
    - 反義語の複数のオトハラソにおける反義語

以上は、本論の独創性と発展性についてのまとめである。

謝辞

光陰矢のごとし。日本に留学して四年になりました。この四年間、学業だけではなく、日本での生活面に至るまで助けて頂きました。また研究論文を仕上げる際は、何度も助言下さり、丁寧に訂正して下さった指導教員の塩谷茂樹先生及び前の指導教員の橋本勝先生に心から感謝の気持ちをお伝えしたく存じます。私の博士論文に関し、貴重なご意見を下さった副指導教員の角道正佳先生と岸田文隆先生にも心から感謝致します。また、いつも色々な点で親切に協力してくれた後輩の博士課程在籍のバダマハンドさん及び論文の日本語について丁寧に添削してくれた私の知人、内田孝さんに心から感謝します！

参考文献

モンゴル語文献

Engkemendü mongγul kelen-u esergü udqa-tai üge-yin ončaliγ sinji ba ilerekü bayidal-yi ajiγlaqu ni sangdu-yin undurul 1983/1

Osur orčin čaγ-un mongγul kelen-u qursiya üge-yin bötüčc ba köriye kebčiye mongγul kele sinjilegen-u ögülel-üd(I) 1985

Osur orčin čaγ-un mongγul kelen-u qursiya üge-yin tuqai jarim asaγudal mongγul kele sinjilegen-u ögülel-üd dawataγ ba öbür mongγul-un arad-un keblel-ün quriya 1987

Öbür mongγul-un yeke surγaγuli-yin mongγul kelebičig sudulqu γajar odu üye-yin mongγul kele、öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriya、2005

Öbür mongγul-un yeke surγaγuli-yin mongγul kele bičig sudulqu γajar : mongγul qitad toil bičig öbür mongγul-un yeke surγaγuli-yin keblel-ün qoriya、1999

Norjin mongγul kelen-ü üge bötügekü daγaburi-yin quriyangγui öbür mongγul-un surγan kömüjil-ün keblel-ün qoriya 2001

Norjin-nar mongγul kelen-ü toli öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriya 1997

Bao qing shan Nere tomiyan-u nerelelte ba barimjiyalalta-yin jarčim-un tuqai mongγul nere tomiyan-u ögülel-üd öbür mongγul-un öbertegen jasaqu orun-u mongγul nere tomiyan-u komin öbür mongγul –un surγan kömüjil-ün keblel-ün qoriya 1991

Bao zhi hong mongγul kelen-u esergü udqa-tai üge-yin tuqai kele sudulul 1983/4

Bao zhi hong mongγul kelen-u esergü udqa-tai üge-yin tuqai öčüken ajiγlal mongγul kele bičig 1985,1

Bandi mongγul kelen-ü eserkü udqa üge-yin tobuči toli ulanbaγatur 2002

Bandi mongγul kelen-u esergü nere-yin tuqai sinjilekü uqaγan amidural 1978/5

Baγatur mongγul kelen-ü üges-un sang sinjilege ündüsüten-u keblel-un qoriya 1988

Batuiregedüi mongγul kelen-ü üge udqa-yin sang ulaγanbaγatur 2008

Batuiregedüi mongγul kelen-u qorsiya üge-yin tobči toli bičig ulaγanbaγatur 2008

Batugerel esergü udqa-tai üge-yin ündüsün učir kele ba orčiγulγa 1993/4

Batugerel mongγul kelen-ü üge-yin udqa sudulul öbür mongγul-un suγul-un keblel-ün

qoriya、2000

Badmadurji orčin čaγ-un mongγul kelen-ü udqa sudulul-un ündüsü ulaγanbaγatur 1997

Badmaduji mongγul kelen-ü esergü udqa-tai üge-yin sudulqu asaγudal mongγul ulus-un yeke surγaγuli-yin erdem sinjilegen-u bičig XXV248 2005

Boγču esergü udqatu üge-yin egüsün börildükü-yin učir baraγun qoyitu-yin ündüsüten-ü yeke surγaγuli-yin erdem sinjilegen-ü sedkül 2004,1

Boγču esergü udqatu üge oyiralčaγa udqatu üge jiči qariya udqatu üge-yi udqa element-ber jadalju sinjilekü ni öbür mongγul-un neyigem-ün sinjilekü uqaγan 2002,5

Boγču esergü udqatu üge-<degere-- doura>yin sonirqaltai asaγudal-ača mongγul kele bičig 2006,2

Boγču esergü udqatu üge-yin tengčegü činar öbür mongγul-un neyigem-ün sinjilekü uqaγan 2003/5

Boγču mongγul kelen-ü esergü udqatu qolbuγa üge-yin tuqai öbür mongγul-un ündüsüten-ü yeke surγaγuli-yin erdem sinjilegen-ü sedkül 2003,2

Boγču mongγul kelen-ü kereglegen-ü esergü udqatu üge-yin asaγudal-du mongγul kele bičig 2002,11

Boγču mongγul kelen-ü dang üge-yin esergü udqatu ügen-ü bötüče-yin487 ončaliγ mongγul-un sudulul 2002,1

Bolur Mongγul kelen-u qorsiya üge-yin udqa čidamji-yin tuqai mongγul kele bičig sedkül 2007,9

Qaserdeni- nar orčin čaγ-un mongγul kele öbür mongγul-un surγan kömüjil-ün keblel-ün qoriya,1996

Qaserdeni -nar mongγul kelen-ü ündüsü girin-u arad-un keblel-ün qoriya 1977

He lian xi mongγul kelen-ü üge-yin olan udqa-yin sudulul öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriya 2002

Gereltü mongγul bičig-ün kele jüi-yin suddulul、öbür mongγul-un yeke surγaγuli-yin keblel-ün qoriya、1998

Mönggün esergü udqa-tai üge ba sürgeü udqa-tai üge mongγul kele udqa jokiyal

1986,3

Lobsangwangdan orčin čaγ-un mongγul kele öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriya 1961

Lobsangwangdan mongγul kelen-ü oyiralčaγa üge-yin tobči toli öbür mongγul-un surγan kömüjil-ün keblel-ün qoriya 1985

Sampildandab esergü nere-yin udqa-yin ončaliγ-ača sinjilekü uqaγan amidural 1976,4

Sečen bulu kelen-ü sinjilel-ün nere tomiyan-u tayilburi Öbür mongγul-un surγan kömüjil-ün keblel-ün qoriya 1996

Sečen delgerma udqa jüi、 öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriya、 2000

Serüb mergen üge-yin tegübüri ündüsüten-ü keblel-ün qoriya 2007

Tangkis-nar Onisuγa öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriya 2007

Temurčerin mongγul kelen-ü uge-yin sang-un sudulul Öbür mongγul-un surγan kömüjil-ün keblel-ün qoriya 2004

Tedke kele sinjilel-ün tobčiyan öbür mongγul-un yeke surγaγuli-yin keblel-ün qoriya、 1987

Toγuγa-nar orčin üye-yin mongγul kele öbür mongγul-un baγačud keüked-ün keblel-ün qoriya 1993

Törgen -ner Orčin čaγ-un mongγul kelen-ü sudulul Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriya 1988

Delgerma mongγul kelen-ü udqa sudulul liao ning-un ündüsüten-ü keblel-ün qoriya、 2001

Rinčin üge-yin udqa učir öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriya、 1956

Jambalsürüng nar Orčin čaγ-un mongγul kelen-ü üges-ün sudulul-un ündüsü Öbür mongγul-un surγan kömüjil-ün keblel-ün qoriya 1990

Tulγaγuri mongγul kelen-ü udqa esergü üge-yin ončaliγ-yi sinjikü ni mongγul kele bičig 1993/4

Delgerma mongγul kelen-ün udqa sudulul liao ning-un ündüsüten-ü keblel-ün qoriya 2001

Čenggeltai odu üye-yin mongγul kelen-u jui(nemen jasaγsan debter)、 öbür mongγul-un

arad-un keblel-ün qoriya、1999

Yuan chao- nar mongɣul kele sinjilel-ün toli liao ning-un ündüsüten-n keblel-ün qoriya 1992

Rinčin üge-yin udqa učir öbür mongɣul-un arad-un keblel-ün qoriya 1964

Rinčin mongɣul bičig-ün kelen-ü jüi öbür mongɣul-un arad-un keblel-ün qoriya 1988

Rinčin mongɣul kelen-ü esergü udqa büküi üges-ün tuqai ögülekü ni mongɣul kele jokiyal teüke 1960/7

日本語文献

池上嘉彦　意味の世界、日本放送出版協会　２００６

池上嘉彦　意味論　大修館書店　１９７５

井上尚美他　一般意味論　河野心理教育研究所出版　１９７４

大野晋　日本・日本語・日本人、株式会社新潮社　２００７

沖森卓也他　図解日本語　三省堂　２００６

加藤彰彦他　日本語概説　桜楓社　１９８９

金水敏他　意味と文脈　岩波書店　２０００

蒲谷宏他　敬語表現教育の方法　大修館書店、２００６

工藤浩　他編　日本語要説、ひつじ書房　１９９５

国廣哲弥　意味論の方法　大修館書店　１９８２

坂原茂　松本裕治　意味　岩波書店　１９９８

佐藤信夫　意味の弾性　岩波書店　１９８６

柴田武　現代日本語　朝日新聞社　１９７６

白井賢一郎　形式意味論入門　産業図書　１９８５

中右実　認知意味論の原理　大修館書店　１９９４

西尾寅弥　現代語彙の研究　明治書院　１９８８

前田とみよし　国語語彙史研究　明治書院　１９８５

松井栄一　日本語新辞典、小学館　２００１

森岡健二　語彙の形成、明治書院、１９８７

山内洋一郎　国語概論　和泉書院　１９８２

渡辺　実　日本語概説　岩波書店　２００８

R・A・ウォルドロン著築島謙三訳　意味と意味の発展　法政大学出版局　１９９０
ジェフリーリーチ編、安藤貞雄訳　現代意味論　　研究社　１９７７
ジェフリ・リーチ編　内田種臣他訳　意味論と語用論の現在　理想社　１９８６
ジョージ・レイコフ著　池上嘉彦他訳　認知意味論　紀伊国屋書店　１９９３
トゥリオ・マーウロ著　竹内孝次訳　意味論序説　朝日出版社　１９７７
フランクR・パーマー著　川本喬訳　意味論入門　白水社　１９７８
ルドルフ・カルナップ編　永井成男他訳　意味と必然性　紀伊国屋書店　１９７４

中国語参考文献

曹炜　现代汉语词义学　学林出版社 2001 年
陈满华　词义之间的关系与同义词　反义词的构成　汉语学习 1994 年 第 2 期
戴耀晶　论词的反义关系杭州大学学报 1988 年 2 期
范晓 贺国伟 主编　反义词小词典　上海辞书出版社　1999 年
符淮青　词义的分析和描写　语文出版社 2000 年
傅朝阳　怎样找反义词　语文学习　1980 年　第 5 期
甘为生　反义词和同义词关系刍议　语言文学　1984 年 第 1 期
顾明华　语义对立和反义词外国语 1985 年 第 4 期
广达　林玉　反义词划界浅探　阴山学刊　1990 年 第 2 期
郭定泰　翻译言语中词的反义组合 外语学刊 1989 年 第 5 期
韩敬体　反义词词典　四川人民出版社 1989 年
贺水彬　反义词三论　辽宁师范大学学报 1985 年 第 1 期
黄晓苑　词汇与文化　嘉应大学学报 2000 年 第 8 期
贾彦德　汉语语义学 北京大学出版社　1998 年
兰玉英　反义连文词语研究　内江师专学报 1998 年 第 3 期
李峰 同义近义反义多音多义字词典　人民日报出版社 2003 年
李福印 语义学概论　北 京大学出版社 2006 年
李丽君　从义素分析法看反义词聚的构成和范围　汉语学习 1989 年 第 4 期
林彦凤　反义词辞典 吉林人民出版社 2003 年
刘叔新　周荐　同义词语和反义词语　商务印书馆　2000 年
马学良　普通语言学 中央民主大学出版社 1997 年

倪宝元 反义词的修辞作用 语文知识 1957年 第 9期
钱旖云 反义词定义刍议 语文学习 1982 年 第11期
沈然 同义词 反义词词典 新疆青少年出版社 2003年
石安石 语义研究 语文出版社 1998年
束定芳 现代语义学 上海外语教育出版社 2000
孙良明 反义词 语文学习 1958年 第 1期
孙明 反义词浅说 西南民族学院学报 1982年 第 1 期
谭达人 略论反义相成词 语文研究 1989 年 第1期
唐志超等 同义词 反义词词典 延边大学出版社 2002年
王德春 语言学概论 上海外语教学出版社 1997年
王立廷 浅谈反义词的特点和定义 山东师范大学学报 1986 年 第4期
王振昆 谢文庆 反义词的意义分析 天津师范学院学报 1982年第 3期
魏昆 同义词和反义词 语文学习 1956 年 第 11期
武占坤 略谈多义词和反义词的关系 语文学习 1958年 第1期
武占坤 王勤 现代汉语词汇概要内蒙古人民出版社 1983
谢文庆 反义词 湖北教育出版社 1988年
谢文庆 现代汉语反义词的关系 语言教学与研究 1987年 第2期
谢文庆 怎样确定反义词的范围 语言教学与研究 1986年 第 1期
徐烈炯 语义学 语文出版社 1990 年
许威汉 二十世纪的汉语词汇学 书海出版社 2002年
许正勋 反义词词典 延边人民出版社 2002年
徐志民 词义关系和聚合关系 语文论丛（8） 上海教育出版社 2004年
言寺 每个词是不是一定有个反义词 语文学习 1960年 第2 期
杨晓安 单音节反义形容词语义转换的条件 西北大学学报 1987年第2期
扬之舟 否定词的反义词 中国语文 1981年 第2期
姚春青 反义词词典 内蒙古人民出版社 2004年
叶蜚声等 语言学纲要 北京大学出版社 2000年
于根元等 语言漫话 上海教育出版社 1981年
袁晖 新华反义词词典 商务印书馆 2003年
张长松 反义词词典 延边大学出版社 2003年

张德鑫　谈汉语的正反词　语言教学与研究　1986 年 第 1 期
张拱贵　反义词及其在构词上和修辞上的作用　中国语文　1957 年 第 8 期
张建理 标记性和反义词 外国语 1999 年第 3 期
张庆云 词汇新研究 语文出版社 1996 年
张晰 反义词与有无标记现象　河南师范大学学报 1990 年 第 2 期
张志毅 张庆云 词汇语义学　商务印书馆 2001 年
赵克勤　古汉语反义词浅论语文研究 1986 年 第 3 期
仲崇山 反义语素对反义词的制约和影响　大庆高等专科学校学报 1996 年 第 8 期
周荐　　词汇论著　商务印书馆　2004 年
周荐　二十世纪现代汉语词汇论著指要　商务印书馆　2004 年
朱文献　反义词对举的灵活性　语文学习　1980 年 第 5 期

辞典類

愛知大学中日大辞典編纂処　　中日大辞典　　大修館書店　１９９４
相原茂　日中辞典　　講談社　　２００６
赤祖父二哲他　　日・中・英言語文化辞典　マクミランランゲージハウス`２０００
荒井伸一　　日本語モンゴル語辞典　　ウランーバートル　１９９９
伊地智善継　　中国語辞典　　白永社　２００２
内モンゴル大学モンゴル語研究所　　蒙漢辞典　　内モンゴル大学出版社　１９９９
大東文化大学中国語大辞典編纂室　中国語大辞典　　角川書店　　１９９３
小沢重男　現代モンゴル語辞典　　大学書林　　１９９４
香坂順一　簡約現代中国語辞典　　光生館　　１９９０
北原保雄　　東郷吉男　反対語対照語辞書　　東京堂出版　　１９８８
塩谷茂樹　　モンゴル語ことわざ用法辞典　　大学書林　２００５
徳廣弥十郎　　日蒙漢辞典　　ビブリオ　　１９９８
橋本勝　　現代モンゴル語日本語辞典　春風社　２００１

ダムバダルジャ・ナランツェツェグ　日本語モンゴル語基礎語辞典　大学書林　１９９８
張淑栄　中日漢語対比辞典　　ゆまに書房　１９８７
ボラグ　漢蒙熟語辞典　内モンゴル人民出版社　１９９２

モンゴル語の反義語辞典について

辞典は参考書として、学術研究のためだけではなく、日常生活にもよく使用される。また、辞典は実践的なものとして、理論的研究の基礎になる役割がある。モンゴル語の辞典は民族文化の重要な部分として、歴史は長く、しかも種類も多いのである。「国家にとって、辞典の発展はその民族文化発展のシンボルである」と述べている[1]。

本書は学術研究向けの辞典である。辞典を編纂することは、骨の折れる大変な作業だが、モンゴル人の学者達は800年ほど前の元朝から、『至元訳語』や『華夷訳語』などの翻訳の辞典を編纂することから始め、これまで、様々な種類の辞典が編纂されており、モンゴル語やモンゴル文化の発展を進めてきた。この『モンゴル語反義語辞典』は、反義語研究だけではなく、モンゴル語の辞典学にも微力ながら尽力することを目指し、編集したものである。

本書の反義語は、『モンゴル語辞典』[2]より選択した。

本書は、モンゴル語のアルファベットの順番に並べ、注釈を付した。

本書は、上部と下部という二つの部分から構成されている。つまり、上部は単語における反義語であるが、下部は連語における反義語である。

本書では、単語反義語は540組であり、連語反義語は120組であり、合わせて660組の反義語である。

本書の反義語の注釈は、『モンゴル語辞典』[3]の注釈に基づき注釈を付した。

本書はわかりやすく提示するため、なるべく簡単に注釈することに注意した。

[注]

1）Norjin-nar　1997 p.1

2）Norjin-nar　1997

3）Norjin-nar　1997

[illegible] :: [illegible] ~ :: [illegible] ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible]

ᠡᠯᠪᠡᠭ — ᠠᠷᠪᠢᠨ ᠃

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ ::
[illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ [illegible] :: ~ [illegible]

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ᠃ ～ [illegible] ᠃ ～ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] ᠃ ～ [illegible] ᠃ ～ [illegible] ᠃
[illegible] ᠃ ～ [illegible] ᠃ [illegible] ～ ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] ᠃ ～ [illegible] ᠃ ～ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] ᠃ ～ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] ᠃ [illegible] ～ ᠃ ～ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] ᠃ [illegible] ～ ᠃ [illegible] ～ ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] ᠃ [illegible] ～ ᠃ ～ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] ᠃ ～ [illegible] ᠃ ～ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] ᠃ [illegible] ～ ᠃ ～ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: [illegible] ~ ::
[illegible] ~

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: [illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: [illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: [illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠃ ~ ᠃ ~ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠃ ~ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠃ ~ ᠃ ~ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠃ ~ [illegible] ᠃ ~ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠃ ~ [illegible] ᠃ ~ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠃

[illegible] ~ ᠃ ~ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠃ ~ ᠃ ~ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠃ ~ ᠃ ~ [illegible] ᠃

[illegible] ~ [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] ~ ::

ᠬᠠᠷᠠᠩᠭᠤᠢᠯᠠᠬᠤ — ᠭᠡᠷᠡᠯᠲᠦᠭᠦᠯᠬᠦ ᠃

[illegible] ~ [illegible] ::

ᠬᠠᠷᠠᠩᠭᠤᠢ — ᠭᠡᠷᠡᠯᠲᠡᠢ ᠃

[illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

ᠬᠠᠷᠠᠩᠭᠤᠢᠷᠠᠬᠤ — ᠭᠡᠷᠡᠯᠲᠡᠬᠦ ᠃

[illegible] ~ ::
[illegible] ~ ::

ᠬᠠᠷᠠᠯ — [illegible] ᠃

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible] :: [illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

~[illegible] [illegible] :: ~ [illegible] [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ :: [illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] ::
[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ [illegible] ~ [illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ [illegible] ~

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ [illegible] ~ [illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ [illegible] ~ [illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ [illegible] ~ [illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ [illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ [illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ [illegible] ~ [illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ [illegible] ~

[illegible] — [illegible]

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] ᠤ [illegible]᠃ ~ [illegible] [illegible]᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible]᠃ ~ [illegible]᠃ ~ [illegible]᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible]᠂ [illegible]᠃ ~ [illegible]᠃ ~ [illegible]᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible]᠃ ~ [illegible]᠃ ~ [illegible]᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible]᠃ ~ [illegible]᠃ ~ [illegible]᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible]᠃ ~ [illegible]᠃ ~ [illegible]᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible]᠃ ~ [illegible] ~ [illegible]᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible]᠃ ~ [illegible]᠃ ~ [illegible]᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible]᠃ ~ [illegible]᠃

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

ᠨᠠᠰᠤᠲᠠᠢ — ᠵᠠᠯᠠᠭᠤ

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

ᠨᠠᠢᠵᠠ — ᠳᠠᠶᠢᠰᠤᠨ

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: [illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::
[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible] ~ [illegible] ~ [illegible] ~ [illegible] ᠄

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible] ~ [illegible] ᠄

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible] ~ ᠄ [illegible] ~ [illegible] ~ ᠄

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible] ~ [illegible] ~ ᠄

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible] ~ [illegible] ~ ᠄

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible] ~ ᠄ [illegible] ~ ᠄

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible] ~ [illegible] ~ ᠄

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible] ~ ᠄ [illegible] ~ ᠄ [illegible] ~ ᠄

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible] ~ ᠄ ~ [illegible] ~ ᠄

[illegible] — [illegible] ᠃

[illegible] ~ [illegible] ᠄

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] ~ ::

[illegible] ~ :: [illegible]

[illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] ~ ::

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ᠪᠠᠭ᠎ᠠ — ᠶᠡᠬᠡ

[illegible]

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ [illegible] ~

[illegible] ~ [illegible] ~

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ [illegible] ~ [illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ ~ [illegible]

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ [illegible] ~ [illegible]

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ [illegible] ~ [illegible]

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ [illegible] ~

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ [illegible] ~ [illegible]

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ [illegible]

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ [illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄

[illegible] — [illegible]

[illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄

[illegible] — [illegible]

[illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄

[illegible] ᠃ ~ [illegible] ᠃ ~ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] ᠃ ~ [illegible] ᠃ [illegible] ~ ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] ᠃ [illegible] ~ ᠃ ~ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] ᠃ ~ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] ᠃ [illegible] ~ ᠃ ~ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] ᠃ ~ [illegible] ᠃ ~ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] ᠃ ~ [illegible] ᠃ ~ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] ᠃ [illegible] ~ ᠃

[illegible] — [illegible] ◆

[illegible] ᠃ ~ [illegible] ᠃ [illegible] ~ [illegible] ᠃

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ᠁ [illegible] ~ [illegible] ᠁

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ᠁ [illegible] ~ ᠁ ~ [illegible] ᠁

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ᠁ ~ [illegible] ᠁ [illegible] ~ ᠁

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ᠁ [illegible] ~ ᠁ ~ [illegible] ᠁

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ᠁ ~ [illegible] ᠁

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ᠁ ~ [illegible] ᠁ ~ [illegible] ᠁

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ᠁ [illegible] ~ ᠁ [illegible] ~ ᠁

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ᠁ ~ [illegible] ᠁

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ᠁ ~ [illegible] ᠁

[illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ,

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ,

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ,

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

ᠠᠮᠤᠭᠤᠯᠠᠩ — ᠪᠠᠢᠯᠳᠤᠭᠠᠨ ,

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ,

[illegible] :: [illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ,

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ,

[illegible] :: ~ [illegible] ::
[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ,

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] ~ : ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: [illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: [illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible]

[illegible] —— [illegible] ᠃

[illegible]

[illegible] —— [illegible] ᠃

[illegible]

[illegible] —— [illegible] ᠃

[illegible]

[illegible] —— [illegible] ᠃

[illegible]

[illegible] —— [illegible] ᠃

[illegible]

[illegible] —— [illegible] ᠃

[illegible]

[illegible] —— [illegible] ᠃

[illegible]

[illegible] —— [illegible] ᠃

[illegible]

~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: [illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: [illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

ᠪᠠᠶᠠᠷ — ᠵᠢᠷᠭᠠᠯ •

[illegible]

ᠪᠠᠶᠠᠰᠬᠤ — ᠵᠢᠷᠭᠠᠬᠤ •

[illegible]

ᠪᠠᠶᠠᠯᠢᠭ — [illegible] •

[illegible]

ᠪᠠᠶᠠᠨ — [illegible] •

[illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] ~ ᠉

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠉ [illegible] ~ ᠉ ~ [illegible] ᠉
[illegible] ᠂ [illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠉ ~ [illegible] ᠉

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠉ ~ [illegible] ᠉ ~ [illegible] ᠉

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠉ [illegible] ~ ᠉ ~ [illegible] ᠉

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠉ ~ [illegible] ᠉ ~ [illegible] ᠉

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠉ [illegible] ~ ᠉ ~ [illegible] ᠉

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠉ ~ [illegible] ᠉

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠉ ~ [illegible] ᠉ [illegible] ~ ᠉

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: [illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: [illegible] ~ ::
[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] [illegible]᠂ [illegible] [illegible] [illegible]᠃ [illegible] ~ ᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] [illegible] [illegible]᠃ [illegible] [illegible] [illegible] ~ ᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]᠃ ~ [illegible]᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]᠃ ~ [illegible]᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] [illegible] [illegible]᠃ ~ [illegible]᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]᠃ ~ [illegible]᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]᠃ ~ [illegible]᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] [illegible]᠃ [illegible] ~ ᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]᠃ [illegible] ~ ᠃

[illegible] — [illegible]᠂

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠄ [illegible] ~ ᠄

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠄ [illegible] ᠄ [illegible] ~ ᠄

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄

[illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄

[illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄

[illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄ ~ [illegible] ~ ᠄

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠄ [illegible] ~ [illegible] ~ ᠄

[illegible] — [illegible]

[illegible] ᠄ [illegible] ~ ᠄ [illegible] ~ ᠄

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ᠄ ~ [illegible] ᠄ [illegible] ~ ᠄

[illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

[illegible]

[illegible] — [illegible] •

~ [illegible] :: [illegible] ~ ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: ~ [illegible] ::
[illegible] :: ~ [illegible] ::
[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: [illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: [illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible] — [illegible] .

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: [illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] :: ~ [illegible] ::
[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] ~ ::
[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::
[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] ~ ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] ~ [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: [illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: [illegible] ~ 8 ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: [illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] ::
[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible],

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible],

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible],

[illegible] :: ~ [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible],

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible],

[illegible] :: [illegible] ~ :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible],

[illegible] :: [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible],

[illegible] :: ~ [illegible] ~ ::

[illegible] — [illegible],

[illegible] :: ~ [illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible],

[illegible] :: ~ [illegible] ::

[illegible] ~ [illegible] ᠉
[illegible] ᠉ ~ [illegible] ᠉
[illegible] ᠉ ~ [illegible] ᠉
[illegible] ᠉ ~ [illegible] ᠉

[illegible] — [illegible] ᠈

[illegible] ᠉ [illegible] ~ ᠉

[illegible] — [illegible] ᠈

[illegible] ᠉ [illegible] ~ ᠉

[illegible] — [illegible] ᠈

[illegible] ᠉ ~ [illegible] ᠉

[illegible] — [illegible] ᠈

[illegible] ᠉ [illegible] ~ ᠉

[illegible] — [illegible] ᠈

[illegible] ᠉ [illegible] ~ ᠉ [illegible] ~ ᠉

[illegible] — [illegible] ᠈

[illegible] ᠉ [illegible] ~ ᠉

[illegible] — [illegible] ᠈

[illegible] ᠉ [illegible] ~ ᠉

[illegible] — [illegible] ᠈

ᠲᠣᠪᠴᠢᠶᠠᠨ — ᠬᠡᠰᠡᠭ᠂

ᠪᠢᠴᠢᠭ ᠦ ᠲᠣᠭᠠ ᠬᠤᠤᠰᠤᠨ ᠪᠠ ᠪᠠᠷᠠᠭᠰᠠᠨ᠄ ~ ᠲᠠᠯᠠ᠄ ~ ᠭᠠᠷ᠄

~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] ~ ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] .

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible]

ᠰᠣᠶᠣᠯ ᠭᠡᠷᠡᠯᠲᠦ — ᠪᠢᠴᠢᠭᠯᠡᠯ ᠤᠨᠤᠰᠬᠠᠲᠤ᠂

ᠬᠦᠰᠡᠯ ᠭᠦᠢᠴᠡᠳᠬᠡᠯ — ᠪᠤᠶᠠᠨ ᠪᠣᠯᠤᠨ᠎ᠠ᠂

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] ~ ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] ~ ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] •

[illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]
[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]
[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ [illegible]
[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible]
[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]
[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

ᠪᠠᠶᠠᠷ ᠪᠠᠶᠠᠰᠬᠤᠯᠠᠩ — ᠭᠠᠰᠠᠯ ᠵᠣᠪᠠᠯᠠᠩ ᠂

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] ~ [illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible] ~ [illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] ~ [illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] ~ [illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

~ [illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible] ~ [illegible]

[illegible] — [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] —— [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] —— [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] —— [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] —— [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] —— [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] —— [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] —— [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ [illegible] ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] ~ ::
[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ·

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ::

[illegible] ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible]

[illegible] ::

~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ::

[illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ::

[illegible] ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ::

~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ::

[illegible] ~ [illegible] ::

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ::

[illegible] ~ [illegible] ::

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible]

~ [illegible] ᠉ [illegible] ᠉

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ᠉ [illegible] ᠉

[illegible] — [illegible] ᠂

~ [illegible] ᠉ [illegible] ᠂ [illegible] ᠉

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ᠉ [illegible] ᠂ [illegible] ᠉

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ᠉ [illegible] ᠉

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ [illegible] ~ [illegible] ᠉ [illegible] ᠂ [illegible] ᠉

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible] ~ ᠉ [illegible] ᠉

[illegible] — [illegible] ᠂

[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]